
GOD EATER LINK

幻影の疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R L I N K

【Nコード】

N 2 8 6 8 T

【作者名】

幻影の疾風

【あらすじ】

荒ぶる「神」によって全てを喰われた世界、人類最後の希望である、「神を喰らう者」達の戦い…そして、とある場所で、一人の少女の運命が、静かに動き出す…誰も知られずに…2069年のドイツ支部を舞台に、新型神機使いの誕生と同時に、一つの黒歴史が、全てを繋げ、隠された戦いの歴史が、今幕をあけようとしている…

序章 ？がり（前書き）

2069年、本部は近接式と遠距離式の性能を併せ持つ「新型神機使」の完成と同時に「新型神機使」を確保。

これは、フェンリル本部が世界に一般公開されていない彼女達の戦い、そして事件を描いた黙示録である……。

序章 ？がり

2050年、「それ」は人類の繁栄に歯止めを掛けるように、世界中から現れ、襲い掛かってきた。我々はこれをアジア大陸の極東の伝承に残る、八百万の神に喩えて「アラガミ」と名づける。

2052年、人類はアラガミによって次々と尋常にはならない被害に襲われ、連合軍は武力で解決を試みるが無力。もはや成す術もないと絶望を仕掛けていた。

2056年、ついに人類は「神」に対抗すべく製薬会社「フェンリル」の独自の長き研究の末、「マーナガラム計画」の成果から新たな戦力を生み出すことに成功。名を、

——「ゴッドイーター」——

2060年、「ゴッドイーター」の登用でわずかながら人類に終末の歯止めが掛かり、世界中で人類の防壁となるフェンリルの支部を健立。

2067年、極東支部にて人類安息の地となる超巨大アーコロジ―建設プロジェクト、「エイジス計画」の途中、急激にアラガミ出現率が倍増、世界トップに。我々はこれを疑問に感じ調査を行おうとするが、ヨハネス・フォン・シックザール支部長の意向により中断。

2071年、ヨハネス・フォン・シックザール支部長主導の「エイジス計画」が偽装だと判明、人工に育成したノヴァの捕食で地球完全再生、その合間にシックザールによって選ばれた千人を次なる新世界の種として生かされる「アーク計画」を、全世界に発表する。その中、シックザールに選ばれてない本部はなすすべもなくその男の野望を見届けるしかできないかと一時期絶望していたが、思いも寄らずに極東の第1部隊がアーク計画を阻止、世界は救われた。

これを機に我々は今後、このような反逆を起こさぬ様「神機使い」の更なる強化、忠実感を仕立て上げ、絶対なる戦力を造りださなければならぬ。

何としても、奴ら（・・・）より先に手にしなければならない。あの力を。

2069年の、あの事件をきっかけに――

――フェンリル本部

最高機密計画報告書――

……ここはどこだ……？

何故ここに……？

眠いの……

眠れない…。

それに何だ、この…

剣は？

剣なのに生きてる様に、

……暖かい。

…暖かい？

ああ、そうだった。

私は…

人間だったんだな。

…あれ、

私は……？

誰？

私は…

バババババババババ…

「…ん。」

いつまでも鳴り止まない雑音に、少女はゆっくりと眼を開けだした。

眠りから目覚めた少女は、少しずれた眼鏡をかけ直し、ぼやけていた視界がはつきりと見えだす。しかしまだ寝ぼけているのか、ここは何所なのか分かりにくい。周りには、左右に外が一望できるほどの景色が写り、それぞれ前後には席が並んでいた。

景色には、スクロールに流れているが、どこまでも続く砂漠と、そこに埋もれたり、虚しくただずむ廃墟が次々と立ち並んでいた。そして辺りを見回すと、理解する。

（そうだった、まだへりの中だったな。）
ようやく気づく。そして少女の視線に、それぞれ四人の人間が映っていた。

四人はその席に座っており、それぞれ何かをしている。一人は剣の刃を梳いたり、一人は何かのカタログを熱心に読んで考え込んだり、また一人は手に持っている鏡で髪を梳かしていたり、そして一

人はただ景色を眺めていた。

ただ1つ、少女を含む五人が共通しているのは、一人ずつ片方の腕に赤い腕輪を着けている、ことだ。

そして先程から少女の右側に強風が流れているのを感じていたのか、少女の髪を荒振り流す。少女は思わずドアを閉め、強風でボサボサになった黄褐色の髪を整えなおす。

そして左肩に背負っている物に視線を向ける。それはどこが現実としてはありえない物だった。

一見するとそれは剣にも見えるが、それだけでは説明はつかない。矛には銃が着いていたり、半分に分かれている盾が左右に取り付けられていたり、一般とは創造が違う武器であった。少女はこの武器を自分の膝に置く。しかし少女は頭身を越える武器を片手で持ち上げ、あっという間に膝に置いた。

並みのなら簡単にできるはずもなく、逆に武器の巨体が持つ者に重量で潰されて身動きできない状態になる。

膝に置いた武器を今度は右手で軽く、置いた。すると、その武器から彼女に、生命の鼓動を感じさせた。

「やっぱり、いつになっても暖かいな、こいつは。」

我が子を見守るような、優しい母親の顔を、静かに浮かべていた。少女にとっては今この時、安らぎの休息になっていた。

「…そろそろか。」

「目的地まで、後400メートル！目標の総数…ミッション通りにおよそ50以上！」

「ターゲットは、オウガテイル、ザイゴード、コクーンメイデン、コンゴウ、クアトリガ、ボルグ・カムラン、サリエル、他墮天種多数！」

景色を眺めていた筋肉質の大男が何かを察したと同時に、ヘリの操縦者が報告する。すると先程まで趣味に取り組んでいた三人と彼女の目つきが変わる。同時に雰囲気緊張感が走り出す。

「50以上かあゝゝゝ。多いな。」

「はい、四年前のロシアによる掃討作戦以来ですね。」

「…フン。」

三人は驚いてはいるが、それに恐怖というものはあまり感じてないようだ。

「いよっし！これもまた、このロンメル・メテオマン様の英雄伝説の1ページを刻むのに、丁度良いネタになるぜ！」

「またか。」

青い炎のガラを刻まれた、紅色のマントを身にまとった、髪型が銀髪で身なりが整ってなく、奇妙な髪型をした青年に見える「ロンメル・メテオマン」が席から勢いよく立ち上がり、片手を高く上げ、

誇らしげに言う。

「フン、くだらん。」

「ん？」

「所詮「神」と偽ってる化け物共に鉄槌を下せば良いだけなのに、まだ判らんのか？」

ギョロ目が特徴で、女性の様に長く黒い髪を綱状に纏めており、歳はロンメルより若々しさがあるが、冷静に彼をにらむ。まるで中国人に見える、「ロン・リー」が厳しく言う。

「んだよぉ、またか。お前だって、そいつ等ばっか構ってんじや、孤立してて虚しいだけだぜ？」

「それが俺の使命なら、他に何も望まない。」

何やらロンメルがロンにちょっかいをだし、ロンがそれを直轄に返している。

「二人とも、今回は大群なんですよ？お気持ちは分かりますけど、ここは皆で協力しなきゃ無事に帰れませんよ？」

場違いではないかと思うほど、豪華なドレスを身にまとい、髪は身体を超えるかもしれない大きな金職の紙が他の4人より目立っている「クララ・シュワルツ」が、二人の会話に歯止めを掛ける。

「フ、クララちゃん。君の意見もごもつともだが、今回ばかりはね……」

「下らん。何があるうと、神を打ち碎けば良いだけだ。」

「…お前なあ、だから周囲からは、「頑固ハゲ」と馬鹿にされているんだよ！！このバトルジャンキー！！」

「黙れ、この女たらしのキザ取りがあー！！！」

ロンメルがロンの頭を二つの拳でグリグリと回し、ロンがロンメルの頭に驚？みで締め上げる。大人気ない子供同士が喧嘩してるかの様に見えて、みっともない程だ。

クララがあたふたと困っている中、二人の額に一瞬でハンマーで殴られた様な衝撃が襲い、そのまま倒れこむ。

「たくオメエらは、ガキかよ。」

いつの間にか二人の間に人が立っていた。しかし人とは言い切れるのか、全身は高温化の砂漠にも関わらず分厚いコートが着ているが、その肉体は今にも破けそうなのはち切れんばかりの筋肉に、そのウエストは芸術か、細く、一目から全身で見上げれば、逆三角形スタイルになっている。顔には、右目に眼帯を付けている。「サム・ヒンデンベルグ」、その手にはデコピンを放った後かのような姿勢で止まっていた。

「サムウ、デコピンでやることはないだろ！？結構痛えんだから！！」

「…くそ、いつになっても、隙が全くない…」

「てめえらは、いい年頃の若鳥がみつともねえっつーの。」

「…く。」

（あんただけには言われたくねえ）。エロ大魔王め…）

「あ？何つつた？？」

「ゲツ！？イヤ…その…」

サムが驚？みにしてるロンメルが慌てて言いかけたそのとき、

「た、隊長！」

「ん？」

「目的地に、一般人が、アラガミと交戦中です！！」

「ああ！？」

サムを除いて、四人は驚く。この世の中に、一般人が外に出るなどありえない。一步でも外に踏み出したら、人が生きるには過酷すぎる環境に、「神」に成す術もなく「捕食」されるからだ。

しかし更に気になったのは、その「神」との「交戦」とは、どういうことなのか――

「…おい、モニターに映せるか？」

「はい！」

乗客席の上部に設置されているモニターが映し出される。すると、

三人は驚く

「おいおい…本気かよ…」

「今にもいたか…旧世代め。」

「そんな…」

思いもよらない事態に地惑うクララ。深刻な表情を浮かぶロンメル。そして明らかさまに邪見している目つきをするロン。ただ一人、サムは何か考えてるが、一瞬で、

「メンドー。出てきた奴が悪い。」

「ええ!？」

「おい、またか!いくら何でもそれは無いだろ!？」

「く、いい加減な男め…」

3人は講義をするが、サムの表情は変えない。

「お世話にしてる奴が、勝手に飛び出して勝手に化け物共に死を向かってるようなもんだ。」

むしろ俺は助かると思うがね。」

「な、何で!？」

「今までどこに潜んでいたのかは知らんが、これで過去の遺物は消える、て訳だ。」

俺たちも、お偉いさんにとつても、これで完全に民衆は俺達に絶大な信頼を独占できる、て訳よ。」

要するに、もはや必要が無い過去の党首が、手を出さずに勝手に消え、新世代の党首が民衆を支配できる、ということだった。確かに利益を得るには一番手っ取り早い、偶然ながら都合の良い方法ではあるが、

もちろん3人はこれを賛同する訳はなく、さらに反論する。しかしサムがそれを気にせず、

「まあ、あれだ。何かしらのトラブルだし、これはな、無視していて俺らはアラガミを…」

「だったら助けとけば良いじゃないか。」

その一言で三人は振り向く。サムだけは席に我が物姿勢で座り込み、声の主を振り向かない。

その顔にはわずかに笑みが浮かんでいた。

「ゴッドイーターは、人々をアラガミの脅威から守りぬけるのが、使命…だろ？」

赤いタンクトップの上にボロボロの黒き旗をジャケットのように着せている。その旗には、まるで髑髏にも見える狼の頭が三日月を喰らっているエンブレムが付けられている。スカートから右足はタイツが着ており、ブラウンの髪に、眼鏡からは揺ぎ無い光を灯している青き瞳が輝いている。そして14の少女であるにも関わらず、座席の過度を肘でのけ、まるで活発な男がやる仕草であった。

「ケイト・ローデンバーグ」。

この五人の中で最年少にも関らず、堂々と四人に己の義務を復唱する。

「はん、子供に言われなくても、それぐらいは分かってるっーの！」

「でも、確かだと思いますよ、ロンメルさん。」

「え？」

「英雄を目指すんだったら、小さき一步の積み重ねが己を強くする、お前は素っ飛ばしすぎだ。」

「ギク!!」

「ロンメルさんって、いつも英雄を目指してるからと言って、実技は確かですけど、訓練はサボってよく女の子と声を掛けて…」

「って、おい、ちょっと待て！俺よりサムのおっさんじゃないのかよ！？だいたいサム、あんたも…」

「ふむ、よく言った。」

「て、裏切り早!!」

先ほどの緊張感が嘘の様に無くなり、わめくロンメルを囲んで楽しげにからかう三人。その中、サムはケイトに

「で、デカイ口を叩くのは良いけどよ、覚悟はあんのかあ？もう新人じゃないとはいえ、今回はケタ数が違うぜ。」

「今更どうだって言っても仕方ないだろ？」

余裕に自信があるように言うと、

「私達は目的地のいる化け物を殺しに行き、生還をとる。んで、たまたまそこに弱者がいたから、ついでにそいつも生還させる、だろ？」

その強い光を輝く瞳をサムにむけ、ウィンクする。女性なのに、活潑な少年の表情をしていて、サムはケイトが男に見えた。あえて口を出さずに、これ以上言っても無駄であると分かったのか、呆れたように席に力無く座り込み、肩をすくめる。

「…ふ、言わせるな、「新型」。」

「へん、英雄様の足を引つ張るのは簡便な！」

「もちろんですよ！皆、同じ思いでここにいるんですから。」

「け、しゃーねえな。…よし！！」

サムが立ち上がると、四人の顔を視線で一人ずつ流しながら、四人の前に拳をだす。

「とりあえず生きろ、やばかったら逃げろ、んで、後は尻尾巻いて逃げるか、牙向いて戦え！！」

「おう!!はい!!」

全員が同時に力強く返事し、サムの拳に四人の拳が当たり、答える。

神によって喰われた世界…そこには、かつて人間が世界、いや、地球という星を支配した痕跡は、「神」が喰らいつくし、残っているのは食べ残しだけの荒廃の世界…。

新しく、そして最後の希望である、「神を喰らう者」…

やがては全てを終末に向かわれたあの時…と

そう、これは終末捕食が起こる二年前、

ある場所で、

誰も知らされる事がない、

一人の少女の運命が生み出した、

隠された歴史が…

> i 2 9 6 7 7 — 3 0 8 6 <

序章　？がり（後書き）

どうも、始めまして。初投稿させていただきました、幻影の疾風です。とつてもGOD EATERの魅力に取り付かれた人間です。これまでの原作ゲームはもちろん、漫画、小説といった物語を繋げ、GOD EATERという歴史の中の一つの出来事を描くことになっています。

尚、原作をイメージして描いていますが、あくまで公式ではないので、決してお間違えの無いように…（笑）

色々至らぬ点があると思いますが、最後までお願いします。

登場人物紹介 PART1（前書き）

今更のキャラクター紹介です。本当にスイマセン…！だって、すぐに出そうとしても時期が悪いかな〜、と思っていたんです！でも今日、割り込み機能知ったら実行しました。

何気に抜けてた私がボケてると感じた…。

とりあえず今回はメインキャラの紹介です！後私が選んだ担当声優も！いずれ2やオリジナル神機を紹介する予定です！もちろん、イラスト付きで。

登場人物紹介 PART 1

ケイト・ローデンバーグ（14） 声・松本 梨香

> i 2 3 6 4 2 — 3 0 8 6 <

… 本作の主人公。階級 新兵。2069年にフェンリルドイツ支部に入隊。同時に世界初の実戦用新型神機使いである。当時は生活行動全て本部の監視で観察、テストをおこなわれ、後にケイトの能力、状態が他の新型神機使いの貴重なデータとして使われた。性格は男勝りでどんな状況に陥っても決して諦めず、常に弱きもの達を守る信念で立ち向かう、勇敢な精神の持ち主。しかしそれに気を使いつぎて自分の身の安全がとれず、親友のハールもそれに心配されるが多い。バガラリーを毎週一話欠かさず見ているほどのオタクで、かなりうるさい。料理は普通にできるほうだが、食べ物が好き嫌が多い。旧世代の武器を裏経路で入手、改造するのが趣味。しかし全て威嚇用で、一度も人に撃ったり斬ったことがない。

サム・ヒンデンベルグ（30） 声・玄田 哲章

> i 3 3 6 5 2 — 3 0 8 6 <

… ドイツ支部第一部隊隊長。階級 大尉。2056年にフェンリルドイツ支部に入隊。鍛え抜かれた肉体とセンサー搭載の眼帯が特徴。また極東支部のリンドウに生き残る術を教えた隠れた師匠である。

（本人はその気が無いが。）

性格は冷静だが大胆不敵で何事もいい加減、自分と他人の行動は全て「勝手」と言う理念で生きていると言う。その為他人が死のうが、裏切られようが「勝手」だと他人事だと思い軽視するが、サムにとつては「勝手」こそが人が人として生きていける証と考えている。

20代ぐらいの美女が好みだが、子供には範囲外。

しかし実力は単独でヴロヴォロス、プリティヴィ・ピターを討伐、チャージクラツシュを水平切りや連続に攻められる程、独自の才能

と圧倒的な力量の持ち主。当時は本部からも全世界の中で「最強の神機使い」と呼ばれるほどの実力者。その為、彼に新たな神機の装備を与えられた。

現在支部長から特務を受けているが、内容は不明。

ロン・リー（19）声・野島 裕史

> i 3 2 6 9 6 — 3 0 8 6 <

：階級 強襲少尉。2062年にフェンリル中国支部入隊。2064年にドイツ支部転属。アラガミを滅ぼすことを己の使命としている。中国支部に入隊したが、本部から神機のテストでドイツ支部に転属。常に戦闘態勢で行動しており、普段任務は単独のみで受注している。自分の弱さを相手に見られるのが恥だと感じ、その為人と関わりをしない。がロンメルには子供の様に喧嘩するがその中は良好で、リーにとってはロンメルを知らずうちに背中を預けられるほど頼っている。

他の神機使いでも扱いが困難な試作型刀身の「四神王刀 黄竜」を使いこなし、どの戦況に置いても決して油断を見せずアラガミを徹底的に攻める。

以外と旧世代の極東の大河ドラマと時代劇、韓国ドラマ鑑賞が趣味。

クララ・シュワルツ（18）声・水木 奈々

> i 3 2 7 0 2 — 3 0 8 6 <

：階級 衛星曹長。2067年にフェンリルドイツ支部入隊。元名誉ある国の援助機関の家計だが、2050年にアラガミ進撃でその栄光を食われて無くなったと言われた、由緒正しき跡継ぎのお嬢様。極度の真面目で遊びやユーモアな発言は苦手。戦闘は好まないが、栄誉より神機使いとして戦うことを選ぶなど、決意と芯が強い。神機の高い適合率を発揮し仲間のサポート、攻撃を両用に行う。また体内に貯蔵するオラクル細胞の量が2倍という稀な特性を持ち合わせており、彼女の神機もそれに合わせた専用機である。たまに第1

部隊や他の職員の休息に手作りの高級料理をつくってあげたりもする。そもそも料理できるのは、女性陣の中ではケイトとクララだけ。他の女性陣はと言うと…

ロンメル・メテオマン（20） 声・山寺 宏一

> i 3 2 7 3 2 — 3 0 8 6 <

…階級 狙撃中尉。2061年にフェンリルドイツ支部入隊。正義の憧れと英雄を夢見るが、時折自分の腕前を女性職員、ゴッドイーター構わず自慢してナンパするのが多い青年。しかし度胸だけは第1部隊の中ではトップクラス。ロンとは兄弟のような仲が悪くも良い関係。女性にもてる男は敵と見なしているのか、ライバルはコウ（とクリストファー）に敵視を付けている。

遠距離神機使いの中で命中率はドイツ支部の中でトップクラス。また、神機の銃身についている刃で近づいたアラガミを串刺しで0距離射撃など、弱点とされる近接戦闘も対処している。その腕前はベテラン神機使いサムも納得するほどの持ち主。

アスカ・アーワルツ（12）声・坂口 大介

…階級 新兵。2069年にフェンリルドイツ支部入隊。第3部隊に所属しているケイトと同時期に入隊した新人。支部長の息子の中で末っ子。普段から規律やルールを守る大真面目だが、とても控えめな少年。そのせいで支部長の息子なのによくいじられやすい。アーワルツ家の名誉の為にゴッドイーターとなるが、目にしたことがない過酷な戦闘を恐れ、硬直しやすい。最初に出会ったケイトに困りつつも便りある友人として接しているが、実は一目ぼれしている。外見（特に顔）は、極東支部の藤木 コウタとは髪の色以外よく似ている。

ベラル・ベラマツチャ・カルーゾ（32）声・山口 勝平

…イタリア支部の天才技術者。その独自の技術でイタリア、ドイツ支部を中心に様々な神機、装備パーツ、乗り物、拳句には本部に依頼された新型神機の開発をまかした事も。ペイラー・榊とは同じ技術者として尊敬している。性格はイタリア人特有の陽気さとスケベ心のいたずら好きなトラブルメーカーだが、困難なトラブルに巻き込まれても高度の知識で冷静に対処するなど、状況判断で切り替える頭のキレもある。ケイトには数少ない理解者。何故か関西弁口調。ついでに息子はいる。名はフェデリコ・カルーゾ。

安堂 キラ（28）声・高山 みなみ

…元極東支部で管理長を務めていたが、努力に築き上げた優秀な成績に、本部に移転した。ゴッドイーターを化け物しか見ておらず、差別化に見る傾向がある。昔結婚していた子供と夫がGEとアラガミの戦いの最中GEが誤って殺したことから非常に憎悪を持つようになった。ついでに18の頃に結婚しており、今は独身。ドイツ支部で世界初の神機使いであるケイトの行動からプライベートまで監修、そこから纏めたデータの作成を担当。

クリストファー・E・ティファート（22）声・古川 登志夫

…本部の優等衛生員。元ドイツ支部の衛生員候補生だったが、衛星専門校での高い成績から、本部の衛生員に所属した。ドイツ支部でケイトの健康と状態の管理を担当。穏やかで他人にも親切で気前が良い性格をしている為、ケイトにとっては信頼している人物の一人で、よく相談してきては良いアドバイスをくれたりもする。コウの次に女性にもてるため、ロンメルにとっては第2の「男の敵」と標的されてしまうが、本人はまだそれに気づいてない様子。

ヘルベルト・アーワルツ（45）声・島田 敏

…ドイツ支部支部長。悩みやすく大きな問題には苦勞が抱える頭脳派。思案な性格の為、歳関らず皺が多い。よく部下やサムから老人と言われることが多く、それを気にしている。予想外な出来事には弱い。

神崎 コウ（24）声・堀川 りょう

…第2部隊隊長。2061年フェンリルドイツ支部入隊。階級 装甲中尉。血縁上、神薙 コウの親戚にあたる。極東で神機使いに入隊。後にドイツ支部に転属し、神機使いとなる。性格は穏やかで真面目だが、鈍感なところもある。特に女性の好意感には無関心といってもいいほど、鈍すぎる。戦闘には部隊を纏めるカリスマ性を発揮し、息の合った巧みな連携を見せる。女性に一番人気があるせいか、ロンメルには敵視されている。

イーナ 〃 シュタウフェンベルク（19）声・佐久間 レイ

…第2部隊に所属している紅一点。階級 強襲少尉。2065年フェンリルドイツ支部入隊。大人びた女性でクールビューティーの印象を受けるが、普段はわがままでよくコウに甘やかしておねだりする癖がある。戦闘ではショートブレードを巧みに使いこなし、徐々に追い詰める戦法が得意としている。ドイツ支部一のスタイルと真珠の瞳をしており周りの男に声をかけられやすいが、本人は神崎コウに熱中。逆にロンメルにはストーカー以上に嫌っている。

ゴットホルト 〃 ベトヒヤー（21）声・杉田 智一

…第2部隊所属。階級 狙撃少尉。2064年フェンリルドイツ支

部入隊。極度の無口で欲を持たない。誰にも必要以上に話さないせいか、普段何を考えているのか分からない、支部の中で一番謎が多い。だが、戦闘にはアラガミからコウ達をカバーし、的確な射撃で狙い打つガンマンの腕前を持つ。過去10代の若さでありながら、連合軍に所属していた経歴がある。

ゲイツ・ヒートマン（24）声・森川 智之

…第3部隊隊長。階級 狙撃少尉。2063年フェンリルドイツ支部入隊。スキンヘッドとは同期の幼馴染。そして常に統括製がない第3部隊のメンバーにいつも世話を焼かせられている苦勞人。かつてアメリカ支部に入た時は、喧嘩ライバルであるジェイクとは仲が悪くも、良き理解者としてともに過ごした過去を持つ。

スキンヘッド（24）声・秋元 洋介

…第3部隊所属。階級 強襲兵。2063年フェンリルドイツ支部入隊。唯一本名不明。自分より弱い相手（人間、アラガミ問わず）しか狙わず、逆に自分より権力、実力がある者には弱腰になる、弱いものいじめの臆病者。特にサムと第1部隊には頭を下げている。ゲイツとはアメリカ支部の頃から幼馴染。

登場人物紹介 PART 1（後書き）

今後、この紹介を付け加えることもあると思います。（特にイラスト）

使用神機（オリジナルのみ）（前書き）

ドイツのベラル製、その他が開発した神機を一挙紹介！登場ごとに増えていくので、チェックを忘れずに。

使用神機（オリジナルのみ）

第1部隊

ケイトⅡ可変式（実戦式新型）

サバイバーエッジ（ショート）

…ベラルが神機の最初期に開発した旧式の刀身パーツ。主にアラガミとの戦闘でもあるが、サバイバル生活にも対応できるように設計されている。また通常のショートブレード以上に軽量化を施しており、使用者の扱いによるが更なる神速な動きをすることも可能。

リボルバー（ブラスト）

…ベラルが最初期に開発した旧式の銃身パーツ。見た目としてはマグナムだが、内部のシリンダーに最大6つのオラクルバレットを充填し、状況に応じてシリンダーを自動回転させて銃撃するオラクルバレットを変更させるのは、リボルバーの特徴を取り入れている。

シュピーゲル（シールド）

…ベラルが最初期に開発した旧式の装甲パーツ。鏡のような光沢感でアラガミの視界を惑わす効果だけでなく、微弱ながらレーザーなどの非物理攻撃を反射させることができる。

サムⅡ近接式（旧型）

ハルベルト（バスター）

…ポールアックスの形状をした槍斧型の刀身。サムが入隊してからほとんどメンテナンスを行わずに持ち続けるほどの耐久性が優れている。ヴァジラの素材からつくられた刀身、「虎剣」と同じ破碎、

切断が両方とも優れているが、先端の槍がついてるので貫通も長けるなど、正に3種類の刀身パーツを一体とした当時のベラルの技術の結晶でもある「万能性が高い刀身」とも言える。しかしそろそろ限界が近いらしい…。

ウォルドベルリン（タワーシールド）

…かつて崩壊したドイツのベルリンの壁をイメージとした、巨大な装甲パーツ。これもハルベルトと同じ旧式だが、サムは戦闘中にこれを使用することは滅多になく、その能力は未だに発揮されてない。

第1章 ケイト・ローデンバーグ 前（前書き）

2069年、全ての始まりは、ある支部に弱者を守る為に奮闘する少女から始まった……。

第1章 ケイト・ローデンバーク 前

2069年、フェンリルドイツ支部。

人類が有史を築いてから、どこの世界でも、完全な平和など存在しない。

ある国では、高度経済の中で貧困の差が目立つ国があった。

ある国では、表は安全国と名乗っているが、裏では取引と人種差別による被害が隠されている国があった。

ある国では、自身の欲望のみに力で民衆を抑え込んでいた。

ある国では、民衆が武器を手に取り紛争する国があった。

世界に本当の平和など、かつて、今でも存在しない。

しかし国は消えた。荒ぶる「神」によって、全てを――

わずかに生き残った人間は、新たな希望の砦、「フェンリル」に住み、ひとまず安息の時を迎えた。

だが、それでも平和は、存在しない。

皆に住んだ人々が待っていたのは、恐らく死ぬより苦しく、長く辛い、そしてなにより、「自由」がない、過酷な生活であった。

その中、皆に選ばれた者だけが、自由無き檻から抜け出せるのだ。

そう、例え「神」から逃げて生き残った命を、この縛られた生活で一生を終えるだけだ。

そして人々はいっしか自分達を救ってくれた皆に、怒りを胸の内側から徐々に堪っている。

今日も、皆の前には大勢の人々が集まり、怒りを訴えた。

若者を中心に、老人、夫婦などに、「我らに幸福を与えろ！」とドイツ語で書かれた看板を持つ若者、まだ10も満たない子供が母親と一緒に手を繋ぎ、周りの大人達と合わせてただ叫んでいるなど、大行列で苦情を高さ壁に向けて叫び続けている。

そして、大行列の民衆の前に、一人の若い男が手を振りかざすと一斉に静まった。

「皆、今日もよく集まってくれた。これで何度目になるか分からないが…しかしいつまで立っても変わりようがない」

民衆は男の言葉を静かに耳を向ける。その顔には悲しみと悔やみの怒りの表情を浮かべながら、ただ黙って聞いていた。

男もまた、内心は民衆と同じ気持ちだが、決して顔を出さず、民衆に気迫ある顔をしながら述べる。

「奴らは特別に選ばれた者だけしか招聘せず、後の我々はこのまま餓死、とまではいかないが、この数日間に配給が一日一回、それも全員分を確保できる食料が用意されてない。そのせいで今日も、多くの仲間が飢え死んだ。」

そして男は怒りの感情を抑えつつ、

「選ばれた者だけが裕福になるならまだ良い！しかし、我々の扱いがこの数日に悪化したにも関わらず何の対策も打たず、それどころが連絡も無い！これは無いと思わないか！？」

男が絶叫すると、それに答え民衆が勢い一気に叫び、答える。

「そうだ！」

「このまま死んでいくのはゴメンだ！！！」

「神を喰らって報酬を得ているのなら、俺達にも分けさせる！！！」

「せめて子供達だけでも与えさせて！！！」

「静かに！！！」

男が怒りに盛り上がってきた民衆を静めさせる。

「もはや一刻の有余がない。我々は何としてでも、この悪環境を抜

け出さねばならない！！その為にまず我々は何をすべきかと言つと……」

そう言いかけたその時であつた。

男が突然後ろに倒れこんだ。正確にはただ倒れたのではない。倒されたのだ。

証拠に、男の頭を鷲？みし、そのまま後ろに引き込まれたただけだ。男は倒れこんだまま起き上がろうとすると、

「ケアツ！」

今度は頑丈なブーツを履いた足に腹を踏みつけられる。ただの踏みつけにしては苦しすぎる顔をしていた。

「ああ？何か独裁者だあ？？ウチの職場にケチつけんのもいい加減しねえか！！ああん？！」

スキンヘッドで、身長は低いが全体が丸く、鍛えられた筋肉より分厚い脂肪が

目立つ体格をしていた男が若い男をさらに腹に踏みつけた足をねじり上げる。

あまりの苦痛に喋れない程苦しむ男の表情に、スキンヘッドは笑みを浮かべる。

その残虐な光景に民衆は凍りつく。その中、先ほどまで看板を掲げた茶髪の男が

前に出ようとする。

だがその前にスキンヘッドがさらに踏み込んだ腹に、足を強く踏みつける。

男はもはや失神の状態になりかけている。それを見て茶髪の男は他の若者に止められつつ立ち止まる。

「いい子だ。さて、と…毎回毎回ケチと苦情が出されているんじゃない、こつちも困るんだよ。今大変な時期だからな。」

「な、何が…だ…」

「答えるまでもねえよ。誰のおかげであの化け物から守ってやっていると思ってるんだ？」

「知ったことが…」

「だったら、二度とその口を聞けないように…」

スキンヘッドが男の腹に足をどけ、今度は胸倉を乱暴に掴み、もう片方の腕に拳をかがけると、

「思い知ったるわ!!」

男の顔面に拳が振り落とされる。乾ききった音がした同時に民衆は目をつぶった。

その刹那であった。

少し時が経ってから民衆は恐る恐る眼を開け、光景を見ると…呆然した。

男はいつの間にかスキンヘッドから離れていた。顔面にはスキンヘッドの拳の後も無く、無傷だった。

そしてスキンヘッドは、いつの間にかその場で腰を引けていた。しかもスキンヘッドの額に、黒い塊のような物に突きつけられていた。それは銃口であった。

スキンヘッドと男の間に、いつの間にか一人の、女性が立っていた。

髪はしなやかに流れ込んだ黄褐色の長髪に、そのスキンヘッドに見つめる青い瞳に眼鏡を掛けている。
紫のシャツの上に黒いコートと黒いジーンズが着ている。

そしてスキンヘッドに向ける銃は、震えも無く的確に突きつけたまま維持している。付けられる銃口の冷たさに思わず声をあげるスキンヘッド。

「悪いが、これ以上の脅しは控えてもらおうか。」

揺ぎ無く、その言葉はスキンヘッドの脳裏に強く刻まれる。

まるで縄張りに侵入した獣を震え上がらせる、狼の瞳であった。

「ケイト・ローデンバーグ」。

今日もまた、弱きものを守る、誰よりも強い女であった。

「ケ…ケイト…」

男が苦しげに彼女の名を言う。民衆は二人の間の空気に、緊張が取れない。

今この状況に割りこめられない空気が入ってるからだ。

「て…てめえか…噂に聞くここを占めている、「ヤクザ」か…。まさか……」

「女で子供だったとは、だろ？」

「け、分かっていやがったか。」

「前あつた奴に言われたからな。お前もそいつの仲間だろ？」

「へ、さすが…」

「おっと。」

スキンヘッドが銃を奪おうとした腕よりさらに銃口が深く突きつける。

（ち、眼鏡掛けてるくせに視力が良いのか？ゴッドイーターかよ）

スキンヘッドの内心が思う。しかし僅かな表情の歪みから察知しているが、あえて口にせず、

「だったら今すぐここから消えな。二度と、こいつ等に手を出すな。」

「はあ？そもそも吹っかけてきたのはそっちじゃねえか！？黙って聞いてりゃあいい気になってんじゃねえよ、クソガキか！」

スキンヘッドが突きつけられた銃を俊敏に弾き飛ばし、立ち上がる。

他愛ない。こんな子供に脅されているんじゃ、自分の名誉に恥をさらされるからだ。

それを許せずスキンヘッドはケイトの胸倉を掴み掛かろうとするが、ケイトは紙一重に避け、今度はコートからスキンヘッドの首筋にナイフを突きつける。

ほんの一瞬の間であった。誰も見えた、はずが無く、思わず驚きの声を上げる。

わずかに首から血を垂らしている感覚に、思わずスキンヘッドは汗を隠せない。

「もう一度言っておこうか？ここから立ち去れ、デブ野郎！！」

鋭い眼光と睨みがスキンヘッドの目に映される。

獲物を追い詰めた狼の威風みたいに見える。このままでは、殺さ

れる。スキンヘッドは脳から全身に伝わり、思わず手を震わせる。

「……ち、分かったよ。こんな馬鹿らしい演習に付き合ってられるかよ。」

そう言つとケイトは静かにスキンヘッドの首からナイフを降ろす。

しかし、未だに鋭き狼の眼光はまだ消えていない。ケイトを通りすがり、少し歩いてから再びケイトに振り向く。

「忘れんなよ！この俺を怒らせたら、お前なぞ、フェンリルで無終身刑にしてやるからな！！」

負け惜しみに聞こえるスキンヘッドの苦痛な警告を告げると、早速でこの場を去った。

あまりにも愉快な一面に、民衆の中に吹いた者がいたが、すぐ他者に睨まれ黙り込む。

事が無事終わったのか、手に持っているナイフと落とした銃を拾い、コートの裏側に入れ戻す。

「フウ、危なかったなあ。て、お前、大丈夫？」

一瞬の一息の後に、ケイトはスキンヘッドに拉致された男に手を出すが、男はそれを不機嫌な顔でに弾く。そして男は助けられたにも関わらずケイトを睨む。

「いつも、いつも……俺の邪魔をしないでくれって、何度言えば分かるんだよ……！」

「おいおい…それも何度目だよ…」

「いい加減にしてくれ！お前をいつまでも頼ってる俺じゃないんだ！俺だって、何かしなきゃ何もできないまま過ごすのは、もう嫌なんだよ！」

「でもなあ、だからってあそこにデモなんてしてもな…」

「俺は、いや、俺達はこの地獄から抜け出したいんだよ！いつまで経ってもこんな人種差別を続けていたら、ここで野たれ死ぬだけだ！皆もそうだよな！？」

心から、頭から、過去から、自分の経験を表に全て吐き出すほど怒鳴る様な独白を終えると男は民衆に向けた。しかし、民衆には何も反応が無かった。

「…！？」

思わず呆気をとる。先ほどの自身の信頼はどこに行ったのか。

そして、民衆の中から看板を持った男が、前に出る。

「ハール、お前の言いたいことは分かるが、やはり同意できねえ。」

「え…！？」

「俺も数日前に神機使いに襲われた。金を貸せつてな…俺は臆病で、怖くて、何もできなかった。でも、そんな俺を助けてくれたのは、そのアンちゃん、ケイトだ。」

今度は子供を抱えた妊婦が前に出る。

「あたしも、子供に神機使いのトレーラーに轢かれそうなときに、通りすがろうとしたケイトに助けてもらったのよ。それだけでもあの子は小さな命でも一生懸命で、さっきの神機使いより優しかった。」

「僕、妹の大切な人形を無くしたから探していたら、オネーちゃんも探してくれたんだ。」

「俺も、助けられた!」

「俺もだ!」

「あたしも!」

いつしか民衆は、ケイトに引き寄せられ、信頼していた。その中、ハールは悔しそうに顔をだしている。

「…だったら、武器を持って神機使いに襲撃すれば…」

「てい。」

「うわっぷ!?!」

さっきコートにいられた銃から、男に、飛ばす。銃からは男の顔面に向かって水を飛ばしていた。

そう、ただの水鉄砲だったのだ。思わず男は突然の冷たさに感じ、

手で顔を覆い隠す。思わず民衆はこの一望に感じたものを抑えず、笑いが溢れた。

「な…何すんだよ、年下の癖に!!」

「ははは、ゴメン、ゴメン。ドッキリ（笑）」

水鉄砲を放ち終わると、サムズアップで笑顔を向ける。

ハールがムキに何か言い出そうとすると、それより速く、

「だがな、もしこれであいつを殺しても、何も解決しない。」

「何だと…!!? お前だって武器があるし、力があるじゃないか! それで何が悪い!?!」

「力は弱者を踏みにする。もし弱者が力を持ち、強者を打ち勝つても、それはまた弱者を踏みにする…そう、結局は繰り返されるだけだ。お前はそれをやろうとした。」

「な…ち、違う!! 俺は…」

「あのハゲだって、好きでこんなことをしている訳じゃない。だが、もう戻れない道を歩んでしまったら、いつしか誰でも弱者を踏みにする人間になる…」

ハールはいつしか黙っていた。

自分がやろうとしていたことは、同じ過ちを繰り返そうとしていたから。

「だから変える。力とは、踏みにじるものではない。私は、守りたいんだ、皆を。完全な平和が来るまで…。」

それがケイトの、真の願い。この悪環境においてもこの揺ぎ無い願いを壊されず、逞しく生きていける。それが、人間としては生き残るのに最も強い武器になれるのだ。

一見偽善者にも聞こえるその理屈は、おそらく誰も信じないはずだが彼らはそれを快く受け止め、歓声をあげる。民衆は分かっていた。

彼女は、絶望に覆われたこの世界の、女神であると。だからか、ハールはそれを受け入れられないが、悔しげに顔を背く。

「…綺麗ごとを言っても、変わんねえよ。」

「それは、いつの日か…な？ま、後よろしく！」

「て、おい、どこに行く！？」

「この場を起こしたのはアンタだろ？だったら最後までやり遂げてくれよ…！」

ハールをこの場に置いて民衆の前に走りぬける。

ケイトが去ると、ハールの口元がわずかに緩み、一瞬笑みを浮かばせる。

「…たく、勝てないよ、アンタは。」

ローデンバーグ
後

D
a
s

n
?
c
h
s
t
e

M
a
l

「
ケ
イ
ト
・

第1章 ケイト・ローデンバーグ 前（後書き）

2回目の投稿になりました。少し（それともかなり？）長くなりましたが、それはお許しを…。

尚、お気づきの方もいると思いますが、序章までの過去となっております。

第2章 ケイト・ローデンバーグ 後（前書き）

少女、「ケイト・ローデンバーグ」は誰より人の為に生きて、戦い、いつしか外の世界を知らぬ居住区民達にとっては、神機使いより頼れる存在となっていた。そんなケイトにも、家族はいる……。

第2章 ケイト・ローデンバーク 後

「E・エリア」と呼ばれる、廃墟化した町。

そこに、住宅らしいところは存在せず、ただ粗末にダンボールや木材、石で

作られた小屋が無数に並んでいるだけである。

今、誰もいないこの町に、一つの鐘が鳴り響く。人がいないだけに、その地に残るのは、

笑いも、生命の呼吸音もない、ただ鐘の響きだけ。

その鐘を鳴らしている、町から離れた、荒れ果ててはいるが形は残っている教会から、

楽しんでいる声が聞こえる。

その教会の門の前に、急ぎ足で向かったケイトが門の前に立ち止まり、

一息ついてから今にも崩れそうな扉を開ける。

「おゝす、かえ……」

そのとき、彼女に襲ったのは……

「ッだべー!？」

ボールだった。顔面に御出迎えたのは。

「あ、お帰りケーネエ!……て、何してるの?」

「おい、どこ見て打ってるんだよ!？」

「ああ……!」

そこにバットとグローブを抱えた子供達が駆けてくる。

しかし一瞬でその場は硬直した。

「……やあ、た、ただいま……」

顔のボールがポロリと落ちると、その場に力なく後ろに、ゆつくりと、倒れた。

「わあ~~~~~ッ! ケエ~~~~~ネエ~~~~~ッ!……!」

数時間後…

「…うっ…いたたた…」

「おお、目を差まれましたかな。眠りのお姫様。」

「ああ、神父。」

ベットから目を覚ましたケイトの視線に映ったのは、赤い帽子と赤い上着、ズボンを着た、体が痩せ細って、白く胸まで細長いひげが特徴の老人であった。

格好からして、かつては北欧から世界まである神の使いの誕生日を祝う日に、

子供達に夢を送る伝統の祭りに出てくる、ソリをトナカイでひかせて空を飛ぶ人だと思われる。

ケイトが顔を痛みながら抱えてベットから起き上がる。

「いけませんぞ。まだお痛みになるでしょう。もう少しゆっくりしてなさい。」

「はは、悪いね、いつも。まったく、あいつらも元気なのは良いけど、

少しは私の負担を考えてほしいもんだよ。」

「何をおっしゃる。あなたも最初にここに来たときは、皆とちつとも変わっていませんよ。」

「余計なお世話。いい加減私を子ども扱いにしないでくれよ、神父。」

「いやいや、空を無邪気に自由に飛んでいる少年のように、まだまだあなたは可憐な少女ですぞ。」

神父が穏やかそうに話し続けると、ケイトは呆れたのか、再びベットに寝転がる。不満げな顔をするが、決して困っている気持ちはない。

ただ子供扱いされる恥ずかしさを隠しているが、顔に出ているだけだ。

羞恥の顔を浮かぶケイトをチラッと見ていた神父は、いつも手に

持っている聖書をめくりながら静かに笑う。

「そういえば、今年で四年目になりますな。」

「何が？」

「あなたが、ここに来た日が。」

「……ああ、そうだった。」

「ほつほ。あのときのケイト君は、今の子供達と比べると元気が良すぎて、

私も腰を折りましたな。」

「今でも折っているんだろ。神父もいい年して、あいつらと一緒ににはしゃぐ必要は無いのに、私がいないとすぐ体を壊すからな。」

「ほつほ、これは痛いところを衝かれましたな。」

神父はいつもこのお世話好きが常に纏わりついている、もう70は超える歳なのに、その子供好きな性格から、時にケイトの心配種にもなっていた。

この教会は、一言で孤児の保護所だった。

一昔はここに住む人々が神や様々な困難を祈ったり懺悔したりと、普通の教会と変わらないところだった。

しかし今では、誰も懺悔にこない代わりに、親に捨てられた、または親に預けられて集まってきた孤児達がいつしかそこに住み着いたのだ。

そして孤児達を保護し、面倒を見たりしてるのは、神父と最初の教会の孤児のケイトだった。

「しかし、あなたがここに来てから、この教会も変わりましたな。世界を変えられたあの「神々」のおかげで、皆神を信じられなくなり、

生きるのに必死で…私も最初は神を見捨てて生き延びようと思いましたが。

でもあなたが4年前、ここに来てから、私は最初あなたを見捨てようかと思いました。

しかし、あなたの穢れの無い、瞳を見て私は、この一生を掛けて育てましたよ。

あなたもまあ、手がかかりましたから。でもあなたと触れ合ってから、

私は気づいたのです。」

「……」

話しているうちに、ケイトの表情が先ほどとは違い、静かに目を閉じていた…

だが、その顔は、どこかうつむきに近いのが、神父はまだ気づいてない。

いや、気づいてないふりをしていた。

「やはり、神はまだ我々人間を見捨てていない。」

神父は静かに振り向くと、いつの間にかケイトは窓を眺めていた。

「…おっと、年寄りの長話にウンザリですか？」

「…ああ…。何度もな。」

「でしたら子供はやっぱり外で遊ぶのが一番。さあ皆、いつまでも隠れてないで、

出てきなさい。」

扉に向くと、「はい」と返事がし、ギイイ…と静かに扉が開く。そこに、さっき外で遊んでいた子供達が恐る恐るとケイトに顔を向ける。

「あの…ケーネエ…さっきのアレ…その…」

「言いたいことがあるんならハッキリ言っ。」

「う…うん…その…ご、ゴメンなさい!!」

頭を膝にぶつかりそうなほどの勢いで頭を下げ、ハッキリと声に出した。

「お、俺も、ゴメン!!」

「私も!!」

後ろに並んでいた子供達が次々と謝る。が、それに腑が落ちず、
「あゝもおゝ…全員で誤らなくていいんだよ!様は首謀者が誤れ

ば良いだけ!!」

「そ、それじゃ…」

「そうだなあ、罰として、私も混ぜてもらおうか?」

ベットから立ち上がり、二人の子供の肩を手に置き、笑顔で言う。

「わあ…!」

「ただし! 私に顔面ホールランをぶつ掛けた奴は…」

そいつにもホームランを出してやろう!!」

「ええ……!?」

「と、言う訳で、神父! 夕方には飯の準備しといてやるから、ゆつくり休んどけよ!」

神父に手をふり、子供達と一緒に部屋から外に駆け足で出る。

あつという間に庭はケイト達が野球を始めており、

賑やかに遊ぶ光景を、神父が窓から見つめる。

「うん… まずは皆が元気にいてくれること…それが私の、一生の願いだよ、皆…」

神父が椅子に静かに座り、テーブルに置いてある少しヒビが入ったカップを持ち、

コーヒーを静かに飲みだす。

「そしてケイト、どうか、今の時間を思い出に、幸せに暮らしておくれ…。」

その優しい瞳は、この「神」によつて荒廃した世界に、彼女に希望を持ってほしいという願いなのか…

ヒンデンベルグ 前

第2章 ケイト・ローデンバーグ 後（後書き）

居住区視点で物語を書いてみました。原作設定を知りたい方は、次回に明らかにされます。さて、バトルを期待してた方、「おい、まだ出ないのか!？」とか思っていると思いますが、次回からいよいよあのゲスト達と共に展開されますので、ご期待ください。

第3章 サム・ヒンデンベルグ 前（前書き）

……かつて、世界中の神機使いの中で常に生き残り、強大なアラガミに対しても圧倒的な実力を持つ最強の神機使いが、存在していた――。

第3章 サム・ヒンデンベルグ 前

フェンリル

それは、「神」によって全てを壊された世界の中、唯一生き残った人類を強固な盾として守り、誰も恐れた「神」を打ち斬れる剣を持っている、ただ一つの「聖域」だった。

2012年にフィンランドで創立され、当時は表ではごく普通の薬品会社だが、独自の研究により現在は世界の頂点として君臨している。

今は世界各国にも支部を持ち、その数だけ人類はそこに留まり、安息の日々を過ごしている。

誰も「神」を対抗できず、絶望しかけた世界の中、人類にとって命綱であり、最後の希望の地、唯一の安全な「聖地」であった。

「エントランス」

そこは、一般的に「フェンリルの窓口」とも言える。

一部屋が半1、2階建て構造になっており、中央の受付口から左右に片方ずつ階段が設置され、直接二回に繋がっている。

エントランスには「フェンリル」に所属する職員達の一時の休息に足を踏み入れるのが多い。

白衣を着てて資料を黙読してたり、

かなり汚れたタンクトップと手袋を着た男達が一階ソファに座

って話してたり、

または右手に赤い腕輪を付けてるものは、赤く、丈夫に丸い画面が特徴の「ターミナル」に打ち込んだり、ソファアにただ座ったり、様々だ。

中には一般人がそこに居座って商品を売買していたりする者もいる。

しかし、その安息な空気は、いつもこの状態が続くとは限らない。

「くそお！あのクソガキめ、調子こきやがって！」

ゲートから出ると、スキンヘッドは壁際に置いてある赤い「ターミナル」を蹴飛ばし、ソファアに他の人たちを睨みで追い出し、独占……ではないが座り込む。

スキンヘッドの隣には、その睨みにも動じず、むしろ平気な顔でスキンヘッドに片手を振る。

「どうした？随分不機嫌そうじゃないか。」

不機嫌にソファアで煙草を吸おうとしたスキンヘッドに一度止めると、隣み声を掛けてきた男に眼をつける。パンチパーマの金髪と黒白のチェック柄が付いたジャケットが特徴の肌黒の男、「ゲイツ・ヒートマン」が座り込む。

スキンヘッドが舌打ちをし、ポケットからマッチを取り出し、手を止めていた煙草に火をつけようとするがゲイツに止められる。

「よせよ、煙草は手に入りにくい高級物だから、人生の楽しみに取っとけって。」

舌打ちすると、シブシブ煙草をケースに力ずくで戻す。おかげでタバコが潰れるが、気にする余裕が無い。

「ゲイツ、あの噂に聞くヒーロー気取りで俺達に齒向かうクソガキなんだが、何とかしてくれよ。あいつのせいで俺は貧乏で低墮落の居住区民共の前に恥かいたぜえ。」

「会ったのか。まあ、そもそも原因は、本部にあるけどな。憎まれ口叩かれるのも、仕方ないだろ。」

「んなの知ったことねえよ。だいたい今、配給品のほとんどが本部に送られてるんだろ？まあ、何するかは知らんが、うち等「神機

使い」に問題なく欲しいものを送られるのはとってもありがたいがな。」

「その時点で問題ありだけだな。しかし居住区民だけでなく、俺達に何の連絡も無しに突然そうさせられるのは、何か負に落ちないんだよな…」

「ケツ、知るか。俺達が命を賭けて化け物どもを刈り取ってる商売の報酬だ。何も出来ねえ奴らに喰いモン与えるなんて、それでこそせつかくの貴重な配給品の損になるだけだ。本当に必要なのは、俺のような優秀な人材だけって訳よ!!」

スキンヘッドの理不尽なわがままを自慢げに言う。ゲイツは呆れたように頭を抱え、ため息をするが、あえて何も言わなかった。

だが、間違いでは無い。この荒れ果てた世界には、旧世代に難民に食料を与えるという平和的行動が進まれたが、現代となってはそんな余裕も無い。

「この世界で生き残る方法は、弱肉強食と運なんだよ。結局は強え力と超ラッキーの運なんだよ!それ以外の奴はとっとくたばれば世の為って訳よ!!」

「ほお〜、チキンの癖してデカイ口を叩くもんだなあ。」

「おおよ!ついでに俺はチキンじゃねえ。この美しい光沢感がチャームポイントの「Mr・スキンヘッド」だといえ?」

突然背筋が勢いよく冷たく走り抜ける感覚がした。気がつけばゲイツは携帯端末で話しているフリをしている。そして、ゆっくりと後ろを、振り向くと…

スキンヘッドの身の丈以上の巨体と逞しき筋肉、そしてありえないウエストの細さが目立つ体に、右目は眼帯で覆われているが、もう片方の目は興味深々に、スキンヘッドに睨みつけている。

「わああああああッ!?!」

「よう、久しぶり。」

全域に耳が張り切れそうな叫びが響いた。当然隣にいたゲイツは一番耳を痛むが、堪えながら一人で携帯に話しているフリを続けて

いた。

「すいませんすいませスイマセンすいませんスイマセン！わわわわわ…私は別に、その、いえ、あのですね！？…」

「うつせー、わーてるって。ただ通りすぎるうとただけだし。」

ソファーから降り、身を丸くして必死に連続に土下座を繰り返すスキンヘッドを視界に入れず、ゲイツに視線を入れる。

「久しぶりだな、サム。最近忙しすぎて会う暇が無かったのかい？」

「へ。人気者は辛いもんでな…俺の人生でこんなに連続ラブラブおデートさせられたの、初めてだからな。ホンツト死ぬわ。」

「相変わらずだな…。でも、振ってはいるみたいだな？」

「おうよ。」

軽い返事から、ゲイツの胸に拳で軽く叩く。と――、

「で、ゲイツ、たまには俺のおデートの相手でもしてくんねえかあ？同じ隊長同士の仲だし。」

「断る。（キツパリ）」

「んだと思った。」

互いに笑顔で会話をしている二人。

二人のやりとりの間に、さっきの威勢はどこにいったのか、スキンヘッドは身を丸くしていた。

もはやスキンヘッドに視界を入れず、

「んで、サム。最近居住区の事だが…」

「ん？何の話よ。」

「知らないのか。ま、お前さん達は俺達よりかなり忙しいから無理はないが…。居住区で噂になってる、「あの娘」。」

「ん…？…ああ、例のアレねえ。」

「そうなんですよ！！俺…いや、僕もですね、さっきまであの小娘に随分と舐められましたよ！」

更に態度を大幅に変え、サムに手を捏ねまくるスキンヘッド。ゲイツも思わず頭を抱えるが、サムには何も表情を出してないのを気

づかず、

「ですが、僕はあれですよ！？居住区民達の様子を観察してただけで、いきなりあの小娘に酷い目を合わされたんですよ！まあ僕はゴッドイーターですから、別にアレぐらいは……」

スキンヘッドの額に、デコピンの衝動を、避けられなかったことを。

「あう！？」

「知ったことかよ。たかが子供一人、そんなの相手にしなくても良いじゃねえか。」

「サム……！」

「だいたい今貧困とかデモとかつてもんは、本部が配給をこっちに戻してくれたら解決するだけ。俺達は、何も関係もねえ。」

「ですよねえ！」

「だが、子供の前に恥をさらされた奴には、もう来ないかもしれないねえな。そんな奴は、首、かもな。」

スキンヘッドに追い討ちをかけ、サムはソファから立ち去り、エレベーターの前に行く。スキンヘッドが顔全体を血管が切れそうな程紅潮し、その場でジダンド踏みつける。

「くそお、最初からいい加減な奴に、言われたくねえ……！」

「あ？」

「ヒッ……！な、何でノありません……」

口調がずれながら硬直し、機会のようにカタごとで話す。

馬鹿らしく思ったか、ゲートに入り、そのまま地下に高速で下降する。

エレベーターの中で、サムは腕を組み、そのまま静かに立つ。エレベーターの振動に一切体が揺れず、ただあることを脳裏の中である事を思い浮かぶ。

「神機使いも恐れない子供……か……。」

その脳裏は、今から4年前にさかのぼる……

4年前、ロシアのユーラシア大陸。

月明かりの無い雪景色。どこまでも続く広大な雪地が見上げ、唸りを上げる吹雪が吹き荒れ果てていた。

そこには、木も、川も、建造物も、そして人も存在しない、生命の気がどこにも無い程、ただいつまでも止まない吹雪の音だけが聞こえる大地。

そこに雑音が吹雪と交じり合って唸る。

雪景色の上空に一揆の黒き塊に、後尾部に巨浪の頭が横たわっている三日月を喰らうエンブレムが刻まれていた。

そのヘリの中から横に設置されているドアを前回にし、広大な雪景色をただ見つめている男が一人、居座っていた。

「お疲れ様でした、サムさん。何事も無くて何よりでした。」

「ケ。こんなことになる位なら、最初から呼ぶなつての。せつかく劇レアの「ビデオ・アダルト」て奴を見そびれたぜ。」

「そんなのいつでも見れるでしょう？ だいたい我々だけでこの悪環境外を出るわけにはいきませんから。」

「ち。少しは命がけで忙しいこっちの身にもなりやがれよ。」

舌打ちをし、座席に置いてある裸体の美女が乗っている本を手にし、そのまま寝転がりながら読む。

「で、アレ、結局どうすんだ？」

「…ええ。あそこで何をしてたのかは不明ですが、まず支部長にそこで回収した物を報告をしてから、本格的に調査に入ると思いますがね。」

「また、お呼び出しはゴメンな。」

「多分あると思いますね。現場の同行者として。」

即答な返事が痛々しげに耳に入ると、不機嫌な二回連続に舌打ち

をし読んでいた本を顔に覆い隠す。

しかし、その顔には、何かを思いつめている課の様に、表情が浮かばない顔をしていたことを、操縦員達は気づくはずもない。

アレは、何だったのか…

それを脳裏に思い浮かび上がり、なかなか離れられない。しかしそれよりも、サムはもう一つ、それ以上に、どうしても気になって仕方なかった。

それは後部座席にチラリと見つめよう、と――

あの、子供は……

――した瞬間、

「…ん？」

突然何かの気配を察したと同時に、

「…アラガミ発見！！」

片方の操縦員がリーダーを確認してから叫ぶ。

「サ、サムさん！！」

「おう、どこからだ？」

それを軽い返事で返し起き上がる。他にその警報で動くものは誰もいない。彼だけだから。

「地上からか？」

「はい、今モニターに…」

「必要ねえ。俺が行く。」

「はい、よろしくお願いしま…て、ええ！？」

「ち、ちよつと待って下さい！まだ詳細は…」

「んなの、分かってる、て。俺の感を舐めてんじゃねえ。」

「ですが、勝手な判断は許されなんでしょうよ！？」

「いいじゃねえか。明日隊長祝任だし。それに、何も無いままハイ、おしまい、何て都合の良いオチは好きじゃねえ。」

テキストに棒読みで必死に講義する操縦員に伝えると、左手に自分の身長以上の巨大な剣を肩に背負い、全開した出入り口の前に足を踏み入れると、

「じゃ、迎えには俺好みの美女、5人は連れてってくれよ。」

操縦員に自分勝手な要望を伝えると、地上に向け、ヘリから飛び降りた。

D a s n ? c h s t e M a l サム・ヒンデンベルグ 中

第3章 サム・ヒンデンベルグ 前（後書き）

ドイツ支部のエントランスは、世界観共通で原作の極東支部と同様の内装になっております。さて、受付嬢がいらないとお気づきの方は……、後ほどに用意しますよ。

第4章 サム・ヒンデンベルグ 中（前書き）

極東出身の若者は、初めてこの地で自らの実力が挫かれ、挫折していた。その時に、若者は一人の神機使いと出会う――。

第4章 サム・ヒンデンベルグ 中

アラガミ

それは人類最大の天敵に相応しいといえる、生き物である。

2046年に最初に発見された時は、ミミズの形をしていた。

その半年後に、ミミズは次々と形を変えていった。

4年後、2050年に「獣」になり、人類を襲った。

わずか半年後、一国の大陸は、滅んだ。

そして人類の文永にピリオドを打つように、次々と世界各国の大陸を襲い始め、「捕食」する。

もちろん、人類もそれを黙って見過ごすわけが無い。戦ってはいた。だが、それは不可能だった。

その生物は、武器、兵器等の人工物までも「捕食」するのだ。

そして生物は「捕食」した物の物質を取り込み、さらに形と能力を変えていた。

いつしか人類は高度に栄えた文明を捨て、逃げ続けていた。

もはや世界中に存在している生物から、逃げ場は無くても。

そして人々は、その生物に恐れられ、こう呼ばれた。

日本という国から八百万の神から唱えて、「アラガミ」と呼ばれた。

その名は、瞬く間に世界に伝わり、その名から「神」の裁判だと思われ、恐れられていた。

このまま世界が終わるのを、見過ごすしかないのか――

だが、それでも人類は進化する。

遂にはアラガミも倒せる力を、得たからだ。

その名は、「神機使い」。別名「ゴッドイーター」。

生態武器「神機^{シンキ}」を操り、アラガミを喰らうことができる、人類最

後の希望。

希望対絶望。その戦いは、人類の長い歴史から比べれば火蓋が切り落とされたばかりだが、早くも激闘を繰り広げていた。

そう、彼らのように…

「うおおらあッ!!」

「よし、気を抜くな!!」

「…消えろ…!」

荒れ狂う吹雪に覆われた、雪に積もれた人気の無い廃墟に、激しい抗戦がこの地に勃発していた。

壊れ果てた町や居住区から、唸り声を上げながら住居、建造物を壊して次々と姿を現してくる。

鬼の形相と強靱な筋肉の両足に背中に白い体毛、尾には鬼の面がそのまま尾に付いている、一目で見るとそれは肉食恐竜の一種に類似している。

だが顎からは獲物を串坐しで喰らうように上に向かって大きく伸びている牙が二本飛び出ている。

「オウガテイル」。アラガミが本格的に人類を襲い始めた頃には存在していた。

複数のオウガテイルが群れを成して一つの目標を定め、そのまま進撃してくる。

その途中に何か直撃したように爆破し、倒れるアラガミもいたが、ものともせず前進する。

そしてアラガミが目標に近づくと、今度はアラガミに向かって二つの影が走り、切り刻んでいく。

「はあ…！おい少年、動きが鈍くなってきたがそろそろ限界か？」

「何度も言わせるな。…ソーマだ。」

「へいへい、分かりました。こつちもまだ行けるぜ!!」

荒れ狂う吹雪で危うく少年の頭から脱げそうになったフードを被り直し、舌打ちをしてからすぐに次のオウガティルを向けて駆け出す「ソーマ」。彼の肌黒い顔がわずかに疲労の表情を浮かべていたのを男は見過ごした。

同時に黒髪の日系人の男、「雨宮 リンドウ」が笑みをわずかに浮かべる。しかしすぐに迫ってくるオウガティルに視線を向けなすと、笑みを消して手に持つ、それは自身の身長を超えている居剣の先端に、生温い体液がこびりついているチエーンソーの「神機」を持ち直し、すぐにオウガティルに切りかける。

すると二人から遠く離れていた四匹のオウガティルが尻尾を上高くあげ、先端からニードルを三発、撃ってくる。

ニードルは二人の上に降り注がれるが、二人はそれを避ける——
——つもりは無い。黒髪の男は一瞬視線をオウガティルから離れたが、オウガティルが気づく間もなく視線を戻し、そのまま首を切り取る。ギリギリまで迫ったニードルが、次々と爆発と共に砕け散る。

二人は分かっていた。これを防いでくれるから

二人より離れた場所に、今度はオウガティルに、これも慎重を超えるドラム缶が設置されているマシンガン系の「神機」を次々的確に狙い撃つ。

「サンキュー、姉上。」

「最後まで油断はするよな、お前達!」

黒髪の日系人の女性「雨宮 ツバキ」が鋭い瞳をオウガティルと二人を見ながらトリガーを引き続ける。

群れで集まったオウガティルが、いつの間にか片手で数える程度まで減っていくと、その場を逃げようと三人に背を向けて走り出す。

「ち、一匹もここから逃がすな!」

「了解です、姉上!」

「…どけ。」

少年が男を飛び越え、そのまま逃げるオウガテイル達を、一撃ずつ、連続で、無数のかぎ爪をむき出した鋸の居をした「神機」を、食い込ませる。

頭、首、胴体を切られたオウガテイルが、力なくその場で倒れる。一瞬の微動も無く、二度と動くことはなかった。

「ふう、これで最後か。」

「ああ、もう作戦区域から逃げ出したアラガミはいないはずだ。」

「だと、良いけどな……」

「リンドウ、核の捕食回収をしておけ。今までの稼ぎ報酬に丁度良いだろ？」

「了解。ほら、ソーマ。お前もだ。」

「……」

二人はオウガテイルの死骸に向け、二つの神機を向ける。と、

刀身が生きている様にうねりだし、塚から深い闇の出現と共に無数の触手が生え出す。

権がうねりながら、触手はじつくりと、一つの形状に変貌した。

巨大で、上下に分かれた顎と獲物を被りつく牙、上あごに瞳無き眼光が、死骸に目を揺らがしている。

「捕食形態」。神機使いがアラガミを「喰らう」時に使用する、神機の力の1つ。

そして巨大な顎が伸び、オウガテイルの死骸を喰らいつく。

顎はオウガテイルの頭、足、尾、そして肉を、骨を、内臓もじつくりと喰らっている。待ちに待った獲物を食欲が満たされるまで、貪りと喰っている。

顎が満足げに元の神機に戻ったときは、そこにオウガテイルという死骸はすでに一欠けらも無くなっていた。

「おお、レアモノ……じゃねえな。」

「……」

「何はともあれ、皆ご苦労だった。今迎えに連絡を取っておいたから、そのままここで待機だ。」

「やれやれ、ようやく終わったか…。さすがに体が倒れそうなほど悲痛を上げまくっているのに…」

「ふ、確かに…。だが無駄では無い。これで当分ロシアにアラガミの襲撃は、無いはずだ。」

「はは、まあ、そうですね…」

途中からリンドウの全身に深い脱力感を襲った。

それをツバキが察知したのか、声を掛けてみる。

「…？どうかしたか、リンドウ。」

「ああ、いえ、何でもありません、姉上。」

「…ふ、何度も言わせるな。ここでは「隊長」と呼べ。」

「りょーかい。まさか今日で二度も間違われるとはな…」

「…フン。」

二人より少し離れたところでソーマは神機にこびりついた鮮血を手で払い流す」。

それを終えると、近くにあった瓦礫に腰を掛け、肩に神機を担ぎながら、荒れ果てた廃墟を眺めている。その少年の瞳に、わずかに睨みを付く。

（ことなくそつたれな世界に、安全はねえ…。）

それは、アラガミに滅ぼされた世界の現実を示した、少年の思いだった。

その直後、

「…！」

ソーマが急に立ち上がる。二人はソーマに顔を向ける。

「まだいる…！」

そのとき、三人は手に神機を構え直し一瞬でその場を離れる。と、そこに三本の落雷が降り注がれた。もしまだこの場にいたら、雷球の餌食になり、体は焼き焦げて跡形も無くなっていた。

「今のは…」

「まさか…！」

三人は飛んできた落雷の方向を見渡す。吹雪が視界を遮らせて見え

ないが、そこにわずかに映る影に視線を捕らえる。二体だけだが、リンドウより巨体で、先程のオウガテイルとは違い、強靱な肉体と四肢、背中には六本のマントが生えている。その赤い瞳が、三人を睨みつける。

「あれは、ヴァジュラか！？それとも…」

「いや、リンドウ…どうやらこの大陸に住むアラガミのようだ。恐らく、アレは…」

ツバキが額に汗を流しながら喉を摘む。

獣に観えるそれは、「ヴァジュラ」と同じ種族だが、外見はとても違いをしている。

徐々に吹雪の中からその姿を現してきた。

全身に白い冷気が漂い、マントは限りなく蒼に染められており、肩には冰山のように尖った鎧、何よりその特徴は、いかなる生き物も睨まれただけで命を奪う冷徹な瞳を持つ、肌白い女神の顔をしていた。

それは三人に向け冷酷な女神の顔で、咆哮を唸らせた。

「プリティヴィ・マード…」

ツバキの表情がわずかに青ざめながらもそれに銃口の狙いを外さないまま、その名を言う。

プリティヴィ・マードは近年ユーラシア大陸北欧部に目撃されているアラガミである。

尚、ヴァジュラとは外見が今では絶滅した肉食獣の一種「虎」に似ているが、背中に六本のマントが生えており、主にそのマントからは雷球を飛ばし、巨体であるにも関わらず俊敏な素早さで獲物を翻弄し、如何なる物を切り裂く爪と存在する物全てを喰らう牙を持ち、アラガミの中では最強までは往かないが、百獣の王とも言える存在だ。

しかしリンドウ達が見たそれは、ヴァジュラなら単体でも倒せる実力はあるが、その上位種だからだ。

まして、自分達が今まで戦ってきた地にその情報はあつたが目撃、

戦闘もしたことがない。ハッキリ言って未知の相手と戦うからだ。だからといって同様に敵に悟られないよう、焦る気持ちを顔に出さず、プリディヴィ・マードを警戒しながら構える。一切の隙を見せず、ただ後ろに見渡しながら一歩ずつ、引いていく。

二匹のプリティヴィ・マードも、それを警戒しながらゆっくりと三人に距離を縮めるように歩き出す。

これの繰り返しで互いに相手を警戒しながら、逃げるか、捕食するかの間合いを続ける両者。

しかし、長くも続かなかった。

丁度ツバキたちの後ろに瓦礫が行方を阻ませたところだ。ソーマが背後に気配を感じ、巨剣を後ろに向こうとするが、その襲撃に間に合わなかった。

瓦礫から高く飛び、オウガテイルと似ている物体が三人に向け牙を立て降下する。

間一髪ステップでかわすが、それがツバキ達にとって最悪の事態を招いた。

二匹のプリティヴィ・マードが三人の隙を着いて本格的に襲い掛かってきた！

「ち、不意を突かれたか！」

「姉上、どうやら簡単には逃がしてくれそうも」

「無いらしいな……」

いつの間にか二人の前に、五匹のオウガテイルが逃げ道を阻むように囲んでいたのだ。

だが正確には、これもプリティヴィ・マードと同じように、別種の存在がリンドウとソーマに牙を立てている。

「ヴァジュラテイル」。全身はオウガテイルと似ているが、違いは頭部に鶏冠みたいに高く上げている角と尾に電流が走っている所だ。その名の通り、「ヴァジュラ」に似た外骨格を持ち、オウガテイルの素早さと攻撃パターンを加え、尾に電流を流して叩きつけたり、相手のいるところから落雷を落とす能力を持っている。

先ほど三人の前に落雷を落としたのは、このヴァジュラティルだからだ。

近年存在を確認されたばかりだが、リンドウ達の實力には問題なく解消されるのだが…

ヴァジュラティルにリンドウとソーマは剣を構えようとするが直前でそれを止める。

背後に助走を付けながら天高く飛び掛かるプリティヴィ・マードから間一髪左右に退避。

リンドウ、ツバキとソーマに分けられ、五匹のアラガミは分かれて襲い掛かってくる。

獲物を分断させて片方ずつ攻める気で、三人に襲い掛かる。

「最初からこれを狙っていたか…」

「関係ねえ…全部、ブツ切るまでだ!!」

「ソーマ、一人で行くな!!」

ツバキの命令を無視し、ただ一人、プリティヴィ・マードと五匹のヴァジュラティルの陣に突っ込んでいくソーマ。ツバキは背後でソーマに対峙するアラガミに銃を放つ。

そしてリンドウには…

プリティヴィ・マードが見下ろすようにリンドウの周りを歩きながら睨みつける。

「はあ…人間の女神様なら俺は大歓迎なんだが…アラガミの女王様かよ…」

のんきに、しかしその目は確かにプリティヴィ・マードから視線を離さず神機を構える。

「でもなあ、今回はたっぷりと、アンタに八つ当たりをさせてもらうぜ…」

間を切れたか、プリティヴィ・マードが先にリンドウに飛び掛る。が、リンドウはそれより体が反応し、ステップでかわす。着地したその場で神機を構えなおし、今度はリンドウがプリティヴィ・マードに駆ける。

「あの黒虎代わりに……なあ！！」

町から離れた、広い倉庫。

その中に、次々と連続に放たれる雷球を避け続け、リンドウが神機で切りかかるうとした時、黒い影がそれごと弾きコンクリートの床に叩きつけられる。

「はあ、はあ……」

リンドウが神機を杖代わりに、息を苦しく上げだす。
思っではいなかった。

自分が今までこんな事態に陥れるとは。

いや、こんな化け物に実力の差に恐怖を再び感じさせられたのは、いつの日か。

息を上げながら立つリンドウに休息を与えられるはずもなく、頭上から巨大な雷球が降り注がれる。

これを避けるリンドウだが、雷球がその場に衝突すると地雷の様に広範囲の爆発が起き、その衝動で倉庫内が揺れると同時にリンドウが壁に吹き飛ばされる。

「くそ……」

全身の骨がどこまで折れたか数えられないほど全身に激痛が走る。

視界がぼやけてハッキリと見えないが、それでも今対峙している相手に視界を離さない。

彼を真紅の瞳で見下ろす、黄金のマントから溢れる程の電流が流れ、全身が黒き巨体な獣の姿が。

黒き雷獣は限界に追い込まれたリンドウに止めを刺すべく、雷獣の黒い爪が、振り落とされた――。

「ぐう!!」

プリティヴィ・マードがリンドウに向け連続で放つ氷柱をリンドウは神機を自分の目の前に立て、柄にある左右に分かれた「シールド」を展開させ防ぐが、連続に放たれた氷柱に耐え切れずやがてリンドウの全身を踏ん張る力が耐え切れず、氷柱が撃ち終えたと同時にリンドウが吹き飛ぶ。

「リンドウ!」

普段から冷静な判断と決断力を持ち合わせているツバキの表情に焦りを隠しきれない。

勢いに飛ばされ倒れたリンドウにプリティヴィ・マードが一瞬でリンドウの間合いをつき、その冷酷な女神の顔に口が開き、リンドウを喰らいつこうとする。だがその前にプリティヴィ・マードの視界が一瞬に周りが強烈な閃光に襲われ、目が見えなくなる。

リンドウがプリティヴィ・マードに近づく寸前に「スタングレネード」を投げつけていたからだ。

スタングレネードは、当たれば強力な閃光を放ち、アラガミの視界を一時的に奪う目暗まし爆弾の事だ。

「今ので最後だが…損はねえ!」

視界が見えないプリティヴィ・マードが苦痛の叫びを上げながらその場でもがく。その間にリンドウがプリティヴィ・マードの背後をとった。

「よし、ここだ!」

再びリンドウの神機が「捕食形態」に変化し、プリティヴィ・マードの体を喰らい突こうとするが、

「何!?!」

視界を奪われていたプリティヴィ・マードが高く飛び上がる。

リンドウは食らいつく寸前の捕食形態を中止させ、神機の盾を構えた。

巨体を回転しながら同じ場所に着地すると、その周りに放射状に氷壁が飛び出す。

ヴァジユラに無い行動を取ったプリティヴィ・マードに油断するが決して避けられない事は無く、すかさずリンドウは構えた盾を戻し、剣をプリティヴィ・マードに斬りかかるが、思わぬ予想外が起こった。

「リンドウ、後ろだ!!」

ツバキが慌しい顔でリンドウに叫ぶ。

それに反応し思わず体が反射的に避けるが、わずかに遅かった。もう一体のプリティヴィ・マードがリンドウに跳びついた衝動にリンドウの体制が崩された。

その隙を見逃さなかったか、リンドウの相手をしていたプリティヴィ・マードが冷機を覆われた爪を斬りつける。が、リンドウはそれを避ける間もなく、直撃し吹き飛ばされる。

「ぐおッ!!! がは、くそお... 少し、不味い、か...」

やはり恐れていた。

今まで極東という世界で、自分は経験を稼ぎながらいつしかトップレベルに立っていたこと。

だが今は違う。

極東を抜け、その地のアラガミ掃討作戦に参加し高い実力を誇った。だが、その後にあつたのは、屈辱と恐怖だけ。

北欧にするアラガミに、両親とその娘も守れず、歯も立たずに、初めて折れた己の心が。

この二体のプリティヴィ・マードも同じ北欧に住むアラガミだが、同じ位強い。

絶望と後悔に追い込まれたリンドウの脳裏に、ある記憶がフラッシュバックに映し出される。

「…確かにあんたは強くなるかもしれない、いや、きっとなるだろう。でもね、覚えておいで。強いものは弱いものをなえがしろにしちゃあいけない。人が縋ってるものを踏みにじるようなことはやっちゃあいけないんだ。」

「祈りみたいな意味のねえものでもか？」

「そうさ。それこそが、強さの源になるんだからね。」

「はあ!？」

「叶う宛の無い祈りや希望を、本当のことにできる力、それが、真の強さつてもんなんだよ。」

「…意味が分かんねえよ。」

「そうか…忘れてたな…。」

幼い頃、老婦人がリンドウに言いつけられた記憶が浮かびだした。その婦人は孫でもないリンドウを世話し、毎日間違った事を叱りつけているが、時に卵簿のように優しくしてくれた、幼馴染の祖母。今はすでにこの世からいない。だが、祖母がリンドウに告げたあの言葉が記憶の奥深くに刻まれたまま生きてきた。それが今となって死期に近い自分にフラッシュバックに再び掘り起こされた。

「ナツばあ…今でも、やっぱわかんねえ…。だが、一つだけ、一つだけ、分かった…」

アラガミの連戦で体が傷つき、立つのもままにならないリンドウが、神機を地にさし、それを体に支えながら立ち上がる。

「例え絶望に追い込まれた世界に、一人一人の希望を、俺が、護り抜く…。こんなもんか？」

目の前のプリティヴィ・マードに今まで殺してきたアラガミ、戦いで死んでいった仲間、何も出来ずただアラガミに捕食される力無き

居住区民達が次々と浮かべながら消えるを繰り返し、再びプリティヴィ・マードに視界が映し出される。

「だったら俺は…、護ってやる…。誰一人死なせずに、こいつらをぶっ潰して、全員…生きて帰らせる…！」

再びリンドウが神機を構え、二体のプリティヴィ・マードに向け駆け抜ける。

「うおおおおあああッ…！」

限りなく、最後の力を振り絞り生命の咆哮を上げながら駆け抜ける勢いは、窮地にたった手負いの獣のようだ。

プリティヴィ・マードもその命を断つべくリンドウに駆ける。

互いに力を果てるまで叫ぶ命と本能が想うがまま獲物を捕食するために咆哮し、向かい合う駆け抜ける二つの影と雄叫び。

そのとき、

「どううううう…おりやあああああああッ…！」

頭上から耳が破裂しそうな雄たけびがリンドウ、ツバキ達の耳に叫び渡った。

思わずリンドウが上を見上げようとするが、一体のプリティヴィ・

マードが間近に迫っていた。

一瞬の合間に、鈍い音が響く。

プリティヴィ・マードの背中から鮮血の噴水が噴出され、もがき苦しみながら暴れると、その背中から「トウ！」と掛け声が上がると同時に、一つの影が背中からリンドウの前に地響きがなりながら降り立つ。

それは、思わずリンドウ、ツバキの目が丸く開かせたぐらいの、大胆な特徴をしていた男だった。

その男は、傷ついたリンドウに手を差し伸べる。

「よお。随分と御苦労なさったな、小僧。」

サムの手にはソーマと同じ巨剣だが、刀身は斧と先端に槍が付けられており、ポール・アックスの形状をしている。

「あんたは…？」

「まあ、そんなのは気にすんな。それより、とつとあの白猫ちゃんを片付けようぜ。」

サムが後ろのプリティヴィ・マードに親指を立てる。

「姉上達は？」

「あれなら問題ねえだろ。オウガテイルより狂暴だが、たいして強くない。さてつと…小僧、それからネーちゃんに…見た目からしてネガティブ坊主？」

「ソーマだ。」

「おお…そうかい。」

見た目からわざとらしく誤るふりをして、

「坊主とネーちゃんはヴァジュラテイルを先にぶつ潰しな。俺と小僧は、ベリキモ顔の白猫ちゃんを刈りとくぜ。」

「余計に増やしてるぜ。」

「！…まで、お前！」

「ネーちゃんよ。とりあえずはここ出身の俺の支持に従ってな。600パーと十分までには生きて帰れるってオチに終わらせとくからよ。」

ツバキが苦難の顔をし、少し建ってから頷いた。本心は弟のリンドウを死なせたくなかったが、この状況を打破するには、北欧の神機使いの判断に茹だれられるしか無いと、躊躇いながらも判断した。

（坊主。奴の胴体を集中的に狙つとけ。幸いまだきれてもいねえのが、ラッキーだな。）

（あんた、随分といい加減だな…）

（へ、若鶏に言われる筋合いは…）

もう一頭のプリティヴィ・マードが二人の左右を囲み、全力疾走で

大地を駆けていく。

サムとリンドウが同時に、いや、わずかにサムが体を動いたのを反応して、リンドウも動いた。

「おおおらあああ！！！」

「ウオツカを飲めるようになってからなあ！！！」

二人がプリティヴィ・マードの牙の噛み付きを避け、同時に胴体に神機を深く突き刺す。

初めて苦痛の唸りを上げ暴れるプリティヴィ・マードだが、二人は更に深く刺した神機を下半身まで垂直に食い込ませる。

一旦神機を胴体から抜き差し、二人は距離を離す。と、片方のプリティヴィ・マードが思わずその場で強靱な巨体を倒れこむ。前にサムの神機に背中をやられたダメージが重なり体力を奪われたのだらう。

二人がそのチャンスを逃さず、追撃。が、進むリンドウを置いてサムが立ち止まり、もう一頭が爪を立てサムに引っ掛けるが、それを神機の斧が受け止める。

「コンボで息の根を止めとけ！！！」

倒れこんだプリティヴィ・マードにリンドウが神機を次々と切り刻む。その合間に神機を俊足に「捕食形態」に変形し、喰らう。

リンドウの体内が一気に暑く燃え上がり、野獣のような雄たけびを上げる。

「行くぜえ…バーストオ！！！」

燃え上がる勢いに任せ、更に動き、力が格段に上がったリンドウが手負いに倒れる獣に立つ暇も与えず次々と、切り裂き、また「捕食形態」に変えては喰らう、繰り返しを続ける。

とうとう手負いのプリティヴィ・マードは息をすることも無く、最後の力を振り絞った弱い唸りを上げて、朽ちる。

と、一息ついたリンドウの頭上にヴァジュラテイルが飛び掛かり、牙を立てリンドウを喰らおうとする。

リンドウは神機を構えるが、その前にヴァジュラテイルに爆発が起

こるのが早かった。

その場で墜落しダウンするヴァジュラテイルに、ソーマが跳躍でその首を叩き落した。

「ふうー。助かったぜ、ソーマ。」

「終わったただけだ。お前の身はお前が守れ。」

「リンドウ、こっちは何とか片付けた。後は、」

「このゲロデスク顔の白虎ちゃん…とお!!」

プリティヴィ・マードの噛み付きから身を避け後ろに下がるサムと、プリティヴィ・マードが前までにならない程の雄たけびを上げる。

「とうとうキレた、か…。」

アラガミの怒り。

アラガミ自体に人間と同じ感情を持ち合わせているのかも不明だが、小型のアラガミを除いて彼らが怒ると、自身の高い能力をさらに上げたり、違う攻撃を行うという、地球上の生物に比べると独自の能力とも言え、同時に脅威ともなる。

「さあてつと、こっから本番だ。もつとも、5分で終わらせるがな。」

「

無茶言つぜ。こっちの身にもなつて欲しいもんだ。」

「お前らは含めなくても…俺様だけでも5分で、大充分!!!」

目に止まらない速さでプリティヴィ・マードに駆け抜けてゆくサム同時に3人も散開し、プリティヴィ・マードに攻撃を仕掛ける。

プリティヴィ・マードも一回転の跳躍で高く飛び、巨大な氷柱をリンドウ達に落とし、後ろに距離をとる。

氷柱からあっさりと交わす3人、その背後にツバキが神機でプリティヴィ・マード目掛け、炎を纏った弾丸でリンドウ達を援護射撃。しかし聞いてはいるもの、プリティヴィ・マードは一切動きを止めない。

リンドウとソーマは止まらない獣に神機を食い込ませるが、通りもせずに、ジャンプで弾かれる。

「！？何だ、コイツ…硬え！？」

「くそ…」

「コイツはキレると体を硬直化する！さらに素早さを上げては実を守るように堅くする！…いわば…そうだなお…おお！「難攻不落の動く城」！！」

名案でも思いついたかのように明るいノリでそれを言う。が、ソーマはともかくリンドウはどうも気難しく思え、汗を垂らしながら苦笑する。

「あ…まあ、合つてはいるんだが、ここでこんなノリでいわれてもなあ…」

「んだあが！！どんな強固な壁があつてもだ…」

ソーマが頭を落とそうと跳躍で高く上げた神機を振り落とすがマントに受け止められる。それでもマントごと食いちぎるように神機の刃を食い込ませるが、その前にプリティヴィ・マードが体を飛び、反転で弾き出される。だが、それが盲点となった。

着地したと同時に、突然強烈な激痛が走った。その痛々しい叫びを上げる。

分からなくは無い。いつの間にかサムがプリティヴィ・マードの胴体を、捕食形態で喰らっているだけだった。それも、サムが先程斧で食い込ませたばかりの傷に。

「…一つのヒビから、その障壁は石ころでも、脆く…」

神機を元の状態に戻すと、サムの体内が、一気に燃え上がるのを感じ、野獣、いや、全ての生き物を膝間つける恐竜の様に、大地が揺れる程の雄たけびを上げた。

「…崩れえるううう、もんだあああああああああああああああああああああああッ！！！」

それはリンドウのバーストモードとは比べ物にならないほど、圧倒的な威圧と力を込められた事を、サムの叫びで全身が吹き飛ばされる程振るいあがらせ、身の肌から全身、脳まで行き渡って感じられた。

プリティヴィ・マードもそれに負けず叫び、プリティヴィ・マードが飛び、押しつぶそうとする。

「遅え…遅えぜええッ！！！」

踏みつけようとするプリティヴィ・マードに恐怖を感じられず、余裕たっぷりの笑みをあげながら、巨大な神機の斧を、プリティヴィ・マードの顔面に振り、叩きつけた！！

叩きつけられた衝撃でプリティヴィ・マードが体ごと回転されながら地面に転がり、崩れかけた3階建ての廃墟に追突する。それで廃墟から瓦礫が雪崩落ちて埋まる。

一瞬の沈黙から、プリティヴィ・マードが瓦礫から這い出す。顔面には、サムに叩きつけられた斧の後ごと、冷酷の女神の頭が変わり果てたように、肉が見え、片方の目が取れそうに神経に揺られて飛び出されていた。

活性化したはずのプリティヴィ・マードが嘘のように弱弱しくなり、体がふらついている。

しかし虫の息の獣に休息は無い。サムが神機を左肩まで上げ、足を踏ん張り、神機に力を注ぐ。

「さあて、とお…。そろそろ…Ein Ende（止め）を打つてやる！！」

サムの周辺に地面が窪み、全身から蹴落とされそうなオーラが流れ、リンドウ達も思わず威圧されそうに後に引く。

「さて、あの距離でチャージクラッシュは届かない。」

「あつと、そういえばそうだ。おっさん、せつかちすぎるぜ。」

「チャージクラッシュ」。

大剣の装備を付けた神機だけが使用できる必殺。

神機に力を溜め、アラガミに溜め込んだ神機の力を解放し、そのまま振り落とすという、単純だが破壊力は抜群の必殺とも言える。

しかし欠点はある。まず溜め込んでいる間の隙と、その場から移動が出来ないことだ。

例えば、今のサムとプリティヴィ・マードの距離。100mも離れ

ていては当たり前もしない、それだけだ。

「け、だから小僧どもは、青い。何せ俺のはなあ……」

冷やかしを仰げるリンドウを余裕満々の笑みで聞き流すと、サムは神機に力を蓄えたまま、プリティヴィ・マードに……信じられない高さのハイジャンプでプリティヴィ・マードの頭上まで飛ぶ。

そこから急速に神機を上に加え、落下する。そして神機に蓄えられた力を、弱った獣に容赦なく鉄槌を振り落とされた。

獣の脳天が二つに割れ、目玉が飛び散り、肉と骨が丸出しに、あまりの激痛に吼える。

「チィィィエ、スウトオオオオオオオオオオッ……!」

まだ力が溜め残っている神機の刃を、着地と同時にプリティヴィ・マードの横面に二度、バットの様に連続で叩きつける。と、獣の頭はちぎれ、鮮血の雨を流しながら女王の頭は、リンドウ達の目の前に転がり落ちた。思わずリンドウは実を避ける。

ありえなかった。

チャージクラッシュの欠点を無くし、さらに一撃だけでなく連続に叩き込める荒業をする神機使いがいたとは。ツバキの脳裏にそう浮かびだした。

とうとう、冷酷の女王は、頭を失いその場で、崩れ落ちた。

そのままの体制から、神機を手軽に肩に乗せる。神機の重量がサムの足元が少し沈む。

「は、この程度かよ?」

それは余裕の笑みをしていた。右手の小指で鼻を穿り、クソを遠くに飛ばす。

飛ばした鼻クソは、吹雪の中に消え去っていった……。

D a s n ? c h s t e M a l 「サム・ヒンデンベルグ
後」

第4章 サム・ヒンデンベルグ 中（後書き）

次回も少しこの話が続きますが、それは後ほどに投稿されます。

第5章 サム・ヒンデンベルグ 後（前書き）

サムと共にプリティヴィ・マードを撃破するリンドウとツバキ、ソーマ。サムは悔やむリンドウに気づき、リンドウにある術を教える。それが後のリンドウ、その彼を率いる者達が確実に生き残れるものになるのだった——ッ。

第5章 サム・ヒンデンベルグ 後

「おおっと、レア物ばかりだな。」

「北欧しかないアラガミのコアは、極東にとって貴重な物だ。」
戦い終えたリンドウがプリティヴィ・マードとヴァジュラティルのコアを「捕食」で摘出していた。

極東にこのアラガミが未だに存在しない中、コアを回収、極東に持って帰れば、貴重な

ソーマがもう一体のプリティヴィ・マードのコアを捕食しようと、神機を構えるが、

「おおっと、これは俺のもんだ。」

ソーマの隣からサムが割り込み、そのままプリティヴィ・マードを捕食する。

「…何をする…。」

「おい、あんた!？」

「簡単だ。俺がタダで援護すると思ってるのか？」

神機が捕食し終わるとサムは神機を元の形態を戻し、槍部を地に突き刺す。

「要するに、報酬はもちろん平等で分け合うだけ、だ。悪くないだろ?それにこっちは下らねえ任務の 帰りに暇つぶしにこいつらを相手にしてやっただけだ。」

「アンタの事情は知らんが、ごもつともですな。」

「とにかく、まずそれも構わずに援護をしてくれたのは、感謝する。」

「フ…なあに、遠慮は… 要りませんぜ。」

突然彼の口調と態度が眠りのお姫様を迎えに来た往時みたいに変わった。

「何故ならこの私、あなたの美貌に一目で奪われてつい体と心が動いて助けに向かって、後はこのダンディ・ジョンブル・サム様との

おデートを—— ツ……「任務外だ。」……スガア~~~~~ン
!!!」

いつの間にか花束を持つてはツバキに蟹股走りで近づいては●パ
ンダイブの様にジャンプして抱きつこうとするサムだが、それに悪
感を感じたのか、ツバキはギリギリの手前で避け、サムはそのまま
地面に激突する。

リンドウがわずかに腹を堪えながらも、サムに生きているのか指
を叩いてみるが、反応が無い。彼は振られたと思い、

「珍しいというかわわり者というか、無理だぜ、オッサン。姉上は
俺らの支部の隊長であつてな。今まで……」

「有無！ますます魅力があると実感した！！」

「て、立ち直り早！？」

まさかの予想外にリンドウが扱けそうになる。

「あの黒い真珠の用に輝く髪に決して崩れることが無い強い意思を
表す美貌！ああ、このサム・ヒンデンベルグ様に一目で振り向かせ
る魅力の女性に出会えて、俺、人生最高頂の幸せのベリカンゲキの
クライマア—— ツクス！！」

眼をキラキラ光らせながらツバキに意味不明な愛の熱説を語り続
ける。

「あんた、それで来たのか？」

「たつりめーだ、ボケ！たかが旧世紀のアメリカや極東でお子ちゃ
まが憧れている娯楽番組の正義の味方みたいに悪役に襲われちゃっ
てる奴を見過ごせず助けてあげるってつまんねえルールでこの俺様
が行くと思つてんのか！？」

「あはは……何か反論できない自分がちよつと恥ずかしい……」

もうお手上げだとリンドウは呆れる。自分も美人に弱いところも
あり、時にいい加減だと部下に言われるのが多いが、自分と似通っ
た、いやそれ以上の前では、今更だが恥を覚えてしまう。

気がつけばツバキは完全にサムを無視して持っている端末機で連
絡し合い、ソーマは三人に距離を置いてまた雪景色を見つめていた。

完全に嫌われたな、オツサン…（苦笑）。

「何か悪口と愚痴を言ったか？ ギロ」

「おおっと、何でも。」

内心呆れたリンドウにガンをつけるサムをいつものお気楽な調子で流す。

リンドウの懷からタバコを一本取り出し、火を掛けようとした瞬間、
「で、お前さん。」

サムがリンドウに言つと、

「力が、欲しいんだろ？」

サムの言葉に、リンドウが身体を固める。

それは、今のリンドウが気にしていることを直接打ちこまれたように。

「さて、何のことやら？」

「とぼけた面してんじゃねえ。」

話題を逸らそうとするリンドウに、サムの眼光がそれを逃がさない。

「オメーは他の奴らとはちつと違う感じをしてるが、今のお前は他の奴らと同じ泥沼にはまり込んでいるらしいな。」

さつきまでふざけきつたサムの顔が真剣にリンドウを見つめ、

「ここは他と違ってこの欧州しか住まない強力なアラガミ共が住み着く庭だ。お前らみてえな異国者がよく、この地で殺された神機使いも少なくはねえ。」

「…おっさん、何か言いたい？」

一瞬間を開け、吸っていたタバコを地面に捨て、口から煙を吐き出す。

その煙が、リンドウには力に及ばなかった黒いアラガミのシルエットに見えた。

サムは何もせずただ両親を救えず、敵も打てなかったアラガミに悔しげな顔で煙を払いのけるリンドウを、ただ。

「要するに、アレだ。お前は目の前でこのアラガミに食い殺され

た命の敵を打とうとしたが、実力不足で倒せず、敗因は己の力不足だと思い悔やんでいる…。だろ？」

リンドウの心理を読み取っているように遠慮もなく堂々と話す。

「そのせいか、さっきの白ドラ猫共に襲われた時も、お前の屈辱のせいで真剣に戦えなかった。」

「まあ…そうかもしれないですが…」

「じゃ強くなれば良いって済むか？なら早死になるな。」

リンドウの答えをサムが面倒臭そうに答える。

「け、青二才。そんな歳で間違いを改めても、次に出るときにはとつくにくたばってるのがオチだ。それで俺の前で何人も死んだか、もう指じゃ数え切れねえな。」

何の躊躇もない、サムの解答。しかしリンドウには一言が重く響いた。

「さっきのキモ顔の白猫だって、もしお前がすぐに間違いを改めて、楽勝苦戦問わずに奴を倒せたのか？答えはNein（違う）。」

サムの左手に死を意味するサムズダウンをリンドウに向けた。

「……」

「あの時はヴァジラもどきのせいで撤退もできなかったのかもしれないが、戦わず逃げればこんな風に苦労もしなくて済んだのによ。」

「…あんたは、何故助けた？」

「言ってなかったか？青二才。つまねえ仕事帰りのついでにキモ顔の白猫のデートをしてやったまで。一言で言うなら……暇だったからだ。」

「姉上のことじゃなかったのか？」

「追加だ。てかいちいち突っ込むな。」

リンドウに平手で胸に突っ込む。だが、あえて口にしない。

どちらにせよ、リンドウや姉のツバキより経験と実力を積み上げた、いい加減な性格をしているが、間違いなくベテランの神機使いだと分かっていた。

サムがリンドウに言ってるのは、この地でアラガミと戦っている

間違いは無いと思った。

「…俺の支部じゃ、姉上とゲンさん以外の年上の奴らは、皆食い殺された。姉上は全員生還を優先に常に前線で戦ってはいるが、最近教官の立候補に引退の話があるらしい。ついでに、次のリーダーは上層部の立候補で俺に任されるらしい。」

「良いじゃねえか。昇進だぜ？偉くなれるじゃん？」

「勘弁してくれ。おっさん。俺は、幼い頃にアラガミを滅ぼしたくて力が欲しかった。だが神機使いになってからそれは無理だと悟った。どんなに刈り取っても、奴らには俺達の手じゃ絶滅なんてできない。ただ延々と続いていく終わりの無い黝ごっこを繰り返して、生きていくだけだ。」

リンドウは自分の両手を見つめ、拳を力強く握り締める。

「俺が唯一できるのは…俺の力でアラガミを倒して、姉上のように皆を生きて帰らせるだけだった…。だが、それがここに着てから初めて折られた。俺が、あの黒いヴァジュラに敵もとれずに、今度は…まあ、さっきの奴だが、恥ずかしいが自信を無くしたな…。」

リンドウの、あの黒いヴァジュラに屈した自信を語った。

「成程、ディアウス・ピターか…。そりやあまず無理だな。」

「ハッキリ言っな、アンタ。」

「だが、そんなの気にするまでもねえ。ボケ。」

リンドウの顔面に、手に握りこめて作った雪だまが当たり、ヒヤッと冷たい感覚と、硬い岩にぶつけられた痛感が同時に襲い、思わず顔に手を覆う。

「んな暗いマイナス思考が俺ら神機使い全員そうだったら、とっくにそいつらアラガミに喰われて全滅しとるわ、青二才！だから、俺なりに一つ、生き残る方法を作ったて訳よ。」

「生き残る…方法…？」

「ああ、この汚え世界の中、俺がこうして余裕こいて生きて帰れる、術をな…。」

「じゃあ、その方法って…？」

「知りたいか…。本来は一生の価値もするもんだが、今回は無料で教えといてやる。とりあえず……四つて事で。」

リンドウの顔の前に指を四つ立て指摘する。

リンドウもそれに、何故か期待を胸の内に沸き、サムの指から目が離れない。

「いいか。とりあえず生きる。やばかったら逃げる。んで、後は尻尾巻いて逃げるか、牙向いて戦え。」

「……へ？」

これだけ？リンドウはさっきまで溢れたわずかな期待感が一気に抜け出した。

「…随分、適当と言うか、いい加減と言うか…。」

「お前も神機使いなら分かるはずだ。結果で昇進するより、まず生きて帰れる奴の方が、長生きしやすい。初心を振返ってみな？」

サムが立ち上がり、気軽な感じでリンドウの強張った肩を軽く叩く。

「おっと、美人ちゃんのお迎えか？」

4人の上空に騒音と突風が吹き荒れると、サムが上をあげる。

その上には、2機のヘリが徐々に降下して彼らの前に降り立った。

「サムさぁーん！！大丈夫ですか！？」

「……て、野郎かよ…。美人ちゃんじゃなくて…。」

「ご無事でしたか。ツバキ隊長。」

「ああ、彼のおかげで何とか全員生き延びた。」

リンドウ達三人は極東に、サムはドイツに帰路に入るように互いに所属する支部のヘリの前に向かう。

「おっと、そうだ。」

リンドウが何かを思い出すと、ヘリに乗り込もうとするサムに走り、背中を手で叩いて引き止める。

「おい、おっさん。」

「いちいちおっさん言うな、青二才ー！これでもまだ26だー！」

「だから、せつかくのアレだし…ほら、あんた、名前は！？」

「……………ホエ？」

「…あゝもゝ…なゝまゝえゝはゝ!!」

「ああ、ウツセエ！耳が痛えじゃねえか!!」

「逆ギレ!？」

「サム・ヒンデンベルグだ！忘れておけ!!」

「…（逆じゃねえか？）たく、俺は雨宮 リンドウ。いちいち青二才て呼び辛いだろ？」

「……………へ、お前がウォッカを飲めるようになったら…な。」

二人の表情が和らげ、互いに手をバアン！、叩き合った。

リンドウが手を傷めたが、サムはそれをコメディに笑いあげる。
リンドウもついそれに釣られて笑い返し、互いに笑いあった。

「そうそう、そんなことがあったな…。」

目を瞑って昔の思い出を懐かしそうに見るサム。

が、その時にサムの体が急停止した乗り物の衝動のように大きく揺れた。

その揺れで体が揺れるが、一歩も動かさずに姿勢を崩さずに耐えた。

「おっとつと…いけね。忘れてたわ。俺の相棒の様子を見に行く途中だったな…。」

エレベーターの扉が開くと、サムはそこを早足で出て行った。

その合間、彼はふと、何かを思い出す。

「…あれ？俺、何を真剣に考えてたっけ？……ま、いつか。それより美人ちゃんの部屋でも御邪魔すると思いますか。」

自分自身の疑問をさらっと流して、そのままスキップしていった。

彼は、良くも悪くも、常にいい加減な男であつた…。

D a s n ? c h s t e M a l 「神の存在価値」

第5章 サム・ヒンデンベルグ 後（後書き）

主人公よりサムの方が大幅に目立っていると思ってきました…。
ちよつとキャラのバランス悪い？なんてことは無く、むしろこれか
らが本番です。

第6章 神の存在価値（前書き）

神によつて食い荒らされた世界で、人間は既に神を恐怖の象徴として受けられ、誰もが恐れられていた。しかしそれでも仲に、今でも神を信じる者がいる。いつか、本当の神が世界を救ってくれると神事、祈りを続けている……。

第6章 神の存在価値

暗闇に囲まれた部屋の中、一つの証明がその暗闇の空間を灯り、部屋を照らしている。

その部屋は、洞窟のように部屋が岩や土に囲まれている。片付かれて無い衣服や本があちこちに散ばり、クローゼットに鍵が外れた状態で扉が半開きで、中には等身より低い媚がついたバズーカ砲やライフルが開きかかっている扉から見えている。

その照明の中、工具や金属などの小物が散らばっている机に向かって一人、真剣に手で黒い造物を持ちながら作業している、ケイトの姿があった。

紫のタンクトップに分厚い手袋を着けて、机に置いてある小型の銃、ハンドガンを改造していた。

左手に持つ小型のドライバーでハンドガンにネジを閉めていくと、それを手に持って芸道士の用に片手の指で回転し、掴み取る。

「よし、まあまあの上出来！後は弾の実験だけど…」

ケイトが今持っている、ハンドガンの引き金を抜き、机に散らばっている弾を拾い集めリボルバーに装填しようとする、ドアからノックが掛かった。

「おつといけね。もう朝か。ちょっと待ってくれ！すぐに出る！」

急いで机に置いてあった工具や小物、拳銃を全て隠し、一息ついてからコートを着てドアをゆっくりと開けた。

「おはよう、ケーネエ！」

「おう、おはよう。」

そこに出迎えたのは、6人の子供達だ。

「ケーネエ、また徹夜？目が赤いよ？」

「ははは、まあ私にとって暇な時が夜中しかないから…お前達、良

い子なら絶対に真似するなよ。」

「もちろん！だって目、悪くなりたくないもん！」

「あたしも！」

「でも僕、もう目が悪いから、いけないのかな……？」

「今更なつちまったもんを気にしたって仕方ない！それより、飯だる？もう腹が減って倒れそうだよ。」

「ケーネエ、早くいこ！ご飯、冷めちゃうよ！」

「僕、今度こそケーネエの隣に座る……！」

「またかよ、眼鏡！お前には無理、無理！」

「む……無理じゃないもん！」

眼鏡を掛けた男の子が体格の大きい子供に言い合いを始めた。回りの子供達はその言い合いを楽しそうに見ている。そしてケイトも、乳母のようにその子供達の笑顔を見つめている。

だが、その場面は一瞬で切り替わった。

ケイトの腹から不意に音が響き、子供達もそれに釣られ一斉に振り向く。

「さあさあ、早く行こうぜ。これ以上私を苦しませないでくれ！」

「はあ——い……！」

子供達の元気な返事と共に、ケイトを先頭に子供達も駆け足で朝食の元に向かった。

しばらくして……

神父とケイトが顔を見合わせながら、木材を代わりに簡単に日付が書いてあるカレンダーに昨日の日付にバツ印を塗り、二人は大きくため息を吐いた。

もう一度カレンダーに見直すと、ほぼ毎日と言って良いほど、日にちにバツ印が埋め込まれている。

「……神父、」

「…何ですか？」

肩を落とした神父にケイトが手を置く。

「…そろそろ、ヤバイじゃないか？」

「分かっていきますとも…。数日前も節約しておいた食料も底を尽く時がくるとは…。」

二人が直面している問題は、食料の確保。

ここ数日、本来ならフェンリルは居住民に必要最低限の食糧配給を配られて過ごすが、どこの支部の居住区において当たり前だった。

それがある日、フェンリルが滅多に食料の配給を回してこない為、居住区は食糧危機に陥れてしまった。

そのせいで、居住民が配給品を回すようデモや講義を行ったが、結果は今一つ変わりもしない。

ケイトもその危機に加担している。だが、力で脅迫するのではなく、フェンリルが居住区に配給できない理由を教えてくれればいいのに、と内心語っている。

「神父、今日も一応私が配給に行ってくる。」

「ケイト殿…。」

「ん？」

手に十字のラインを空中に描き、おじきで返す。それを目で伝わったケイトは、子供達を呼び寄せる為、駆け足で部屋から出る。

同時期、フェンリルドイツ支部、支部長室

血のように赤い絨毯の上に、ゲートから直線にあるデスクと両端に棚が置かれており、壁にはフェンリルのエンブレムを描いた赤い旗が飾られ、デスクの背後にワイド方のモニターが設置されている。

社長室のような敬意感のある空間が目立っている。

机の上に詰められた書類の山の中に一人、神裁きの速さで名前のサインや印鑑を押しての繰り返しをしている。

それを一人で行う男性は、一言で70過ぎの老人と思える。

汗を垂らしながら筆記仕事を続けるが、突然男性の目の前に置いてあるノートパソコンからモニターが表示される。

「支部長。本部から現状報告が入りました。」

「うむ。それで、本部から連絡は？」

「はい」。本部の報告によりますと、未だに例の新型の適合者が発見できず。その為、え、現在各支部の適合者詮索を始めたばかりです。」

「…そうか。配給品の方は？」

「新型の研究がとりあえず収まったので、しばらくは収穫したコアをドイツ支部に確保できる許可を得ています。」

「分かった。当分は技術員には摘出したコアの確保と製造を回して置け。」

「はい。」

ノートパソコンの画面を切り、手を組んで椅子を深く座りこみ、ため息を漏らす。

「まったく…いつまで続くつもりだ、本部の連中は？」

今まで心底に堪っていた不満を吐き捨てる。この場に居るのは彼一人。誰も居ないから思わず独り言を呟きやすい。

「アレの完成に、そんなに使うのか…？」

また独り言を呟く。

と、そこにパソコンから通信が入る。

ヘルベルトがEnterキーを押し、画面からサムの様子が映されていた。

「おっす、支部長。俺。」

「よし、入れ。」

ヘルベルトがそれを言うと、正面の扉がスライドで開き、サムが

入ってくる。

「よお、ジーさん。」

「何度も言っておるが、私を年寄り扱いしないでもらいたいよ、サム君。」

「じゃ、整形でもしたらどうですかあ？そんな悩み癖の皺が多いんじゃない、誰だつて口に出してしまいますぜ？」

「まったく、君は……」

ヘルベルトが頭を抱える。自分の顔の皺がそれなりに気にしている様だ。

「それで、君の報告を聞かせてもらおう。」

「あゝ……まあ、今のところ何も得られず……と。それだけ。」

「それだけでは答えとして成り立ってないな。」

「仕方ないですぜ？無いもんは無いし。」

明らかに話している感じだ。

ヘルベルトはため息を漏らしながらも、これ以上口に出すことは無かった。

「で、何か用件は？」

サムの疑問が率直に言う。

「ふむ……サム君。今日まで続いた本部に物資の輸入の事だが……今日限りで休止することになった。」

「ほゝゝお、そりゃあ御めでたいことですな。」

良いニュースを教えたが、それはどうでも良さそうな態度で褒めたふりで返した。

「そこで、これから少量の物資しか確保できなかった分、君達ゴツドイーターに、これから積極的にアラガミのコアの回収で大仕事してもらおう。一匹も残さずに。」

「つまりは、いかなる場合でも、アラガミ討伐に優先しろと？」

「そうだ。現状を知らない居住区民に悪いことをした分、我々は彼らに償わなければならない。今偏食探知機の強化と、新たに防衛周辺のエリアでの偵察任務を加えている。」

「おゝおゝ、骨が折れるわ。ただでさえ特務で忙しいのによあ…。」
「安心したまえ。サム君は引き続き続行をしたまえ。他の神機使いに行わせる。」

「あいあい…、了解つと。」

サムがヘルベルトに軽くオジキし、後ろをむいて部屋を出ようと歩きだすと、

「サム君。」

「ああ？」

「…そろそろ、君の部隊に新入りを頼もうかと思っているが…。」
「あゝ、それは簡便な！うち等は3人で足りてるっつーの！これ以上ガキを増やすなよ！うるせえし！！」

嫌がつてるようにヘルベルトの考案を手で払って断り、そのまま支部長室を出た。

また一人、静かになった空間に、ヘルベルトが腰を深く座り込んでデスクの引き出しからビニールに入れられた薬を取り出す。
薬を一気に口の中に入れ、デスクに置いてあるコップの水を飲み干すと、一息をついてからヘルベルトが呟いた。

「…アス力、本当にこれでいいのか？…困ったものだ」

そう呟くと、デスクに置いてある書類の山から一枚抜き出し、筆仕事を再開した。

「主よ、これから主がいかなる災いに置いてもお守りすることを誓い、我らは主の為に世界を生きる事を、ここに誓う。アーメン。」

「…………アーメン。……………」

> i 2 5 7 7 6 — 3 0 8 6 <

神父が片手に聖書を持ち、水平に並んだケイトと子供達が一斉に

手を合わせ、頭を下ろす。

ケイトたちの声が、かなり古びた教会から響く。

今彼らがしているのは、この時代では珍しいとも言える、礼拝。

十字架の後ろに貼られたステンドグラスを飾った窓は、ほとんど割れておりもはや絵柄など、どこにも残ってない。

中も少々手入れはしているらしいが、教会を支える木材の柱は長年の雨で湿っており、今にも崩れそうな音を風音と共に運んでくる。そんなボロけた教会の中で、神父とケイト達は、神に祈りをしていた。

荒ぶる神に世界を食らわされた今に、人々は神がこの世界を見捨てたと思い込み、いつしか誰も神の存在を信じられなくなつたが、彼らは違う。

彼らはこうして毎日生き続けている感謝として、今でもこの世界に神が人間を見守っていると信じてこうして毎週、目に見えない神に祈りを続けている。

ただ信じて祈るだけじゃない。これが教会に住む掟を、神父とケイト達は守り、いつかこの世界が報われることを信じて祈っている。それは叶えられない座和事と思われる。だが彼らには、この礼拝が唯一彼らの生きる希望。

子供達もまた、真剣に祈りを続ける。

ケイトもまた、瞳に思い描く楽園を写し、いつか叶えて欲しいと祈る。

「最後に、我々から誓いの言葉を、主に伝えます。」

神父は手に十字架を描くと、ケイト達は胸に手を当て、

「我ら、いかなる時に置いても、輝きを消えず、離れず、共に苦しき漆黒の闇を照らし続ける、希望の星となることを、ここに誓う。」

全員が一斉に言った誓いは、古びた教会に、響いた――

「じゃあ、行つて来るよ。」

「ケイト殿、くれぐれも気をつけて帰ってきてくださいな。」

「『ケーネエ！バガラリーまでは帰ってきてねえ！』」

神父と子供達が教会の入り口前で手を振って門に出るケイトを送る。

ケイトも神父達に微笑んで手を振って歩き出す。

ただ配給品を取りに行くだけだ。とはいえ、この数日間の様にまた受け取れないかもしれないかもしれないが、今の頼みの綱はこれしか無い。先ほどの礼拝は、これの為に神に祈りをしたのだ。

だが、振り返ったケイトの表情が、暗い。

（神は…）

それは先ほどの礼拝を終えた後、いつもこの気持ちになる。

その思いは、彼らに告げれば、希望を背くことになる。だから誰にも、これを…

（この世界に神なんて…いるはずがない。）

口には出さない。

礼拝を終えた彼女が目的地の配給品の受け取りに足を無我夢中で駆け出した。

D a s n ? c h s t e M a l 「人間の自由」

第6章 神の存在価値（後書き）

こんな感じで連載していきます。ほぼ押絵付きで！！ただ、不定期連載はそのままになりますが…。

第7章 人間の自由と記憶（前書き）

居住区民を守るために奮闘し、尊敬と憧れの存在と崇められているケイト。強さを挫け、弱さを助けることには誰もが評判していた。しかしそのケイトも、ある事情を誰も話さずに、ただ心の中でひっそりとしまいこんでいた――。

第7章 人間の自由と記憶

絶壁とも言える高い壁の前に、長蛇の列の如く並ぶ居住区民の姿があった。

これはほとんど毎日続くには、居住民にとっては重要な事である。毎日配られる食糧を受け取りにいくだけ。

それだけのことだが、食料を買うことも作することもできない居住区民にとっては欠かせられない習慣なのだ。

だが、最近はその頼りの食料も、いつも貰えるとはいけなくなつた。

今では存在しない宝くじの様に、ごく稀に当たるか、ほとんどがハズレのどちらかだ。

「くそ、今日はこれだけか…。」

僅かな食料をつめた箱を持ちながら、ハールが呟く。

隣にはハールより多いが、片手で持ち運べる量しかない食料を抱えるケイトがハールと共に歩いている。

「貰えるだけ有難いと思えよ、ハール。」

「お前もそう言つて、あの教会に住んでいる爺さんと子供達の食料には足りないんじゃないか？」

「贅沢など言える暇はまったくないよ。それに、久々の食料だ。今日は楽しく過ごせそうな日になりそうだからな！」

「…それ、確か全部お前が一番嫌いなものだよな…。」

「……」

ケイトが持っている箱には食料は、僅かとはいえ野菜で埋もれていた。

一瞬の伊間が空き、何気ない表情でちらつと箱を見つめてからケイトが早足でハールを通り過ぎようとするが、

「よく教会の子供等に言ってるよな？」「今の世の中喰えるだけで有難いと思え！好き嫌いは絶対にするなよ！！」だって？お前、確か

好きき…」

その一瞬、ハールの言葉が首にチクつと刺された感覚で止めた。それは、ケイトの顔に青筋を立てながら天使の様な笑顔で普段所持しているナイフの先端にハールの首を僅かに突きつけている。

「…このまま続けますか、続けませんか？」

「え、遠慮シマス…。」

「ファイナルアンサー？」

「J、JA…（ヤー）。」

「OK。」

ナイフをハールの首から離し、コートの裏ポケットにいれる。

「しかし、思ったんだが、フェンリルは何をしているんだよな？」

ハールがそう呟いた。

「何が？」

「ケイト、おかしいと思わないのか？最近のフェンリルはどうも変だ。俺達居住民に十分な食料を充てられないどころが、配給できない日が続いてることを。」

「…まあ、確かに。」

ケイトもハールの疑問に同意する。

確かにいくらフェンリルでも、居住区民を飢え死にさせるような行為をするほど残虐ではない。

何かしらの理由はあるにせよ、外部居住区を全滅させたら、フェンリルにとっては痛手の損をだす。

「俺だつて皆を主導する人間としては、これぐらい感がつく。ただ、まずあの厳重な警備を抜けなきゃ何も情報が得られないし。…！」

その時ハールの頭から何か閃く。箱を片手で持ちながらケイトに「ケイト、俺から最高の提案が出た！潜入捜査だ！」

「潜入つて、フェンリルを？」

「そうだよ！言い換えればスパイだ！」

「おい、待てよ。それは無理じゃねえか。フェンリルは職員を雇わないいぜ？もし雇うとしたら、確か武器の製造や清掃員ぐらいのバイ

トしか呼ばないぜ？てか職員に以前に、あそこに仕事を就けるなんてまず無いだろ？」

ハールがちつちと指を振り、

「あるじゃないかケイト。唯一の方法が…！誰もなれる訳じゃないが、入れる方法が！」

「…おい、まさか…」

ハールの考えを気づいた瞬間、ケイトの肩を掴んで近くの建物同士の間隙を人目に気づかれずに連れ出して、小声でケイトの耳に伝える。

（おい、本気か？）

（本気だ、ゴッドイーターだ！）

ゴッドイーター。

本命「神機使い」。フェンリルの主力であり、唯一アラガミを倒せる存在。

世界各地の支部に所属している彼らの出身は、5割以上が居住区民からフェンリルに選抜されている。主な資格条件は明らかにされていないが、フェンリルに選ばれた者だけがゴッドイーターになれるという。

「ゴッドイーターになれば、確かに苦しい戦いになるかもしれない…。でも、俺達居住区民には今の現状が知りたい！誰かがゴッドイーターになって、このフェンリルが何をしてるのか調べて俺達に報告すれば良いんだ！」

「それぐらいだったら、既になってる奴から頼めば良いじゃない？」

「…今までここに帰って顔を出した奴は？」

「あ、…言われてみれば…いないな。」

気づけばここ出身の神機使いは一度もここに帰ってはこなかった。多分見捨てたのか他の事情があつてこれないかと思うが、ハールは首を振り、

「あいつらは頼りにならない！そこで、誰でもいいから、いや、俺個人の頼みとして、一人、そこに行って密告してもらいたい！」

「頼み？誰に？」

するとハールが待つてましたと言わんばかりのはちきれない期待をしながら、指を向いた。

「ケイト、第一に君が行つて欲しいんだ！！」

期待感満々のハールが指を刺しているケイトに告げた。

ハール自信、ケイトは打つて付けの存在だと思った。

ゴッドイーターと互角ぐらいの身体能力と、武器の精密な扱い、設備や機会に詳しい、何より居住区民全員をついて行けるカリスマ性に優れた人材は入ないと分かつていた。

ハール自身内心はとても悔しいが、今の現状の危機を解決するには、優秀なスパイをフェンリルに忍び込ませてフェンリルの秘密を探りだし伝える最善の策を実行するのに、ケイトが最適だと判断したのだ。

ただし、ケイトがゴッドイーターに選ばれて上手くいけばの話だが。

しかし、ケイトの表情が突然険しくなり、期待感に溢れたハールからの答えは…

「止めとく。」

「え、何故！？」

卒倒に拒絶した。

期待を逸らされたハールは抜けた反応でケイトにその問いを聞かれる。

「私自身ゴッドイーターにはなるつもりはない。そんな一番早死しやすい職場に来て潜入捜査？ばれたら人生を早めに終わっちゃうんだから正直行きたくないね。」

「それは…でも、それだけじゃない！もしフェンリルがお前の失った記憶に関係していたとしたら、どうなんだ！？それを分らないまま、朽ちるまで記憶喪失にいたいのか！？」

否定するケイトにハールが懸命に説得をかけつつける。互いに意見が交差せず

「私には身寄りの無い子供達と体の弱い神父がいる。私が行ったら、あいつらをどうするつもりだ？」

「う…。」

「もしもだ…お前がもしその情報のためにゴッドイーターになるなら、彼女を放つといでまでフェンリルに忍び込む覚悟があるのか？」

「それは…俺には…。」

ハールの口が途中で止まり、我を返った。

ハールもケイトと同じく、大切な人がいる立場としては、とても苦しい選択だと。

「だったら他を回してくれ。きっとゴッドイーターになりたがってる奴はたくさんいる。ただ、この提案は、お前も知つての通り、」
ハールを通り過ぎ、街路に出ようとするが、途中で足を止めハールに視線を向けずに

「…我が身を削ってまで人々に希望を齎し続ける、永遠の生き地獄だと。その覚悟があるのか？」

重い鉄槌が落とされたかの様に響く。そしてケイトは箱を持ちながら街路に出た。

一人残されたハールは、拳を握り締めながら齒を食い縛り、

「俺は…情け無い…」

力強く、しかしハールという人間として、悔やんだ。

多くの居住民が次々と通りすぎる人気が多い住居路。

何もする気もしない居住民同士集まってただ寝て座り込んだり、もうすぐ夕暮れというのに、水で薄められた酒を飲み干しては酒瓶を投げて荒れる者など、今の世に絶望した人々が集まるところでも

あつた。

そんな彼らをケイトは軽く挨拶をしながらも内心では痛感している。

本当は、彼らだってこんな生活を望んでない。

昔のように生きる為に働いて、一緒に家族と食卓に並んで楽しんだり、友人と一緒にどこかに遊びに行ったりと、自由に、そして生きる価値があるから人生を楽しみたい筈だ。

それは今となってはこの閉ざされた空間の中で何の自由も無く、同じことを繰り返して一生を過ごさなければならぬ。

だからフェンリルに反発する。きっと彼らは、自分達の自由を欲する為に力いれて訴えている。

それはハールも同じだ。だからハールは、この食料に苦しんだ居住区民達を救おうと、自分から立ち上がった。

「…ちよつと言い過ぎたか…。」

> i 2 5 8 2 6 — 3 0 8 6 <

提案を受け入れなかったハールをケイトは少し後悔していた。

本当は、ハールの意見は同感していた。居住区という狭い鳥かごに閉じ込められ、さらに食料が配給されなくなり、飢えに苦しんでいるこの状況にハールは動いた。

しかし危険もある。ハールやその居住民達があの際の耀に荒くれた神機使達に拉致されて怪我をするリスクが、ただの人間にはあまりにも重過ぎる。それをケイトは見過ごせずにも助けてやったが、それがハールにとっては、居住民を救うために束ねるリーダーとしてのプライドが許されずに居住民にハールより信頼されているケイトには受け入れてくれない。しかしハールが何と言おうと、困った人を助けるケイトの心情は変わることがない。特にあの提案はケイトに向けたもので、参加するつもりはまったく無かった。

広場に入ると、箱を足元に置いて両手を伸ばし上げて夕暮れの空を見つめる。

「ま、そんなの関係ないか。…でも、」

先ほどの後悔があつさりと取り除かれたが、それより心に刺された事を無我に気にしていた。

（もしフェンリルがお前の失った記憶に関係しているとしたら、どうなんだ！）

それはケイトにとって、一番の疑問を答えるための道を記していた。

そう、ケイトは記憶を失っている。

4年前ここに来る前の記憶がまるで消去されたかのように思い出も、過去も何も無い。ただ覚えているのは、今の記憶。

皆と過ごした、苦しくも笑顔が枯れることがない毎日を刻まれている。

しかし、それでもケイトには晴れることが無い、自分の過去の記憶が胸の中にある。

「私の…両親…」

教会の皆には言えなかった疑惑を、沈みかける夕暮れに向かって、呟いた。

「どこにいろの…？」

夕日が沈むまで、一滴の涙を流して瞳で見つめ続けた。

徐々に空が暗くなり、その場に立ち続けたケイトの腹から思わず気が抜けそうな音を鳴らしてしまった。

「おっと、いけね。これ以上遅くなるとあいつらが腹をすかしてうるさくなる。早く帰らなきゃ。後バガラリーを気になるし！」

急いで箱を持ち直し、教会に向かって走り出そうとする。

だが――

「うわ?!」

突然、地が揺れる衝撃が、ケイトを襲った。

ケイトだけでなく、他の人々、建物もそれに襲われた。

箱から食料が落ちそうになりつつも、全身を動かしてまで落とさずに何とか揺れが納まるまで維持した。

「一体何があつた!？」

「知るか！」

「地震にしては短すぎる気もするが…？」

人々が疑問と困惑を駆けながら

「おい、防壁かららしいぞ！」

一人の若者が走りながらケイトを含むその場全員に伝えた。

若者がようやくその場に到着して息を切らせる。

「防壁つて、何でそこから何だ？」

「見れば、分かるよ！つかいちいち聞くな！余計疲れる！！」

「防壁…！？」

突然、悪感がケイトの全身が一瞬走る。何かの予感か？それを思いながら近くの建物の屋根に飛び乗り、防壁を見渡した。

距離は400メートル位にある半径2キロの外部居住区全域を取り囲むように覆われた防壁から、煙が上がっている。それも複数に同じように煙が上がっている。

ケイトには、これが何を意味するのか、判断がつかない。彼女が4年間暮らしてきたこの居住区に、このような現象は初めてだった。判断に戸惑ったが、現状の把握に防壁に近づこうとした。

その時にケイトの耳から入ってきたのは、警報。

全域を鳴らす音響が居住区を行き渡らせていた。

「全市民は直ちに地下シェルターに避難にせよ！繰り返す、全市民は…」

「非難？」

その時、次にケイトの耳から聞こえたのは、悲鳴。

何かから恐怖で我を忘れ、逃げ纏っている人々の声が。中には、何か鈍い音が悲鳴と共に紛れ込んでくる。

悲鳴の先に視線を向けると、大勢の人々が恐怖に満ちた顔をしながら走ってくる。

「おい、一体どうしたんだ！？」

ケイトの疑問を聞き入れることなく、人々は走りすぎていく。強引に一人の男性に背中を掴み、

「こ、殺さないでくれえ——ッ」

「落ち着け！私は人間だ！一体何があつた！？」

「ヤ…奴らが…」

男の全身がガタガタに振るえながらも、指を刺した方向を見つめる。人々が逃げ纏う背後に、防壁の煙からその姿を現した。

直後に、ケイトの全身に悪感が駆け巡り、硬直してしまう。

顔から大量の汗を流し、呼吸が荒く安定しない。そして男がケイトの手から離れ、人黙参に逃げ出す。

この時、ケイトにとって人生初めて、それを出会った。

それは一生忘れることがない、人類の敵。

そして、この先彼らに関することになる、

「アラガミ」と。

D a s n ? c h s t e M a l 「荒神」

第7章 人間の自由と記憶（後書き）

いよいよ第1部もクライマックスに入った所です。
長かった…。

多分次回は今月の終わり頃には出る、かもしれないです。

第8章 荒神と神機使い（前書き）

突如外部居住区を襲撃してきた、アラガミの群。それを迎え撃つドイツ支部の神機使い。その中、ケイトは初めて彼らの現実を目にする――。

第8章 荒神と神機使い

数分前―ドイツ支部

「あゝあ、今日も振られたよ、くそ。」

ゲートからサムがドラケタ態度で入ってきた。

部屋には金網で出来た一本通路に、左右には銃、剣型の神機が複数並べられ、機械音が響き渡る部屋だ。

神機の整備場。その名の通り、神機の修理、整備や調整を行う場所でもある。フェンリルの施設の中で地下深くに設置されており、毎日ここに没頭している技術者達が神機使いの命綱の整備を行っている。

中でも、各支部の整備場とは違い、ある人物がここで働いてるのが有名でもある。他の技術者とは養子も同じだが、サムの神機を何もトラブルが無いようにスラスラと神速にこなしている、一人の男性に近づいた。

「おい、おっさん。」

「……」

声を掛けるが、目の前の神機の整備に目に入れておらず反応しない。

「…はあ…。おっさん、新人に可愛い女の子が入るってさ。」

「なぬ、ホンマかい！？……ほえ？」

どす黒いゴーグルを掛けたままサムに振り向くと、ようやくサムがいる事に気づいた。

「お、アンタかいな。」

「たく…そんな汚い変なゴーグルを俺に向けんな。」

「汚いとは、失礼なやつぢやなあ。出来立て新品のこれのどこが汚いんや？」

「もろ全部。」

サムに否定されるも、しぶしぶしながらゴーグルを外した。

大きく丸い目とちよび髭が先に目が付きやすい顔が目立っている
「たく、まあ…。よお、ベラルのおっさん。どうよ、相棒の様子は？」

近くの手すりに久を置き、ベラルが弄っていたサムの神機に親指で指すと、呆れているのか、ベラルが首を振っては笑みを浮かべてサムの神機を見つめた。

「全部良好や。しかし、この4年間メンテナンスをサボつとしてはよく持つとるわなあ。」

「へ…言つたる？俺の相棒は飯だけ食ってりゃあ一生生きていけるつてな。」

「それを言つなら、「ワイの最高傑作だから」、やる？」
「るせ。」

ベラルが当たり前のように突っ込みを入れ、サムは聞き飽きた突込みを流す。

「んで、おっさん。たまにはよ、故郷のイタリアにでも帰つたらどうよ？」

「アホ言え。ワイが作ったお前さん達の神機のパーツをほとんどここが占めている以上、誰がソイツの整備をしなきゃならんのか？他には出来んと思うでえ。」

「へいへい…んだかよ、アレ、どうすんだよ？」

「ん？…、ああ。しかしな、未だに見つからんのは、アンタも知つとるやろ？それまでワイはここで暇つぶしに現場復帰しとるだけや。」

呆れたかのように手を上げ、頭を横に振る。

「ま、だったらとっとイタリアに帰れつての。腐れ縁の弟さんとその息子もいい加減恋しいんじゃないのか？」

「う…むう。ま、それはそれでな…」

その会話を遮ったかのように、突然警報の音が辺りを鳴り響いた。
「緊急事態！アラガミ防壁から、多数のアラガミが外部居住区を侵入！…突破箇所、20以上！速やかに全部隊は住民の非難を優先

にアラガミを排除せよ！繰り返す…」

「防壁か…4年振りだな。しかも俺らも出るのかよ？」

「突破数が20以上や。お前等さん達が呼び出しを喰らわれるのは当然やな。それより、」

「わ…ったよ。ま、いい儲けになりそうだからな…。」

コートのポケットから携帯端末を取り出し、電話を掛ける。

「お…す、俺。お前ら、今から全員…お仕事タイムだ。遅れんなよ。」

「

事態を冷静に端末に話掛け、終わるとすぐにコートに戻した。そして反射的にベラルは避け、サムが乱暴にベラルを殴る勢いで手を振るかと思いきや、整備台に設置されてるサムの神機を強引に掴み取りそのまま肩に担いでゲートに向かって走った。

「サム！何度も言うがワイの作った神機や、慎重に優しくに大切に扱えや！！」

「るせえ！」

そう突っ込みながらもエレベーターから多数の神機使いが出てくると同時に乗り込んで戦場に向かった。

「はあ…はあ…」

全身に水分が無くなりかけると、走っていた。

目の前には普段の居住区が一変地獄に変わり果てた。

恐怖に我を忘れてただ本能的に逃げ纏う人々。

居住区のどこにも人々の数え切れない無数の悲鳴。

迷路のように粗末に作られた建物が次々と何かに壊されていく光景。

その光景を目に映っては通り過ぎて、まるでアニメーションのよ

うにコマ流れて繰り返して映っていく。

途中人目がつかない住居の境目に入り込んで息を整えなおした。壁に手をかけるが、汗がビッシヨリと濡れて手が滑り、体制を崩して力無く座り込んでしまう。

気がつけば、全身が汗に濡れてその服の冷たさで体が震えていた。「あれは…あれは…あれは…！」

口が震えて小声で回らない。悪寒から逃れて体を蹲って温めるように丸くなる。それでも震えは一向に治まる気配がない。

「あれが……アレが……！？」

その時、背後の建物が閃光に覆われた。目を閉じて目暗ましは免れたが、その直後に建物の上半分が滑るように落ちてきた。

震える体に鞭を叩きその場を離れた。その建物が隣の建物にぶつかり、壊れた模型の様に崩れていった。

あと少し遅かったら、この被害の藻屑になっていた所だった。ここを離れてまた走ろうとした。が…

その足は、直前に踏み止まった。また体がドツと震えだす。

「あ…あああ……」

目の前にケイトが襲い掛かった感覚は、恐怖という本能。状況としては、蛇に睨まれた蛙。

ケイトを睨んでいる蛇は、上空に一つだけ。それも、翼はあるが微動に動かしていないのに空中に浮遊する、巨大な物体が。

> i 2 9 2 8 9 — 3 0 8 6 <

その物体の背後から、流星のように次々と現れては急速に降下して通りすがって近くに逃げている人々を喰らっていた。

流星の物体は人目で判断するなら、それは奇妙で禍々しい。

白い体の女性と目玉が付いた黒い大きな卵のうが一つになり、羽根もないのに空中を自由自在に浮遊し、女性と卵のうが上下半分に割れた大顎が捕えた人間を喰らっていく、「ザイゴート」の群れが。巨体の物体は、ザイゴートとは似た容姿をしているが、違いがあると述べるならば、美しい。

満月の輝きが似合っているのは、その生物が外見的に女神に見えるからか。しかし、それは人間ではない。

上半身が細く、男性なら一目で気を引かせる魅力を持てる女性の体をしているが、頭が頭部を超える冠に、額に一つの大きな目玉がギョロつと見つめている。腕は膝から羽根に覆われ、手が扇になっている。何より下半身があり得ない。大型の甲冑の鎧みたいに纏い、その甲冑に羽衣のようなスカートが纏っている。「サリエル」。

気がつけばケイトの周りはアラガミに囲まれていた。そう、ここにいる獲物は、一つだけ。

そのアラガミに額の巨大な目玉がケイトを睨みつけ、動かなくなった獲物にスカートの部位が翼のように大きく広げ、ゆっくりと地面に着地した。そのサリエルの微笑ましい顔に創造が出来ないほど大きく口を開き、ケイトの命を喰らおうと牙を向けられた――

（し…死ぬ…！）

そう語った、終わりだと。だがこの瞬間、突然耳から爆発音が鳴り響いた。

と同時に、喰らおうとしたサリエルがケイトを避けた。いや、サリエルの行動の起動がずれた。現にサリエルの背中に煙がもくもくとたっている。

サリエルが倒れている隙にケイトは近くの瓦礫にさつと身を隠し、様子を伺った。

「コウ隊長！今です…！」

「よし、各員、避難者を優先にこの場のアラガミを一匹残らず叩け…！」

掛け声と共に、崩れた瓦礫の上に、神機を持った三人の人影が飛び出してサリエルに向かって駆けていく。

だがサリエルを守るようにザイゴートの群れが三人に急速なスピードで三人に牙を向き襲ってくる。

「予測済みだ…！まずはお前達からだ…！」

右手にタトウーを彫り刻んだ赤毛の男性がマシンガン系の武装をし

た神機「64型 機関砲」で空中に浮いているザイゴードを次々と撃ち落す。

「隙だらけよ、目玉女!!」

群れの中央に目かけて高く飛びあがる、キツチリと締まったスーツを着た女性がそのまま急降下に死神の釜の容姿した、刃に毒が塗られた「トックスピック」でザイゴードの頭上を貫き、真紅の鮮血と紫に染まった毒が混ざり合った噴水がザイゴードの頭上から噴出した。

しかし女の周りにザイゴードの大群が囲まれ、その女を喰らおうと卵のうから女体が上半分に別れ、人を呑みこれる程のサイズの大口が開いた。

だが、ザイゴードが次々と背中が裂かれて血しぶきを上げながら地に落ちていく。

「一人も仲間を…」

若者が一人、海のように蒼い日本刀、しかしサイズはそれを凌駕している「大氷刀」でザイゴードの群れを次々と切り裂いていく。

「…殺らせはしない!!」

ケイトの髪色と似た金色に近い茶髪と蒼い瞳は、ドイツ人に見えるが、どこか日本人と似た雰囲気を感じ、何より今青年がザイゴードに囲まれた仲間を助ける為に怒涛の奮起で戦っている。

しかし今度はザイゴードが青年に狙いを変えて顎から空気の塊を投げ飛ばした。直前まで迫った空気方に青年はステップでかわすが、待ち伏せていたもう一体のザイゴードが牙を向けて喰らってきたが、ライダースーツを着た女性がそれを神機で切り裂いてカット。

「コウつたら、私のことよりあなたの身の事を心配したら?」

「気にしなくても良いよ。それより避難者の救出に行くよ!」

二人の軽い会話の後、3体のザイゴードが二人に突進を仕掛けてくるが、二手に分かれてこれをかわし、女性は突進したザイゴードの陽動、青年はケイトに向かって走り出した。途中阻むように他のザイゴードが襲うが、赤毛の男が援護にザイゴードを撃ち落す。

「私のこともお忘れなく。」

「ナイスアシスト！」

赤毛の男に親指を立て、そのまま直行にケイトに向かう。

一方でそのザイゴードと3人の若者達が奮闘している光景を、ケイトはただ瓦礫の影から啞然と眺めていた。

あの三人はゴッドイーターであるのは、彼らの右腕に腕輪を付けてる時点で分かっていた。しかし目の前であの化け物と戦う勇姿が、初めて目にした。

「あれが…ゴッドイーター…」

しかし、彼らがザイゴードと紛争してる間に、銃撃で落ちていたサリエルが体制を直してゆっくりと浮遊し、別の方向に向かって飛んで行った。

そのサリエルに男が銃で追撃を続けるが、スイスイと身軽に避けながら逃げてしまった。

「逃げたか…しかし作戦範囲内だ。」

「…!!…あの方角は…」

「おい、君！大丈夫か!？」

青年がケイトに近づくが、青年の凛々しい顔が目の前に映ったとたん、ケイトの頬が紅潮して若者の手をつい払いのける。

「…?君、確か…」

「コウ隊長！こっちは片付けました!…で、うわ！隊長、そいつは関らない方がいいですよ！」

「え？ああ、噂に聞いていた娘か…」

やはりこれだ、と頭の中で思っているケイトは、コートの裏に閉まっていたナイフを念のために取り出そうとしていた。

「でも、ここに住んでいる以上、この被害に放っておく訳にはいかない。」

その言葉に、ケイトは反射的にナイフを取り出そうとした左手が静止していたのを感じた。

そして、わずかだがその神機使いを許した気がした。今までゴッド

イーターといったら、自分の価値を視聴して居住区民を甚振るかと思われたが、この青年のように、居住区民を思っている優しいのがいたから。

「まったく、コウったら子供と女の子には優しいんだから。」

女がコウの

「とりあえず、ここは危ない。すぐに指定先の避難所に行くんだ。」

「待ってくれ、あの化け物はどうするんだ？無事に倒してくれるのか！？」

「それなら大丈夫だ、僕の仲間達が大半のアラガミを近くの「E・エリア」を誘い込み、封鎖する。後は纏めて僕達が料理してやるから、安心して！」

「そうか…よか…！？」

安心を確信していたケイトに、一気に嫌な予感が走った。

（E・エリア…駄目だ！）

コウの心配してる顔に目を暮れず、ただケイト三人を離れて走り出した。

「ふう、これで一安心だな…。」

「まったく、これであの娘も少しは反省して欲しいんだけどね…。」

二人の男は安心しきった表情を浮かべる。

だが、コウはその安心感を得てはいない。むしろケイトが走った方角は…

「いや、追うぞ！彼女が危ない！！」

コウが駆け出す。二人も慌てて走って追っていった。

腰にかけてる携帯端末を手に取り出し、すぐにかけた。

「こちら第2部隊長、神崎 コウ！サム、他のメンバーでもいい！

E・エリアに急行してくれ！まだそこに…人が残ってるらしいんだ！早く！！」

「この雑魚どもが!!」

スキンヘッドがノコギリの様に無数の刃を持つ大剣「ノコギリ改」でオウガテイルを喰い切る。

一体倒したかと思いきや背後に続々とオウガテイルの群れが並んでいる。数は10以上。

スキンヘッドの余裕こいた笑みが口に表れている。

「雑魚は黙って、俺様にひれ伏せば良いんだよ!!」

相手が雑魚と多寡をくくって中指を立てて豪快に口が避けそうな顔で大笑いする。しかし、スキンヘッドの不意をかけるように上空からザイゴードが急降下で大きな口を開けて喰らおうとした。自分の大声のせいで、その場で笑い続けるスキンヘッドに頭上に迫るザイゴードに気づきもしないが、

「図に乗りすぎだ、スキン!!」

笑い声を止めてしまう甲高い掛け声と共にザイゴードが爆発に飲まれて衝撃で軌道がずれてオウガテイルの前に落ちる。そのザイゴードを通り過ぎるように踏みつけながら、オウガテイルはスキンヘッド目かけて掛けていく。

スキンヘッドも神機を構えなおすが、頭上から一つの弾が重力に引かれて落ち、目の前でオウガテイルを飲み込む程の爆発が起きた。「ひい!! な、何すんだ、」

同時にスキンヘッドが爆発の勢いに腰を落としてしまい、その場へあたり込んで後ろの彼に文句を言いつけた。

「まったく、低ランクのアラガミでも油断は禁物だと、何度いったら分かるんだ?」

中国のロケットに似た仏砲の神機「白虎」を浮遊しているザイゴードの群れを落しながらスキンヘッドに警戒の言葉を言うゲイツ。スキンが先程の余裕の笑みはどこにいったのか、ゲイツの神機に警戒しながら目の前に迫ってきたオウガテイルを神機で乱暴に叩き切

る。

「うるせえ！！んな物騒な物を俺の真上に撃つんじゃねえって何度言ったら分かるんだ！？！当たったらこの俺さまがどうなると思っ
てやってんのかよ！？ええ！！」

「まったく…」

頭を抱えながらも言うとおりにスキンに迫ろうとするザイゴードに照準を合わせ、撃ち落とす。

その時ゲイツの腰に掛けていた端末機が振るえた。

「何だ、こんな時に！？」

とつさに端末機を取り出そうとすると、何かがゲイツの体にぶつかり、懐に入れていた端末機を落としてしまった。

アラガミにやられたのかと思ったが、やけに衝動が軽すぎるし、傷も無い。しかしゲイツの耳にアラガミの泣き声に紛れて走り去る音が僅かながら聞き取った。その方向に向くと、コートを着た少女が走っていく姿を捉えた。

「あ！あのガキだ！ゲイツ、何かやられたか！？」

「ああ、何も取られてはいないが…しかしどうしたというんだ？」

止めにいこうかと考えたが、アラガミが二人を阻んだ。結局二人は先に近くのアラガミ討伐に専念することにした。

その一方でケイトは慌しい顔をしながら、胸の苦しさに耐えながら願っていた。

「頼む…間に合ってくれ…！！」

全力で困難の渦に飲まれた居住区に、一人、大切な家族の思いに、全力で走りきる。

D a s n ? c h s t e M a i 「命を懸けてまで守る価値」

第8章 荒神と神機使い（後書き）

押絵はちょっとPCソフトがいまいち使えないので、近い内に入
れておきますのでそこは期待して下さい。

後現在「原作者になろう!」に向けて、ボチボチとオリジナル作
品を製作中です。

第9章 命を掛けてまで守るもの（前書き）

神崎コウ率いるゴッドイーターの手から逃れたサリエルが向かったのは、ケイトの唯一の宝である家族が居る、教会。ケイトはそこに残されている家族を助ける為に、迷いながらも走り続ける――。

第9章 命を掛けてまで守るもの

多数の人々が逃げ纏い、アラガミと神機使いの激戦が繰り返される居住区を目の当たりに映りながらケイトは全力でそれらを通り抜けて走り、ようやくE・エリアの付近に足を入れ込んだ。

ここで足に手を置き、新鮮な酸素を補充し直す。

荒々しげに息を掛けながら、近くの住宅に目を入れて今心配していることを頭に思う。

「皆…逃げたのかな…。」

そう思った。いや、当然かと思っていた。現にさっきの警報も、予め居住区民に非難に関する情報を伝えており、ケイトも子供達にびっしりと教え込んだ経歴があるから、わざわざ行く必要が無い。

しかし、それでも胸騒ぎは静まらない。不安が消えてない。そうでなければ、今となっては他のエリアから閉じ来められたアラガミが潜んでいるこの危険区に足を入れる必要はない。

E・エリアにアラガミの咆哮が風と共に耳から流れてきた。場の緊迫感が高まったのが、体中に伝わった。既にこのエリアは、神機使い達が他のエリアのアラガミをE・エリアに誘い込んだ為、かなりの大量のアラガミが、ここを這い回っているかもしれない。

つまりは、獣の檻に侵入した一匹のネズミ。

わずかに手が震えてる。さつき目の前まで迫ってきたサリエルの恐ろしさがまだ身体に残っていた。もし協会に向かう途中でまたアラガミに襲われたら…

だが、

「…行かなきゃ…！」

と、アラガミを警戒しながら、コート裏に隠してあったハンドガンを手に持ち、教会に向かって走り出した。

同時期、ドイツ支部外部居住区「Jエリア

突如一体のザイゴートが人影に向かって急速に向かっている。

そのままザイゴートは人影を丸ごと捕食せんと卵のうと女体の身体から大顎の口を開け、食らおうとした。

が、その人影は肩に担いでる神機を後ろにまで構えた。そして、

「あらよつとー！」

寸前まで迫ってきたザイゴート目かけて、神機を槍の様に投げつけそのまま口ごと串刺しに。途端、予め直前にサムの指示で神機が補色形態になり、そのままザイゴートの身体を噛み付いた。

激痛に襲われたザイゴートはそのまま地面に落下した。ズン、と地面が揺れる程神機の重量がザイゴートの動きを封じ込めた後、身

動きが出来ないままザイゴートは、ただ神機にすぎ放題に捕食され、やがて動かなくなった。

ザイゴートの体を食いつく神機をサムが片手で軽々と引っ込めくと、ザイゴートの体が黒い塵となって消えていった。

「おゝおゝ。結構儲かったんじゃない？これって。」

神機を見つめながら僅かの微笑みを写すサム。

最近アラガミの能力の上昇、進化が4年前より遥かに進んではいるもの、その被害、目撃数がかなり減ったせいかなフェンリルの「アーコロジ」と呼ばれるシステムにとっては欠かせられないコアの摘出量も減っていた。

そして恐らくこの現象のせいでフェンリルの本部も食料の確保の為に有り余ったドイツ支部のコアや配給品を回されたのかもしれないと頭の中でつい浮かびだした仮説だが、考えるのが面倒になりそれを流した。

それより仲間の方はどうなってるのかと確認に端末機を取り出したが、その丁度に端末機が震えだした。

「おゝす、こちらサム。何か用？」

『サム、僕だ！神崎！』

端末から聞こえたのは、神崎コウという青年からだ。

「ああ？コウちゃんかよ。珍しいというか、この俺に掛けるなぞ、

百年も早えぜ？そんな度胸…」

『サム！今どこにいるんだ！？』

やけに焦っているらしい。何かあったのか？と、とりあえずサムはコウの話を乗り、その質問を答えた。

「どこって、…俺が知るかよ。普段お前らが担当してるから、そんなに詳しくねえし。だが多分ここ、E・エリアにちょっと近いかも？目玉のオカマを追っかけた時『E・エリア』で看板が立っていたの見た気がするが。」

『じゃあ、E・エリアの近くか！？』

「で、何だ？テキトーに忘れてそこに取りに来てって感じで指図するのか？」

『そうじゃない！サム、大変なんだ！あの娘が…』

数分後…

路上に何気に設置されてるマンホールの蓋がゴトゴトと揺れ、そこに周りを確認すると、マンホールの蓋を銃声と共に上に吹っ飛び地面に転がって行った。そのマンホールの穴から手がぬつと出ると、その人影が地上に出た。

「ひえ〜、喰われるかと思った〜。」

つい口を出してしまうケイト。

経路としては急いで教会に向かう途中、案の定オウガティルやザイゴートの大群に見つかって追われたが、マンホールに逃げたおかげでやり過ごし、そこからようやく教会の前まで進んできたのだ。

そのせいで排水道の中で教会まで進んだのは良いが、おかげで体中鼻が折れそうな悪臭が漂い、服もかなり汚れていた。

「うゝゝ…辛い。きつと居住民達もこの悪臭を耐えながら生きてきたことに私は尊敬しようかと思ってきたよ…。褒め言葉として。」

全然悪口にも聞こえなくも無いことを悪臭に耐えながら口にだしてしまうが、今の現状を確認すべくその事はさらっと流したが。

「たく、…アイツらがここまで気づかないのは運が良いのか…」

そう愚痴を言いつつも、すぐに教会に走り出そうとした。が…

「?…ああ!」

目の前の光景に驚きを隠せなかった。そう、自分の唯一の思い出が、家が、神父の教会が燃え盛っている。

しかもその燃えている協会の上に、黒い夜空に隠れた物体は、先程逃げていた「サリエル」の姿が、炎に照らされて映し出されていた。恐らく教会を焼き払ったのはあのサリエルだと確信した。

しかし疑問に思う。恐らくこの教会を焼き払ったのはあのサリエルだが、何故この場を離れようとせず、この場に残っているしない

のか。

だが答えはすぐに出た。それは、サリエルの前に「ごちそう」が、目の前に落ちていたから。そのごちそうとは…

「ま、まさか!」

そう核心すると、ケイトは炎に燃え上がった教会に向け、走り出した。

パチパチと、豪炎に焼かれた音が響く。

燃え上がった教会の周りは、既に炎に囲まれておりどこにも逃げ場はない。

その中に残ってるのは、炎に当たることがない上空に浮遊するサリエルだけ。

今サリエルは、焼き払った教会から飛び出たごちそうを探し、音も無く浮遊している。

そのサリエルに気づかれ無い様、門限の前まで駆けつけたケイトがサリエルの視界を遮れる柱に隠れて様子を伺った。サリエルに警戒しながら教会の周りを探り出す。

ガタ、

と、庭の近くに設置している物置が揺れた音が聞こえた。サリエ

ルは気づいてない。ケイトは物置の方に向けると、わずかだが扉の隙間から人の手が見えた。それも、ケイトより小さい。

（あいつら、まだここにいたのか！何で！？）

それ以外の答えなどない。この状況の中間違いなくサリエルは、まだ教会に残ってる子供達を捜しているのだ。

助けに行かなくては！

しかし身体が止まった。もしここで前に出たら、どうなる？結果的にサリエルがケイトを発見し、また襲われるのは確か。しかも、今度は神機使いもいない。待っているのは、「死」だけ。

だがこのまま黙って見過ごせば子供達は見つかり、サリエルに食われてしまう。それはケイトにとって、家族が失うのはあまりにもつらすぎる。

ならば、と思うとまた自分の危険が振り返ってくる。

どっちを取るか。自らを犠牲してまで助けるか、見過ごしいないことにして逃げるか。どちらにせよ、必ず命は亡くなるのは確か。

なら、判決は…

「ねえ、狭いよ…。」

「もう外に出たいよ…。」

物置の中で子供達が密着して寄せ合っている。

「ちょっと待ってる。」

この中で年長の風浪をし、帽子を被った少年が物置の扉の裂け目から目を向けた。教会は未だに燃え上がっているが、上空にはサリエルが何かを探し回っているように浮遊していた。

「どう?。」

「駄目だ、あの化け物が居なくなるまではしばらくここにいた方が良い。」

「そんな…!。」

「まだここにいなきゃならないの!?。」

「仕方ないだろ!俺だって、あんなことになるとは、思っていなかった…。」

少年が悔しそうに呟いた。

あの時、ケイトの言うとおり非難しておけば…

あの時、無理でも神父を助けていたら…

あの時、無理でも自分から皆を指示していれば…

少年の後悔した思いが次々と浮かんでは泡のように消えていった。いくら後悔しても、現実はその戻してくれ
る訳がない。

「ねえ、」

まだ10にも満たないボロボロのワイヤースポンを着た少年が、服の裾を掴んだ。

「何で皆ここにいるの？」

それはこの場に留まる理由が分かってない者が言う発言だ。しかし相手は自分達より一番年が低い子供。分からなくないのは仕方ない。

「それは…今危ないからだ。安全じゃないから、皆ここに隠れているんだ。」

「うそだー。」

「!？」

「だってテレビで言ってたよ。（僕達を襲ってくる化け物は、神機使いが退治してくれるから絶対安全。）て言ってたよ。」

直後、この場の空気が硬直したのを肌で感じた。

「なのに皆、何でここに隠れてあの化け物から逃げてるの？ヒーローが助けてくれるから、安心して家にいれば良いのに。」

まだ、この子供は現実を理解しきれてない。

と同時に、帽子の少年以外の子供達が硬直し、息も聞こえず静まった。しかし目がわずかに泳ぎ、身体が震えだした。この不穏な空気は、ただ少年に不吉な予感を齎している。

これ以上、この子供が不満を言わせない様に口を伏せ、場を和ませようと笑顔を作り静かに口を開こうとした。が、

「…そうだよ…その通りだよ…」

少年はえ？と思わず口を漏らした。

「いつまでもこんな所で隠れていたんじゃ、結局見つかって死んじゃうでしょ！？だったら外に行って助けを求めようよ！！」

今度は頭を抱えていた少女が叫びだす程の悲痛で少年の胸倉を掴んだ。

「僕も…いつまでもここにいたくはない！こんな暗くて狭い所で、ただ待つてるんなんで、嫌だ！」

「俺も我慢できない！おい、ここから出せよ！」

巨体の少年が扉をこじ開けようとするが、それは帽子の少年が身体をはって止めた。周りに子供達が一斉に押し

込みだした。

人間は、常に集団で意識し生きている生き物。だが絶望的な恐怖、また予想外な災害、出来事に見舞われたら、

気づかぬうちに「死にたくない」と生存本能が無意識に働き、それが簡単に冷静を保てず、ただ目の前の現実から

逃げ出そうと必死に、逃げる。それほど人間とは、脆く、落ちやすい。特にまだ成長途中の子供はまだ知識、経験が不足で場の判断ができず、ただ場の雰囲気や大勢の人間達に流されて自分を失ってしまうことが多い。

現に今、ここから出て逃げようとする子供が、正にその状況。例え幼い子供、たったの一言が彼らの逃走感が刺激してしまい流された。

だが全員がそうではない。その帽子の少年は扉を背に全員で押し開ける子供を押さえ込んでいる。限界が近いのか、少年は後ろの扉に力強く拳でたたき殴った。その時中に鈍い音が響き渡りさつきまで押し開けようとした子供が静まり、冷静を取り戻した。

「落ち着けよ！今を見ろよ！！俺達がここを出たら、あの化け物に教われて死ぬんだぞ！良いか、ここは俺に……」

少年が歯止めを掛けようとした時、遮る、いや、それが止まった。後ろに立っているドアが強い振動を受け、子供達は一気に倒れこんだ。

と、衝撃で凹んだコンクリートのドアがメキメキと罅を立てながら崩れ、外の世界に向けたしになる。

そして外の世界を見つめた子供達は、どつと身体から恐怖が襲い、全員その場に腰を引いてしまった。

目の前には、反転して空中で獲物を大きな目玉で睨み付ける一匹のザイゴートが空中に浮かんでいる。その背後に同じく獲物を捉えたサリエルの姿もあった。

さつき我に忘れた子供達が物置を揺らしたせい、視力の高いサリエル達に見つかってしまったハメになった。

獲物を逃がさないように子供達の周りをゆつくりと浮遊し見張るザイゴート。一方サリエルの目玉が閃光の様に光を一点に集中し始めていた。

子供達は逃げたそうとは……しなかった。いや、諦めていた。

ただ互いに身を寄せ合って恐怖を逃れようとするしかできない。

突然のアラガミ襲撃に協会が燃やされ、唯一の親であった神父とケイトの安否が分からないまま、二体の恐ろしい怪物に絶対絶命の境遇に追い込まれ、もう助からないといっしか心から思い込んだ。

そして、サリエルの光の集中を待たずに、見張っていたザイゴートがタカを切って大顎を開け始めた。

そして、

「僕達…死ぬんだ…!!」

獲物に近づき、

「くそお…!」

「捕食」を行おうとした。が、

突然爆音が目の前のザイゴートの背後に響いた。

と、一人の子供の前で食らおうとした顎が寸前に止まっていた。と、視線は子供から逸らし後ろに向けた。

少年がザイゴートの後ろを恐る恐ると、視線をゆっくり向けると…

教会の外れに建てられた小屋の扉から煙が黙々と漂っていた。しかもそこは、ケイトが住んでいる小屋。

まさかと思い、目を凝らして見つめた。

そして、

「ケーネエ…!」

そこに、予想していた人物の名を呼ぶ。きっと助けしてくれると思った「家族」を。

Das n?chste Mal 「命を食らう者」

第9章 命を掛けてまで守るもの（後書き）

ここで大したことないネタバレ？。ボチボチと喋っていきます。

ケイトはシリーズ（主に小説、次にゲーム。）の中で存在しなかった女主人公です。

別に、マニア的な意味で作ったわけでは無いですから。

小説の神薙ユウ（後、加賀美リョウ）とか男主人公は確定ですが、こっちは存在しない女主人公をメインに活躍させたい！とイメージして生まれたのが、ケイト・ローデンバーグ。個人的に気に入ってます。

いつかユウ達とコラボでやってみようかな？

第10章 命を喰らう者（前書き）

我が身を囷にアラガミを引き寄せ、子供達を無事逃がしたケイト。
しかしここで絶体絶命の危機と、最強の男がここに出会う――。

第10章 命を喰らう者

「たく…ここで暢気にお留守番してる場合か！」

「ケーネエー!!」

「…て、えええええッ!？」

「何それ!？」

感動の再開とは裏に子供達は思わずケイトの姿に驚いた。何故なら、普段お目に掛かれない物をケイトは身に着けているからだ。

一言で言えば、全身銃火器武装兵。

腰にショットガンとグレネードを腰ベルトに2〜3個収納、マシンガンを背中に背負いながら肩にさつきザイゴートに打ち込んだバズーカ砲を抱えていた。

果たしてどこからその銃火器を隠していたのかと疑惑に思うが、今はそれどころではない。

空中に浮遊しているサリエルとザイゴードはケイトに視線を向いたまま、目玉をギョロつと睨んでいる。ケイトはわずかに後ろに一步退きサリエル達にバズーカの照準を合わせる。

「よし…来い…。」

「ケーネエ、神父さんが…」

と、一人の子供の声に二体のアラガミは反応し、ケイトを無視し再び獲物の子供達の方に視野を向け、ゆっくりと近づいてくる。

「お前達が入り口前に開けてあるマンホールまで逃げて、そこから非難しろ。この化け物はそこまでは追ってこない。」

「でも、ケーネエ……」

「いいから、早く……!」

今度はサリエルにバズーカ砲の引き金を下ろしサリエルに砲弾が直撃。しかし爆発は起こらず、むしろ打ち込まれた弾は吸い取られるかのようにサリエルの身体に蝕まれ、後には弾の形さえ無くなった。それどころが外見に傷を負わせてはいない。

「駄目か……でも……!」

それでもバズーカを休まずアラガミに撃ち続けた。が、アラガミは無駄あがきと承知の上か何も反応しない。次々放った弾はアラガミの身体に捕食されていく。

もう子供とアラガミが目と鼻の先まで距離が縮まり、ザイゴードは子供達を取り囲むように円を描き飛び、サリエルは空中で見下ろしていた。

「とつとと気づけよ!この女もどきの、化け物があ……!」

ケイトの叫びと共にサリエルのバズーカを放った。もう無駄、と誰もか悟った。が、

サリエルの左半身に直撃したとたん、それは暴発した。

同時に二体のアラガミはケイトの方に向きを変えると、サリエルの目玉から一線のレーザーが放たれ、サリエルはケイトに体当たりでケイトの方に向かう。

「よし、来い！化け物共！！」

抱えていたバズーカを目の前に投げ捨て、そのバズーカはレーザーに焼失されザイゴードに捕食された。すかさず腰に装備したショットガンを取り出して構え、二体のアラガミに狙いを定めて発砲しながら後ろに退いて、教会の外に飛び出した。

「ケーネエ、まさか…！」

逃げるケイトを二体のアラガミは獲物の子供達に視線も向けずに追いかける。

「お前ら、早くここから逃げろよ！それから…」

途中ザイゴードが顎を開けて突進からかわし、もう留まるのは危険だと察しケイトはアラガミを引き寄せるべく、走り出した。

「…絶対無事に帰ってくるから、心配するな！！必ず…」

アラガミの猛攻を振り切りながらも、もう言い切った後は、教会との距離が遠のいていった。肝心なセリフも聞こえるかは分からない。だがこれで子供達は助かった。神父は心配だが、きっと彼なら…

引き付けたアラガミを出来るだけ、教会から離し更には上空に向けショットガンを放つ。その銃撃音の響きにアラガミが集まりだしてくる。

自殺行為とも言える行動だが、ケイトの目はむしろ絶望でなく、屈しない強い輝きを放っている。たった一つの家族の為に…戦っている。

「…生きて再会する!!」

「…と、言ったものの…」

後ろに追いかけていくアラガミに向けショットガンの引き金を引くが、何の反応もしない。完全に弾切れたのが分かると、すぐさまショットガンを捨てた。と、それをズウン、と一つの足が一瞬で踏みつけられ潰れた鉄屑と化した。

「これって…予想以上に不味い…よな!？」

ケイトが引きついたアラガミは、いつの間にか複数のザイゴート、新たにオウガティルが加えケイトを追っていた。

狭く、どこを見晴らしても延々と人気の無い乱雑した住宅地が続くE・エリアの中で、逃げるケイトとそれを追うアラガミとのチェイスが繰り返されていた。

そもそも最初からアラガミを封鎖しているE・エリアに逃げ込んだ時点では普通見つかって捕食されている程危険が高い。

その住宅路をただ走って逃げているだけでなく、時に背後からアラガミがニードルや空気の塊を投げつけケイトを狙うが、得意の身体能力で身軽に横に転んでかわしてはアラガミにマシンガンを撃ち続け、アラガミを引き寄せていた。

それを当たらず、ただ逃げ続けていくことしかできない。

決して、ただの人間ではアラガミには勝てない。旧世代の軍力でもかすり傷を負わせることができないのは既に知っている。

ケイトが持っている武器も、アラガミにとってはただの「おもちゃ」に過ぎない。

だが、

「でも・・・簡単に、喰われてたまるか!!」

弱音は吐かない。でなければ何のために自分を虜になって皆を助けたのか。

決して屈しない目で逃げながら後ろに迫ってきたアラガミにマシンガンで連射した。しかしこれもアラガミにダメージどころがかすり傷も負うことができない。

が、この武器を通用しない化け物にいつまでも相手していたら、こっちの身が危ない。

「そろそろここいらで退くべきか…げ！」

ケイトの前にオウガテイルの群れが住宅の角から目の前に現れ、ケイトに気づくと尻尾から鋭利なニードルを放った。

それを間一髪の所で近くの住居に入りこみ、ニードルをかわした。そのままニードルはケイトを追っていたオウガテイルの先頭に貫通し転倒。直後に後に続いたオウガテイルがそれに躓いて次々と転倒していった。

その様子を住居の中で観察しながら、マシンガンのカートリッジを装填し裏口から出ようとした時、

「！」

とつさにマシンガンを投げ捨て入り口から外に出た。直後に天井が崩れ、そこからザイゴートが崩れ落ちる瓦礫と共に落ちてきた。どうやら上空からケイトを食らうべく住宅の

天井から侵入しようとしていたものだ。

一方で外に出たケイトに、再びオウガテイル、ザイゴートを従えたサリエルが待ち構えていた。

「……ハハ…、これって、……バガラリーの様には……」

目の前のアラガミに啞然としながらも、懷に装備してある銃火器を取り出す。が、取り出したのは一丁のハンドガンとサバイバルナイフ。

残った武器は、手持ちに持つてある威嚇と防衛用のサバイバルナイフとハンドガン、少数のグレネードだけ。とてもでは無いが、頼りが無い。

間を待たずにアラガミ達は逃げるケイトを唸り声を上げながら襲い掛つてきた。

「・・・いかねえよなああああああッ！！！」

もちろん、再び全力疾走でケイトは逃げる。

「だが、そろそろ…潮時！」

息が荒く呼吸しながらもケイトは今の状況を把握する。そう、もう自らの囷という役目は終え、今度はこのEエリアの脱出を目論んだ。

その為には今追っているアラガミから切り抜けるのだが、中々切り離す所が、距離が縮まっていけばかり。生身の人間とアラガミの能力は天と地の差。そしてケイトはかなり体力を消耗している為、アラガミから逃げ切るのが難しくなってくる。

が、途中から住居の離れた所から、明かりが点っている所が見えてきた点で判断していた。

「もうすぐだ…！！」

もうすぐでEエリアを抜けれる…！後の手順なら、当然アラガミはまだ追ってくる。だが追い込めたアラガミがいるE・エリアには少なくとも見張りしている神機使いはいるはず。それをケイトはワ

ザと助けを求めて神機使い気づかせアラガミと相手をしてもらっ。後は神機使いとは関わらず非難場に逃げる、と予め策をたてていた。

だが、

「おばあさん、逃げて!!」

目の前にいたのは神機使いではなく二人の一般人だった。崩れていく建物の前に一人の金髪の少女が老婆を先に行かせたが、上に崩れていく建物に足が竦んでしまい、動けない。

「アネットオ!!」

「ちい!!」

このままでは、あの子が危ない!!しかし後ろはアラガミ。例えこのまま直行して助けたとしても、結果は見えている。

「こうなったら…あのハゲからがめたコイツで…!!」

とっさ、ケイトは全身を持っていた武器を脱ぎ捨て最後に腰の後ろについていたグレネードを取り出した。背後まで迫ってきたアラガミに向け走りながらグレネードの安全ピンを解除し、後ろに放り投げた。瞬間、グレネードから激しい閃光がアラガミの視界を奪い、その場でもかく。

唯一、正面に視線を向いていたケイトは閃光から視界を奪われることを免れた。どうやら目晦ましのグレネードらしい。頭の中でケイトの前でスキンヘッドに苦笑しながら感謝していた。

その際にケイトは全速力で駆け出し、震えて動けないアネットと名乗っていた少女をドン、と手で押し飛ばし崩れる瓦礫から救った。

「あ！」

が、

「マズ！」

代わりに崩れ落ちた瓦礫はケイトを容赦なく降りかかろうとした。ケイトも瓦礫から避けようと身体を飛び出すが、タイミングが一時襲いせいか瓦礫の一部がケイトの右足に当たり倒れてしまう。と、他の瓦礫がケイトの右足を埋め尽くされてしまった。

「ぐ……！しまった……」

しかも右足に血が流れ出す。最悪の状況だ。何とか瓦礫をどかそうとするも、右足の激痛が神経を襲うせいで思う存分力を出し切れない。最も全力でもたった一人では瓦礫をどかすのは困難。

苦しみながらも瓦礫をどかそうとするが重みのせいでビクともしない。それどころが痛感が徐々に増しさらにケイトに襲う。

と、

「待ってて、今助けるから！」

すると、アネットが瓦礫をどかし始めた。アネットは力いっぱい両手で瓦礫を持ち上げ上から捨てていく。

（コイツ・・・見た目によらず以外に馬鹿力だな・・・うん。）

不意にアネットの怪力の魅力に納得するが、その場合じゃないと首を横に振る。このペースじゃ、アラガミが・・・！

「時間が無い！私が自力で足を抜け出せる所まで来たら、お前は逃げる！！」

「でも・・・！」

とつさ、アネットが口に手を隠し言葉を失い、足がすくんでしまう。ケイトは恐れているアネットの視線の砲に向けると、そこに案の定最悪な展開になってしまった。

上空に、頭の巨大な目玉が怪しげに光りながらゆっくりと、美しくも恐ろしく近づいてくるサリエルが。

「また、あれかよ・・・」

その影がアネットとケイトを覆い尽くし、美しい唇からは肉も食いちぎる鋭利な牙を立てながら顎を開けていく。

それは獲物を食らう牙。

「ご・・・ごめんな・・・さい・・・」

アネットが身震いながら

（くそ・・・ここまで・・・か。）

目玉から光が集中すると、サリエルはそれをケイト達に向けレーザーを拡散させ放つ。

(…皆、神父……ゴメンな……。)

諦めかけたのか、いや、目を瞑った。次に見開く時は、目の前に写るのは、天国か、それとも――

しかし、何の感じもしない。痛みも。

――ひょっとして、もう天国、またもう一方に着いたのか？

だが目をおそろおそろと見開けばさつきと同じ場所。しかも、何気にさつきまで足がすくんでいたアネットもいる。何かこの世のものとは思えない光景を目の当たりにしたような形相で身体が硬直している。

と、耳に入ったのは、どこから女性の悲痛な叫び声か。

誰のだと目を向ければ、サリエルしかない。しかも、サリエルの右肩が噴水のごとく血があふれ出した。

アネットの前に、サリエルの右腕が転がっていた。

「これは……」

次の瞬間、まるで大地に重物が落ちた様に地響きが唸る。途端、周りの建物と落ちている物が崩れだす程、強力な地震。しかし、地震にしてはおかしい。

と、いつの間にか目の前に背中を向き斧と槍が付いたポールアックスに似た物を肩に担いだ巨人が立っていた。

「よお、子供なら俺の射程外だから安心しな。」

それが誰なのか、巨人の左手に付いてある赤い腕輪を見た時点で分かった。

ジンキ

「・・・神機使い・・・！」

D a s n ? c h s t e M a l 「美しく、恐ろしく」

第10章 命を喰らう者（後書き）

一つ皆さんにお聞きしたいことが、2点あります。

？文数が多いことに不満がある

？読者にとつて、神とは何か？

何気に聞いてみたんですが、出来ればご返答お待ちしております！

特に？を！！

第11章 美しく、恐ろしく（前書き）

今回は食について語る。

ゴッドイーター、それは神を喰らう者……。食とは生きるために他の命を喰らい生き延びる。日常では食品を購入し料理、食卓に並ばれて食べるのが当たり前だが、本来は獲物を探し狩りをし捕え、食べる。我々はそれを忘れ楽に他の生命を喰らって人間は生きる。

そして神を喰らい生き残る者は、本来の狩りを取り戻しながら神の命を喰らい生きていく。

命が生きている限り、我々は何を食べても生きていけるのだろうか……？

第11章 美しく、恐ろしく

「・・・ええい、邪魔よ!!」

「キリがない!」

「てやああああッ!!」

コウを先頭に戦場と化した居住区を駆け巡る3人の若者。既にE・エリアに潜入しコウはそこに向かったケイトと家族の救出に向かった。

予めコウは単身E・エリアに向かったケイトの救助に各神機使いに連絡を取り全員そこでアラガミの討伐、搜索に向かわせた。

現に走る途中にいくつか神機使いとアラガミの戦闘が行っていたのを、走りながらも視線で確認した。

だが途中で道にオウガテイル、空にザイゴードが彼らの行く先を憚れ、今苦戦をされている。

しかもいくら切り裂き、撃ち落としても、繰り返されるように次々とアラガミは彼らを阻んでいく。

「コウ、この状況を打破するには、あのサリエルを仕留めるべきよ!」

「ああ、奴がこいつらを仕切ってるのは確かだ。・・・だが援護が必要だ・・・。」

女性と男性の意見が一致しコウに告げる。コウもその意見にはわずかに首を傾けるが、今戦っているアラガミの中に、サリエルはいない。

サリエルを叩けば、少なくともアラガミは群れの統括が崩れ仕留めやすくなる。だがここにサリエルがいらないなら、いつまでもこうしてる訳にはいかない。とはいえこの状況を抜けるにはかなりの時間が掛かる。なら最善の方法は……。

「分かっている！でも今は……誰かがサリエルを討伐するのを期待するしかない！急いでこいつらを殲滅させ……」

「コウ、右！！」

女性がコウに悲鳴に近い声を上げ、コウは右に視線を向く。そこにザイゴードが急速に体当たりで突っ込んでいくが、ギリギリの手前でステップで回避。

だが罷だった。回避で体制を整う一瞬に、住宅地の屋上から二体のオウガテイルが不意にコウの頭上を狙い飛び掛った。

「しま……」

その時、コウの正面から2発の赤い弾丸が飛び掛ったオウガテイルに直撃、暴発した。おかげで起動がずれコウの頭上から背後に落ちた。

と、二人が相手をしていた複数のオウガテイルに黒……と黄金の影が二人の合間を通り過ぎると、それは阻むオウガテイルに次々

と斬りかかる。

他のザイゴードは弾丸に気づき、その弾丸の方角に急速に向かうとした。が、今度は複数の閃光のレーザーが、的確にザイゴードに命中、身体に焼きあけた穴を残し次々と落ちる。

「皆さん、大丈夫ですか!？」

「よ、英雄様の活躍に感激したか？コウ、ザマー。」

「貴様ら、まだ弱すぎる……。後お前黙れ。」

声をかけ、突然3人の若者がアラガミを攻撃しながらコウ達の前
に集まる。

「ゲエ~~~~……。」「

「……。援護、感謝する。」

「君達は……。!」

女性は嫌らしく、男性は敬意を払い礼儀をした。

それは、コウ達と同じ神機使だった。

時は同時刻。

今この場所に、二つの生命が対立していた。

一つは女という人を模し、蝶の羽を纏った紛い物の神、「サリエル」。

もう一つは、鍛え上げた筋肉を持つ人間だが、手に身の丈以上の斧を手に持った神を喰らう者、「サム・ヒンデンベルグ」。

互いにこの場に動かずに相手を警戒を続けるように視線が交差している。

その中、瓦礫に右足を埋もれたケイトとアネットはサムの登場に啞然と見つめていた。特にケイトは、今まで神機使いと出会ってはいたが、こんなはちきれない程の筋肉とウエストが細い逆3角形体格を持つサムには、正直神機使い以前に人間なのかと思わず凝視するほどのスケールだ。

（コイツ・・・人間か・・・！？）

「ゴッドイーター・・・よかった・・・助けに来てくれたんですね・・・」

アネットが助かったと安心したように身体の緊張感が揺らぐ。だが、

「あゝ、面倒くさ。」

途端、ケイトとアネットはえ？つと言った。そして、

「後さっきの訂正。今鰻登り絶好調の稼ぎ中だな……。ガキの助けなら、ガキ同士仲良く頑張つてこいつてんだよ。俺忙しいし。」

「「はあ!？」」

二人は突っ込んだ。特にケイトは、前助けた青年の神機使いとは違い、いきなり助けたと思いきやこんないい加減な発言をする人間は会ったことが無い。

それに鰻登りって何だ? 極東独自の言語か?

「助けるんじゃないのかよ!？」

「だ〜から〜、今忙しいっての。助かりたけりやお前らで何とかしろよ。」

ケイトは内心想う。このいい加減な態度と言い、ゴッドイーターか? と疑問に思いながら怒りを沸かせている。

と、警戒するサリエルに神機をゆっくりと構えの体制に入る。

「ま、とりあえずその馬鹿力の金髪嬢ちゃん。その眼鏡ボウズをとつと助けてやれや。」

(眼鏡呼ばわりかよ……。しかも私は女だ!!)

「わ、分かりました……」

サムがアネットに指示すると、体制を立て直したサリエルとその周囲に集まったアラガミに単身神機を担いで突入した。一方でケイ

トはサムに男呼ばわりされたことを機に刺して苛立つが、今はアネットにおとなしく瓦礫をどかしてもらい足が動けるまで待っていることしかできない。

右足が動けたら、コイツの喉元に一発ナイフか銃を突きつけて説教してやろうかと考えていた。が、今はそれどころではない。

サリエルの咆哮と共に、周囲の建物から突然アラガミが次々と姿を現した。地上にオウガテイル、空にはザイゴードがサリエルの周囲に集まってくる。

その数、サリエル含めて10体。しかしサムの表情にあせりは無い。むしろ、口元がニヤリ、と笑っていた。

アラガミに向かうサムに一斉に複数のオウガテイルとザイゴードが跳躍し牙を向けた。

「オメエラ位は、ま、俺で十分で、3分で終わるとこだな。」

だがサムは恐れもせず前に突撃していく。しかし10mぐらいに迫るとジャンプでオウガテイルをかわし、上空の3体の内1体のザイゴードに神機の斧になっっている刃を振り落とした。この瞬間、この場で最強の神機使いとアラガミの戦いの幕を開けた。

「ぬうんツ!!」

刃に深く食い込まれ抜くことが出来ないザイゴードを、ハンマーの様に2体のザイゴードに神機を振り回し食い込んだザイゴードで叩きつけた。

2体のザイゴードは神機とザイゴードの合わさった重量で吹っ飛

び、更にもう2体のザイゴードに避ける間もなく激突。4体は纏めて近くの古びた建物の壁に激突、地に落ちた。

サムはザイゴードに向かって直進駆け出した。が、背後に4体のオウガテイルがサムに追いかける。サムは気づいては・・・いた。ただオウガテイルを無視し、直進に向かった。丁度落ちていたザイゴードがよろけながら浮遊するが、サムはザイゴードの下をスライディングで滑り込み、ジャンプでザイゴードの群れの背後をとった。

「俺のホームラン、受けてみるか？」

サムは神機をザイゴードにボールのように叩き込んだ。しかも、追ってきたオウガテイル目かけてザイゴードがそのままオウガテイルに巻き込まれ激突。

その衝撃で食い込まれたザイゴードは動かなくなり、赤い球体を残して黒い塵となって失せた。

サムが地面に着地した時は、今度はオウガテイルが前後に二体ずつ別れサムを襲う。その内2体のオウガテイルはサムに向かい、鬼の面となっている尻尾を交互に振り回すが、巨体に似合わず尻尾が振る前に目に止まらないステップでオウガテイルの後ろに取る。

しかし、サムから離れた距離に待ち構えたオウガテイルが尻尾から二ードルを交互に連続で放っていく。サムはこれをステップで2回、3回と軽くかわし、オウガテイルの目の前まで近づくと、神機を横一線に振り回す。二体のオウガテイルが叫ぶ間も無く頭が高く飛び身体は動くこともなく倒れた。

と、さっきまで後ろをとっていた二体のオウガテイルがサムの動

きを封じるべく飛び掛る。だがサムはその場から離れようとせず、神機を後ろに構えだした。

「何やってるんだ、死ぬぞー!!」

ケイトの注意を聞きもせず、サムは一步も動かない。オウガティルが目の前まで迫ってくる。その瞬間、

「チイエストウツ!!」

神機をたった一撃、二体のオウガティルをバットのように水平に殴りこんだ。一瞬でオウガティルが住居の壁に吹っ飛び激突。その衝動で住居が崩れ、瓦礫の山に埋もれた。

「・・・俺様流、必殺チャージクラッシュ。」

「す・・・凄い・・・。」

アネットがサムの活躍に口を開く。あの巨大な武器を、軽々に使いこなしている雄姿に見惚れていた。

「さあつて、残りは・・・うーん、残念美人ちゃんか。」

「「何が残念!?!」」

「種別的に。」

互いに初めて会う二人の少女の息が合った突っ込みをサムは軽くスルーし、神機の剣先をサリエルに向ける。

だが余裕の笑みを浮かべる無傷のサムにサリエルは、サムの実力に警戒し、後を退く。が、突然サリエルは叫び、頭の目玉から複数のレーザーをサム目かけて放つ。サムはステップでかわすが、レーザーは方向を変え、サムを追ってくる。

その間にサリエルは後ろに退きながら身体をクルリ、とダンスのように一回転のステップを3回、そこから3個の球体がサリエルから放たれた。サムは追尾レーザーを目の前の住居までおびき寄せ、直前まで迫ると回避してレーザーは住居に直撃し免れる。が、今度は球体がサムを狙い定めレーザーになった。

サムはそれも難なくこれを回避する。さっきの追尾するレーザーと違い、射撃のように狙いを定めて撃つようなレーザーである為、難は無い。サリエルもまた退こうとするが、後ろは天高く聳える防衛壁にぶつかり、逃げ場を失う。サムは壁に追い込んだサリエルの前まで走り出し、10m手前でジャンプしサリエルの身体を切りかかるうと、神機を上上げる。

だがサリエルはそれを待っていた。両手と翼にもなるスカートを一気にバアッと広げた。直後、サムは何かに弾き飛ばされた。

「何だあれは!？」

「綺麗……。」

サリエルの全身を覆うように地面から空まで一直線に伸びる光の柱に包まれていた。サリエルの攻撃の中で、光の柱が展開中は例え神機使いでもこれを触れればダメージを喰らう。これを打破するには、遠距離型の神機使いが射撃で打ち落とすのが最も効率が良いが、今の状況では神機使いはサムだけ、しかも持っている神機は近接型

の神機なので、この攻撃はダメージを与えることはできない。

「これじゃ、近づけられない……。」

アネットは心配し、ケイトはようやく足に埋もれた瓦礫から抜け出したが、怪我が重傷でアネットが積んであった瓦礫の山に座って様子を見ている。

はじき飛ばされたサムは頭を下に地面が激突、寸前に右手で頭をガードし、ほんの一回転で体制を立て直す。

「……今更通用すると思ってるのか？」

しかしサムには苦痛どころがサリエルに余裕の笑みを浮かべしていた。しかもどこにも光柱に触れた跡もない。間一髪避けたらしい。立ち上がるサム。だが、サリエルはサムに隙ができたのを身振ったもか、サム目かけて急速に接近、そのまま体当たりで突撃してきた。

「それが……。」

顔にはニヤッと笑う表情に、片方しかない瞳に鋭く、輝く閃光がサリエルを睨みつける。それは丁度、サリエルが光柱を消しサムの様子を伺った直後に。

と、サムはそれに応じ、神機を、槍投げの体制に構えだし、サリエルに狙いを定めている。しかしそれに気づいたサリエルは本能に危機感が走り、目玉から上空に一線のレーザーを放つと、天高く聳える防衛壁を乗り越えるべく上空に飛んでいく。

このままでは逃げられる。二人の思考がそう判断したが、サムはこの場を離れずサリエルに狙いを定め、

「言つとくが、おっさん自家製の神機つてのは、・・・」

直後、サムは神機を・・・、

「こつ使つんだよ!!」

投げた。

ほんの瞬きでサリエルの後頭部から目玉まで神機が串刺しされ、更にマツハの速度で投げた神機の衝動で首がもげ、身体と頭は分かれるように防衛壁の頂上前から地に落ちた。

直後、サムは予測してたようにバックステップでその場を退くと、サムを取り囲むようにレーザーが降り注いだ。

あっという間にアラガミを一人で倒したサムの実力に、ケイトとアネットはただ、啞然とする他何もしなかった。

「す…っう…」

「すげえ・・・というか、メチャクチャ・・・？」

ケイトには、ゴッドイーターの戦いに驚かされたただその場を呆然と眺めていた。が、アネットはサリエルの死体のグロデスクに後ろを向き嘔吐しているが、誰もそれに視野に全くいれてない。

「言つたる？俺だけで3分で十分だつてな。」

二人の少女に背中を向きながら顔だけ向き、齒をむき出した笑いを見せた。

このときケイトは、一人のいい加減な神機使いの雄姿を目の前に写され、初めて心が揺らいだ。

ここに今、出会いから始まる、黒歴史の時の針が動き出すことを――。

D a s n ? c h s t e M a l 「決意」

第11章 美しく、恐ろしく（後書き）

次回で第1部完結！おめでとう！！

しかし！同時に！！それは来月に回していくことになる！！！！

（教訓）いかなる時においても自分のスケジュールは作成、把握、行動するべきであると。Cycloneはここを改めようと思います。

第12章 決意（前書き）

4年ぶりの居住区襲撃が収集を収めた。その数週間後に、かげかえのない家族と共に生き延びた少女は、あることを決意する。それが、世界初の誕生の前触れと言えよう――。

第12章 決意

あれから数日後… 4年ぶりのアラガミによる外部居住区の襲撃は、ドイツ支部全部隊の神機使い達がE・エリアで殲滅したことで事態は収まった。

と同時に、4年ぶりに大勢の死亡者、大規模な被害が出たのは、言うまでもない。

その襲撃で住む者、財産、友人、家族を失い生き残った者はこの悲惨をただ、悲しんだ。

ドイツ支部は4年ぶりの襲撃の悲惨に踏まえ、今後アラガミ防衛の強化と居住区に配給品を元通りに毎日提供することを公共放送FBSのニュースを通じて発表した。わずかではあるが、ドイツ支部は改善の道を一步踏み出す傾向を、居住区民達に伝えたのだ。

だが、ニュースの最後にとんでもないおまけも報道され、居住区民もそれには凌駕し、悲しみをつい忘れた程だ。

『命知らず！？アラガミを恐れず駆け抜けるケイト・ローデンバ―グの無謀な救出劇！！』

このおかげでまたしても、ケイトはこの先、注目を浴びて大変な目に合うが…、それは後の話に保留しよう。

「よし、いきなりだけどお前らに、聞きたいことがある！」

「「「ハイ！！！」」」」

「・・・知つてのとおり教会は数日前に焼き無くなってしまったが、お前達の親の家に戻るか引き取ってもらう家と一緒に探すの、どっちが良い？」

「「「どっちもヤダー！！」」」

（そう言つと思つたあゝ。）

予想はしていたケイトは腕を組み、頭を傾けた。

さて、一体何をしているかと言うと、

「でも、さっき言つたけど教会はもう無いぞ、お前達。」

そう、他に住むところの相談であつた。

数日前のアラガミ襲撃に、子供の証言でサリエルが教会を焼き払つてしまい、住める状態では無くなった。

そこで、焼きこげた柱しか残つてない教会の前に、ケイトは他に住むところ、または子供を親のところに帰すかの相談をしていたが、

「だって、あの教会は僕にとってのお家だもん！他の所に住むなんてヤダ！」

「そうだよ、ケーネエ！ふえんりるに行こうよ！そこで僕達の教会を直してもらうように説得しようよ！！」

次々と子供たちはそれを反論していく。それはただの子供のわがままに聞こえるかもしれないが、彼らにとっては正論な理由があり、許されるはずもない。

無理もない。彼らは親に捨てられ、虐待を受けた子供を保護してくれる教会は、いつしか子供達にとって唯一の安全な「家」。それを今更保護者のところに帰せば、全員ではないがまた虐待を受けて傷つくのを恐れるのがほとんどだ。現に講義する子供の中に泣きながら訴えた者もいた。

その状況にケイトは耳を抑えずに聞き入れる。が、徐々に子供たちの煩さに鬱陶しくなり頭を抱え、ついには、プチッと何かが切れた。

「ダア~~~~~！纏めて言うな！煩い！！だから今日集まったのは他でもなあ——いんだよ、クソガキどもお！！」

メガホンを最大音量した程の怒鳴りが、子供達の耳だけでなく教会の庭が揺れ出すほどに響いた。それで子供がヒツと驚き、一斉に静まった。

ゼー、ゼーと息を荒く流し、とりあえず深呼吸で自分を落ち着かせた。いつもこの騒ぎになるとつい怒鳴りこむ癖に、ため息を流して立ち上がった。

「……またやっちゃったよ……。」

「よう、また近所迷惑レベルで怒鳴ったのか、ケイト。」

と、教会の門限から声が掛かってきた。そこに振り向くと、子供は知らない顔をするが、ケイトには聞き覚えがあり、声の主は予想通りの人物だった。

「ハール・・・それに彼女さん・・・。」

ケイト達に声を掛けたのは、ハールとその彼女だった。

ハールの彼女は昔神機使いの事故で足を負傷し動けないため、普段からハールに車椅子で押してもらっている。

「誰？」

「知らないのも無理はないか。お前等外でないし。こいつ等はお前達のご飯取りに行く時よく一緒にくる友達で。それより無事だったか！」

「ああ・・・運良く家の前にゴッドイーターがそこにいて避難所まで案内してくれたからな・・・。」とここで神父の方は？」

「いやあ、まさか分かってはいたと思ったが、地下室に隠れてて逃れたんだよなあ。てか、ついであいつ等も助けてこいつて文句言ったら出入り口塞がれたから助けなかったって言うてたけど。」

「・・・・・・・・相変わらずというか、さすが元連合軍の行動隊長だな・・・。」

ハールも呆れた。ついでに肝心の神父は脱出した後ギックリ腰に

負われて何時間も下水道の中動けないまま寝転がり、ようやくフェンリルの水道員が発見され現在フェンリル総合医療施設に入院中。

「ま、私が生き残れたのも、神父の秘密の指導のおかげだけだな。ハハハ。」

そう言っただけでケイトは笑う。だがその笑いは数日前の事があったせいか、顔に疲れが紛れて浮かべながら笑っている。

「ケイト・・・、お前もお前だよ！何であんな無茶なことをしたんだ！？下手どころが、わざわざアラガミが溜まっているところに行くなんて、完全に自殺行為だったのに！」

「だ、だつてえ・・・いや、ゴメン、本当ゴメン。」

仕方ない、とは言わず素直に頭を下げて謝る。

ハールもケイトと4年間過ごしていた経験からか、その危険な行動をとっていたのは分かっていた。いつも自分の身の安全以上に身寄り、困っている人の心配をし、それが放っておけずに世話をしたり助けてあげたり、時にゴッドイーターとも対立するなど、危険を顧みずに人の為に助ける、それがケイトという人間だから。

だからこそ、そんなケイトに気づいてもらいたい。他人の心配もいいが、自分の安全も意識してなければ、こっちが心配だ。

「たく・・・自分の身の安全ぐらい考えろよ・・・。」

「おい、その怪しいお兄ちゃん！ケーネエを責めるな！」

「怪しいってどういう事!？」

「まあ、確かにそうねえ……。」

「お前まで言うの!？」

彼女の以外な突っ込みに驚きながらも、子供達からハールに文句、悪口が休む間もなく飛んでくる。

「ケーネエが僕達の為にわざわざ助けに来たんだぞ!」

「知らない変なお兄ちゃんとは大違いだもん!」

「ちょ、何で俺って、いつもこんな不遇な目に合うの!？ゴッ
ドイターやケイトはともかく、10も満たない子供までそんな事
言われるなんて!」

「……それでも頑張るハールは、私嫌いじゃないよ。」

「ありがとう……君は俺の一番の味方だよ……。」

ついには子供達まで言われ傷ついて落ち込むが彼女に慰めながら
嘆いた。これにはケイトも「やっぱやり過ぎたか」と目を逸らしな
がら苦笑していた。内心「やっぱ人に好かれないタイプだよ、お前
は」など思わず呟いていた。

が、すぐにそれは消え、真剣な顔でハールと彼女、子供達に向け
る。

「……それよりハール、後皆。」

「ん？」

この場の全員はケイトの顔に驚き、口を閉ざした。これまで以上に真剣な顔のケイトは今まで目にしてない。

「実はな、今日呼び出したのは、他でもない。よく聞いてくれ。」

間を空け、そして、自ら決心したことを、言った。

それは――

「私な・・・ゴッドイーターになる。」

「うん・・・て、」

「え？ちょ・・・」

「もう一回言わせるが、私は、ゴッドイーターになるって言っている。」

「・・・エエエエエエエツ！！？」

それは嵐のように教会の庭が響いた。全員してみればありえない衝撃発言。

「ケーネエがゴッドイーターに!？」

「嘘お、ケーネエ!？」

「いや、ちょっと待て! 一体どういう風の吹き回しだ、ケイト!？」

「どうしたって、私はいつもの私だよ。それが何が？」

「いつもじゃないって問題じゃない! 昨日俺から誘ってはあんなに嫌がって断ったのに、何で突然ゴッドイーターになるって言い出すんだ!？ 米国で言うアメリカンジョーク!？」

まさかの出来事に、いい年をしたハールは驚きを隠せなかった。

それは子供達も同じだ。今までゴッドイーターと敵対し、危険な仕事で身寄りの無い家族に心配掛けたくないと言っていたケイトが、今日となっていていきなりなるって唐突に言い出した。それには誰でも驚きを隠すはずがない。

しかし、肝心のケイトの目は、真剣だ。

「・・・ジョークじゃない、マジだ。」

「・・・ケイト？」

その顔は本気に語っていると見た。間違いなくケイトは本気でゴッドイーターになるつもりでいる。

なら、ここで一つの疑問を質問した。

「でも、何で急にゴツドイーターになるって決めたんだ？」

「うん・・・それは・・・。」

空を見つめながら、ケイトは数日前に一人の男とあったことを遡って話した。

～回想～

「立てますか？」

「いつつ！・・・悪いな、アンタ。」

足を負傷したケイトをアネットが肩を組み立たせる。ついでにケイトの右足は近くの瓦礫の中に埋もれていた木材をコートで破った切れで巻いた応急処置で出血を防いでいる。

「あの・・・アネット・ケーニツヒ、アネットで呼んでください、それに、助けてくれたお礼ですから、この位は・・・。」

「・・・ケイト・ローデンバーグだ。一応知ってるよな？」

「はい、もちろんです。」

「だよな。」

それは当然、の反応を取ったケイト。ゴッドイーターに文句を言うどころが、刃向かう居住区民はどの世界の支部でもまずい程強力の影響を持っている程だ。特に同じ外部居住区に住んでる人間の合間で知らない人間はいない程だ。

「・・・あゝ、わーた。とりあえずお前ら軽くあいつらを逝かせてやれ。じゃ。」

「どうしたんですか？」

「何、口うるせえガキ共の報告でな・・・。今E・エリア内のアラガミを殲滅したから全滅とかどうとか、それだけ。」

端末の電源を切り分厚いコートの懷に入れ、神機を担いでその場を離れようとした。

「よかった・・・。」

アネットは安心した表情を浮かべた。もうアラガミがここにいないだけで、恐怖と警戒心の硬直が一気に解かれた。

だがケイトは逆に険しい顔でサムを睨みつけていた。これから嵐が直前まで起こる前兆の気配に、誰も気づかなかった。

「・・・でも、全員は救えなかったよな・・・？」

「あ？」

わずかにどこからか怒気を込めた小声がサムの耳を捉え、目的地に向かおうと進めた足を止めた。

「ケ、ケイトさん？」

「お前等は知らなかったんだろ！？E・エリアに私と神父、そこに引き取られている身寄りの無い子供がいたことを！」

そして怒りが頂点に膨れ、爆発した。もちろんそれに理由がある。E・エリアの封鎖だ。ケイトと神父、そして引き取られた子供達以外誰も住んではない。

確かにアラガミの数は凄まじく多かったのは突入してから目にしたから分かっていた。だが神父と子供達が住んでいるE・エリアにアラガミを追い込めて封鎖するなど、そこに住んでいる者を一斉処刑するという意味だ。ケイトはその人事非道な行為をするゴッドイーターが許せなかった。

「あー、いたの？てか、んなの知らねー。あそこ廃墟化して誰もいないって言ってなかったけ？そのせいで警報機とか無いからな。第一俺はそっちの専門じゃねえし、文句言っんなら勝手に呼び出したコウ達第2にしてくんね？」

事情を知らないサムはケイトの苦情を一見責任感も感じれない、いい加減な態度で受け流した。

が、実はサムの意見は正論でもある。本来外部居住区の防衛担当はコウ達率いる第2部隊が担当で、第3部隊は外部居住区民の避難誘導などサポートするのが常連。一方でサムはそれに関わっていない第1部隊。今回はアラガミの数が多すぎて、援護に來ただけ。

だがサムの態度が逆に、ケイトの導火線に火をつけてしまった。

「ふざけんな！何が・・・人類の希望だ、何が神を喰らう者だ・
・結局お前等はここの居住区の人間を救おうともしない腐った神
機使いと名乗った愚弄な人間に・・・助けられる覚えはねえ！」

「あゝ、うるせ。身勝手なガキの説教に耳を入れるつもりは、
まったあ無いな。」

「お前に言われたくねえよ！・・・く！」

更に怒鳴りつけるケイト。アネットが必死に止めようとするが
ケイトの怒りの勢いに手が出せない。しかし右足の痛みで立てず、
その場でひじをついてしまう。それでもケイトの怒りは痛みさえ忘
れ、サムにその怒りをぶつける。

「結局お前等フェンリルは私を・・・私達を見殺すつもりだっ
たんだな！？」

「じゃ、何で助けようとした？」

「え・・・」

と、急に予想外な発言に呆気をとられると

「それは過ちに気づいた神機使いがやる役目だ。一般人がそんな危険なところが入れる訳が無いからな。が、お前は自分より家族であるガキ共を助けた。それはつまり、お前が死んでも良いほどか
げかえの無いものだったのか？」

「それは・・・」

ケイトは答えようとしたが、口が詰まった。

本当は死ぬ覚悟など無い。ただ助けたかったが、その理由でいう自分が哀れだと思い口に出すことは無かった。

あの時、本当は逃げるつもりだ。初めて恐怖を感じたアラガミに出会い、喰われ死を恐れていたことを。だが、それ以上に家族が失うのは、もっと怖かった。せめてそれだけは、と思っていた時には、既にザイゴードにバズーカを撃った後で、視線を向いていた。

「ただ守りたくて、勝手に動いただけか？」

「……」

やっぱりか、とサムはため息を流し、首を捻った。何気にこの展開は、4年前にもあった気がしたな……。と薄っすらと過去のことを思い出していた。

ただあの若者と違いケイトは、身の安全をものともせず単身、Eエリアに向かった。そして神機使いに

「……他人の心配を考えずに助けにいくとは、身勝手だな？」

「違う！そんな自分勝手に動いたわけじゃない！」

「それが勝手って言うんだよ、ボーズ。」

「……え？」

それは思いもしなかった返答。さつきまでサムに怒っていたケイトは、嘘のように怒りが泡に消え、その場で黙った。

「・・・勝手つーのは、自分として生きる証だ。」

サムが月に照らされた夜空を見上げながら、それを語る。まるで昔の自分を振り返っているかの眼差し。ケイトはその表情に黙ってサムに耳を傾ける。

「自分は何かしたい、欲しい、行きたい、その思いが強く抱き、やがて他人のことも考えずにやりたいことを実行し、結果を得る。だが、知っての通りそれは「自分勝手」とも言う。」

「何が言いたい？お前が傲慢だからか？」

「それも合ってる。だが、それは人間だけに限ったことじゃねえ。」

と、サムは近くのゴミ箱を足で高く蹴り上げた。そこに隠れてた一匹の小汚い犬が驚き、サムから逃げだす。

「この居住区に稀に見かける犬も、ただ生きたくて人から食料を奪って食べてるだろ？たまに殺されてるが、それも「勝手」だ。」

「・・・それはあの犬にとっては生きるのに必死なだけだ。あまりいないが、ここに犬と共に過ごしてる人もいる。・・・」

「だからだ、生きていく為に人のことを考えれる暇が思つか？有名人。」

「……だから、何が言いたい……。」

「そして俺らの所の神機使い共はただ、勝手に自分の下らねえ目的を持って、神機使いになっただけだ。勝手に戦って、勝手に欲しいものを手に入れ、勝手に生き残って、そして勝手に死ぬ……。」

「……それって、つまり、」

「そう、」

ケイトの前に指を立て、サムが結論を言う。

「勝手は自分の自己表現、活動。俺は俺で生きる、てな。」

勝手、始めはただの無駄な言いかがりだと思っていた。だが何故だろう。この男が話すと、スツキリと納得する。そのサムの顔にどこにもふざけているところはない。その力強く、しっかりと見つめる眼がケイトに視線を向けている。

意味は分らない。ただの屁理屈にも聞こえなくも無い。しかしこの男、サムはかなり長くアラガミとの戦闘を体験しているのは確かだ。その「勝手」も、彼がゴッドイーターになってから見つけ出した一つの「理論」だと。

「お前はそれを何も考えずに飛び出して家族を救った、それも「勝手」だ。ま、よほど思い入れがあるというか、よく化け物の檻の中に入り込んだな。大した度肝だぜ、ボーヤ。」

「……だから女……。」

「まあ、それはあくまで俺のモットーだがな、別に同意するな
って。」

「話を聞けって！」

「・・・ヘーヘー。口だけは男前の一歩手前だな。お前が神機
使いになったら結構人気でて頼れそうだがな？」

さっきの男前な顔はどこにいったのか、いつものふざけた表情
に戻る。一方のケイトは子供のように筋を立てて怒るが、すぐに冷
めるように静まる。

どうも自分がこの男に振り回されるばかりに言っても無駄なのか
ケイトは観念した。

サムもやつとこりたかと言わんばかりに腕を回して体を慣らす。

と、

「・・・なあ。」

「あ？」

ボソッとケイトがサムに質問をかけ面倒くさそうに答える。

「一体どうしたら、確実に皆を助けられるんだ？」

「分かって言ってるのか？ 確実は無いが、神機使いしか他に無
いな。」

「・・・そうだよな・・・。」

サムの言うとおり、当然ながら分かっていた。この時代で、あの化け物に対抗する術は。しかし方法がそれしかないとはいえ、ケイトは躊躇った。

もしゴッドイーターになれば、死ぬまであの化け物と戦うことになるのを、恐れていた。だが少なくとも、もう数日前までの生活には戻ることはない。教会が焼かれ、何のかも失った家に、身寄りの無い子供達をどうするつもりか、まだ予想もつかない。もしアラガミが外部居住区に進撃したら、唯一の家族と友人達を救える力はないまま、死ぬかもしれない。

その選択に迷うケイトにサムはチラッと見つめながら、近くに神機使いが歩いてるのを見かけた。

「と、そろそろ帰るか。」

サムは神機を肩に乗せ、下に沈んだまま黙ってケイトといつの間にか会話に忘れられて呆然と立っているアネットを置いて、そのまま他の神機使い達の方に向かった。どうやらアラガミはいなくなっただけらしい。

丁度ケイトを通りすぎる瞬間、視線を向けずにサムはケイトにこっそりと呟いた。

（お前も、何か探し求めたまま一生過ごすつもりか？）

それにケイトはハッと我に振り返り返る。だがサムは既に遠く

に行っていた。

「何だか、ゴッドイーターって、やっぱり大変ですね……。ケイトさん？」

（求めるもの……。）

ケイトはサムを見つめながら、その単語の意味を執着に考えた。アネットの呟きに耳も入れず、ケイトの頭にサムが呟いた言葉の意味を考えた。

それは自分の記憶……。このドイツ支部に来てからずっと、それに悩まされていた。その手かがりが……。

その言葉に、ケイトは心の中で迷いながらも、決心した……

（回想終了）

「……で、訳だ。」

「ケーネエ……。」

「ケイト……。」

あの出来事を全て話し終えた後は、さっきまでの子供達の歓声も、ハールも静まり返った。だが、ケイトは最後のところまではあえて話さなかった。いや、話したくなかった。

それでも、何故ゴッドイーターをなると決めた理屈は矛盾なく通っている。

そう、ケイトがゴッドイーターになるのは、確実に、皆を守りたい力を手にすること。あの襲撃の惨劇を二度と、繰り返さない為に。

「・・・そうか。お前、この惨劇を繰り返したくない為に、ゴッドイーターに・・・。」

この中で一番理解したのは、ハール。

「本当は怖い。ゴッドイーターになっても、無敵じゃない。あの化け物に喰われて死ぬのも。でも、私達の教会が無くなった以上、確実にこいつらを守るのは、なるしかないんだ。」

ケイトの左手がわずかに震えている。

「だけど忘れないでくれ。私がゴッドイーターになるのは、お前達の為だ。決して居住区民達を脅すゴッドイーターには、決してならない。」

「・・・分かってる。お前は、絶対そんなのにはならない。」

「うん・・・。だからハール、後お前達。」

「「「?」」」

子供達に手招きで集めさせ、ケイトの周りに集まった子供達に一人ずつ頭をなで回ると、

「勝手なお願いかもしれないが、ハール達の所に住むんだ。」

「……え——ッ！！？」」

「ケ、ケイト！？」

「やだよ、僕達はここに残る！他のお家なんて行きたくない！」

「こんな怪しいお兄ちゃんの所に住むなんて、ヤダア！！」

「……（俺、泣く3秒前）」

ケイトの願いをことごとく反論する。子供達の罵倒に耐えてきたハールが崩れそうになり、それを必死に慰める彼女。が、

「黙って最後まで聞け！！！」

威圧感のある険しい顔で子供達に怒鳴る。子供達はケイトの怒鳴りに驚き、黙り込む。泣きそうになったハールも思わず腰を抜けてしまう。

「……今を見る。お前達だって分かっているだろ。もう教会は、無い。」

ケイトは子供達に今の状況を教えた。そろそろ彼らにもこの現実を知るべきだ。いつまでも狭き教会とつかこの中に閉じこもらず、一歩外に歩き出す勇気を踏み出してほしい。

「でも、教会は私が一生懸命働いて、稼いで、教会を建て直す。その時まで、ハール達の所に住まわせて、待ってくれ。」

「・・・分かった・・・」

「ケーネエが言うんなら・・・」

子供達が納得した。ケイトは子供達全員に身を寄せ抱きついた。その時子供たちは見た。ケイトの目に、わずかに涙を流していたのを。多分、ゴッドイーターになるのは、当分会うこと、いや、もう合えないかもしれない戦いに行くから、心の中では辛くても決して口にはださない。

子供達もケイトの心に思わず泣きだしてしまう。いつまでも一緒にいたい彼らの答えは結局叶えられなかった。

しばらくしてから、皆泣き止んだ。一人の子供に頭をなでながら一人ずつ子供の顔を見つめる。その表情は、悲しみと辛さを超えた立派な顔立ちになっていた。一歩だけだが、成長したのだ。

それを見てケイトは微笑んだ。

「うん、大丈夫。ハールはそんな悪い奴じゃない。頑固で暴走しやすいけど私と同じぐらい仲間思いが強いから、すぐ仲良くなるって！な。」

「ああ。二言は余計だけど、あえて突っ込まないでおくよ。」

「料理でしたら、私に任せてね。」

ハール達もケイトの案に同意した。この先分かれて暮らすというのに、彼らはケイトを快く受け入れた。そんな彼らに、ケイトは申し訳ないと思いつつも、感謝の気持ちで溢れている。だから精一

杯の思いで、ただ一言伝えた。

「・・・ありがとう。」

ただそれだけしか、しかし感謝で一杯だった気持ちを十分に、皆に伝わった。

数日後・・・

「着いた・・・」

晴天の天気恵まれたこの日、ケイトはある場所にたどり着いた。

そう、フェンリルの防衛壁である。

ただ、今回は特にデモの制圧、反論に来たわけではない。（そもそも今までフェンリルに訴えもしたことは無いが。）

目の前には壁の前に聳える門と警備員の二人。背後にケイトと同じように壁の前に立つ若者達がいる。緊張で身体が強張ったり気楽にしてる者色々だが、どれもある目的でここに集まっている。

今日は、彼らにとってこの折から抜かれる日であり、変わる日でもある。「ゴッドイーター」の適正審査だと言つ日を。

ケイトも前日に「神機使い隊員募集」に参加し、フェンリルの

DNA検査からゴツドイターに選抜された通告が来て、ハール達にしばらくの別れを告げ、今ここに入る。

「さあ・・・行くか・・・。」

と、高く聳える門が開き、光が差し込んだ。警備員がケイト達を誘導し、一人ずつ門の中に足を踏み入れ入っていく。

何人が入った後、ケイトも指示通りに門の中の施設に向かう。

「私の・・・唯一の手かかりを・・・。」

ケイトは開かれた居壁の扉に、足を踏み入れた。

同時にこの日、初めてフェンリルはようやく、世界初の戦力を手にした日でもある。

最初の新型神機使い、「ケイト・ローデンバーグ」誕生の一步を――。

>i31274—3086<

D a s K a p i t e l 1 S c h l u ? . . .

第12章 決意（後書き）

第1部、ようやく完結！

長かった…。だいたい5ヶ月は掛かった気もするけど、ひとまず達成に乾杯！

と、お知らせすることがあります。第2部は今後本当に忙しくなる時期が入るので、都合上連載を遅らせることとなりますので、それまでの間期待しながらお待ち下さい。頑張って今年中には出してみます。

お詫びとして2点、おまけ出しちゃいます！

Kapitel 2 Benachrichtigung (前書き)

文字通り（ドイツ語だが）第2章の予告！ちよつとネタバレが入
ってる気もしますが、そこは読者の皆様のご自由ということで。

Kapitel 2 Benachrichtigung

「おめでとう。君が世界初の新型神機使い、改め新型ゴッドイーターだ。」

「・・・へ？」

ここに誕生

「あなたも、適合者なんですか？」

「どんなに新しくても、所詮は化け物だ。」

「まあ、悪いことはしないから、安心してくれ。」

「ワイ特性神機パーツ、大事に扱えや。」

歴史を動かす新型神機使い

「おっしや、新人ボーイ。これから面倒になるが初任務に行くぞ。」

「・・・だから女だったのー!!」

しかし目にしたものは・・・壮絶な現実・・・!!

「これが・・・戦場・・・!!」

「弱者は俺の前に立つな!!」

「お前にはまだ英雄様のお供にもなれそうもないな。レディー。」

「私だって・・・自分で決めたのですから！」

今、ケイトの運命はここに交差する！！

「やめろ・・・やめろ・・・やめろお——ッ！！！」

「これが新型神機の性能か！」

「お前には早すぎる。」

「これは…史上最大の危機って奴？」

「無茶だ！いくらなんでもこりゃあ無いって！」

「くそお…」

「一体、どうしたら…」

「う〜〜〜む…」

「誰がそれが無理だって分かってでも・・・私だけでも、守ってみせてやる！！！」

その果てに何を得る！？

Kapitel 2 Benachrichtigung (後書き)

新型神機使い…実に興味深い…

んでもって今回は食について語る。

ゴッドイーター、それは神を喰らう者……。食とは生きるために他の命を喰らい生き延びる。日常では食品を購入し料理、食卓に並ばれて食べるのが当たり前だが、本来は獲物を探し狩りをし捕え、食べる。我々はそれを忘れ楽に他の生命を喰らって人間は生きていく。

そして神を喰らい生き残る者は、本来の狩りを取り戻しながら神の命を喰らい生きていく。

命が生きている限り、我々は何を食べても生きていけるのだろうか……？

第13章 悲痛なる適合検査（前書き）

少女、ケイト・ローデンバーグは遂に運命的な瞬間を果たし、神機使い（ゴッドイーター）となる。そこには運命を共にする様々な出会いが待ち受けていた。ある人は友になり、ある人は邪険にされるが――

第13章 悲痛なる適合検査

え~~~~~.....

突然だけど皆さん、こんにちは。本日持ってゴッドイーターになりました、ケイト・ローデンバーグです。

正直、私は今日訳が分からない程疲れた気がして、たまんねえよ...

え？今どうなってるかって？いや、ちょっとねえ...

「お前がケイト・ローデンバーグか？」

「・・・キラ、新人にいきなり嫌われそうな威圧感とは与えないでくれないかな？」

目の前に白衣を着た二人に、絡まれています。特にあのオバちゃん、何か私にガン付けられて困ってんだけど・・・。

ただ廊下でバツタリとあっただけなんです...

.....

まあ、何でこうなったのかって言うと、...少し痛いところも含めて、おさらいしなきゃなんないなあ。

『次、？27番、ケイト・ローデンバーグ。』

「おう。」

天井のアナウンスに呼ばれ、軽く返事し席を立った。

と、周囲の人間は反応した。

ケイトを含め、ここにいる人間は全員、同じ神機使いに選抜された若者達。

「やっと出番か……。」

待っていましたと呟き、ささつと早足で控え室から出た。

何せ職員に案内されこの6畳しかない狭い控え室に、同じ居住区民の人達に人気者の視線を向けられて正直、うんざりしていたところだった。

ケイト自身は、別に人気者を気にするタイプではない。むしろ大勢の人々に必要以上に注目されるのはあまり好きではなかった。

控え室に待機していた一人の職員がケイトを連れて案内し、しばらく歩いてからようやく目的地に着いた。

（ま、軽く終わりそうだから安心して行くか。）

「言っておくが、TVと同じと思ったたら凄い目に合うから、気をつけなよ?」

「……へ?」

「ま、見れば分かるさ…。さ、入りな。」

目の前の二重奏に分厚い扉が鈍い音をしながら開いた。

この音が耐え切れないのか思わず耳を両手で塞ぐ。職員もケイトと同じ耳を抑えないが、顔では僅かに目に筋が立っている。

そして扉が開くと、その先には漆黒の闇のように真っ暗になって何も見えない。

「安心したまえ。特に危険なものがある訳ではない。とりあえずまっすぐ進めば良さ。」

暗闇で躊躇うケイトに職員が微笑みながら優しく忠告する。しかし、その顔はどう見ても悪趣味な微笑みしか見えない。むしろ何かを楽しみにしてるような予感しか感じないが…。と内心呟く。

とりあえずケイトは暗闇の部屋の中に慎重に、体が吸い込むように入って行った。

「さあって、今日は特別なショータイムかな…？くっくく…」

後には、この場に残った職員がいつも以上に不適な笑いが響いたのを、誰も聞こえなかった…。

中に入ってから不気味に思う。何も見えない。光がどこにも無い。おまけに後ろの扉がガコン！と勢いよく閉められた音が響き、閉じ込められた。

暗闇の部屋の中に取り残されたケイトは光を求め辺りを見回すがどこにも無い。

「まさか…はめやがったのか!？」

咄嗟にそう思い込んだ瞬間、突然暗闇の世界に隠れたケイトに、闇をも消え去る光がパツと照らされた。

手で光の眩しさを遮りながら辺りを見回すと、ようやく目が光に慣れ、明るくなった視界が見えた。

見たことが無い特殊コーディングされた壁に覆われた広い空間に、4回以上のビルはありそうな程のかなり高い天井。

そして目の前の壁にこの空間を見下ろせる場所に壁1面のガラスが張られており、そこに3人の人影が映っている。

どうやらここはゴッドイーターが使うトレーニングルームらしい。その無機質の壁にいくつか刻まれた剣裂きの跡、弾丸の跡がそれを語らせている。

『ようこそ、ケイト。ローデンバーグ君。』

そのハッキリと、しかしどこか弱い一様にガラスの方に視線を向ける。中に3人の人が立っていて、ケイトを見つめていた。

と、真ん中に立っている人物がケイトに視線を向かれた途端、ヒツと肩を上げた。

（支部長、しつかり。）

『わ、私はこのドイツ支部を治める支部長、「ヘルベルト・アーワルツ」だ。』

隣の人に注意され、姿勢を直した。さつきと違い知性に溢れた声で自己紹介をする。だがそれは無理に声を裏変えしてるのは聞いて分かった。いや、最初に発言した時点で誰なのかはもう分かっていた。

ケイトだけでなく、外部居住区民からしてこの気弱な支部長と印象付けられていて、あまり評判は良くない。

思わず緊張に上がっていた肩がガクツと下げ呆れる。

『おお、もうリラックスに入るとはさすがやな。お主、只者ではないの？てかー！』

今度は別の声がケイトの行動に褒めるように話しかけてきた。さつきのヘルベルトと違いマイペースな口調と極東では珍しい関西弁だ。

（いや、ただ支部長に呆れただけだなあ、…？）

ふと、目の前に置いてある重厚な機械仕掛けの台座の上にある物を目に引かれた。

「どっかで…」

それはどこかで見た覚えのあるもの。一言で言うなら、ケイトの頭身より大きく、常人にはとても持ち上げられない剣だ。だが、どこが違和感がしていた。

と、ヘルベルトがもう一人の等身の低い男性に説明を任せた。

『一般人が目にするのは初めてか？これは生体兵器、「神機」や。』

ケイトはやはりと分かった反応を示すと、男性は黙々と神機の説明を続けた。

『まず大まかな部分から教えとくからよく聞け。最初にアラガミは「考え、捕食する1個の単細胞生物」の集まりである「オラクル細胞」が結合して生まれた、つまり群体生物や。結合したオラクル細胞は、あらゆる物を「捕食」し、それを取り込んで形態を変えていき、強くなっていく。その性質が不幸に、通常兵器でもつてもアラガミを倒すどころが、逆に取り込まれてわいら人間は、何もダメなや。』

だが、それを対抗する兵器は、ワイら達フェンリルが開発した。それが「神機」…て、』

気が付けば、男性の論理話にケイトが興味深く神機に目をうつうつと見つめていた。

「…興味深え〜！あの時は現場がああだったから余裕が無か

ったけど、今間近くで見ると迫力ありそうだなあ~~~~!!ゴッ
ドイーターもよくこんなの持ってたよなあ!？」

『…まあ、それは後に取っておくから今は気にしなくてもええで
(中々の武器オタクみたいやな…)さてと、ワイらにとってコア
は大変重要や。コアは皮肉やけど人類最後の切り札、「神機」に必
要不可欠な物やからな。』

と、「神機」を見つめた。

『その斬撃はアラガミを切り裂き、その弾丸はアラガミを打ち砕
き、そして、その神機の本能でアラガミを…ガブツと喰らう!それ
こそが、神機や。』

一言余計に熱心に語る男性にヘルベルトとそのもう一人は肩を落
とす。

『でもお前さんは疑問に思ってたやろ?』

ケイトは男性に疑惑を見分けられたようにガラスに振り向き、

『何故自分が見てきた神機とこの神機は違うのか、不思議に思っ
てるやろ?無理もない。何故なら——』

息を呑み、一瞬の間を開け、そして告げる。

『…まあやってみたら分かるやろ。』

『博士——ッ!?!?』

「何だよそれ——ッ!？」

周囲、ケイトと支部長はずっこける。

『ま、支部長、後任せた。』

『私に押し付けるのか!？』

『だってこれは支部長の仕事やろ？今日はお偉いさんもたくさん来とるし、ワイは別仕事があるから忙しいし、ほな、任せたで。』

『…はあ、仕方ないですね。』

(ベラルさん…支部長も色々と苦労してるから気を使って下さいよ…。)

執事の男性がベラルに内心訴えたが、当然彼の表情を読まずに調子の良いベラルは近くのソファアーにステップで座り込む。

『…まあ、何にせよ、』

場を改め事の続きを話そうとするが、既にケイトは神機が置かれている機械の前までに立ち、正に手を伸ばそうとしていた。

「とりあえず使ってみれば分かるだろ？」

聞き手の左手で神機の塚を掴みとろうとした。

その時、突然何かが脳内に感じた。

（何だ！？）
」

それは突然景色が変わり、真っ白な光の世界に入り込んだようだ。

その時、閃光の音に紛れて、声が耳を捉えた。

だが、あまりの速さで聞き取れない。

直後、フラッシュバックに照らされた。と、気づけば元のトレーニングルームに戻っていた。

ほんの一瞬の間なのか、どこも変わったところはない。

手が神機の塚を掴んでいた以外は…

もちろん…

『ちょ——、ま…』

『あゝあ…』

ガゴン！と台座の上の部分が落下し、ケイトの手首は上下の反映型の部分に挟み込まれた。

「え？」

目の前に落下した機械にワツと驚き身を引くが、既に腕が挟まれて抜け出せずに離れなかった。

だが、それ以上の感覚がケイトを覆いつくした。

そして、

「う……ぐう……！？」

瞬間、――ケイトの額に苦痛の表情を浮かぶと、

「い……痛……て……ぐ、うぐわあああああああああああああ
あああああッ……！！！」

突然腕から全身に駆けて激しい痛みをケイトに襲った。

「何だ……、グフウ！く……あぐあああああああああああッ
！……！！！」

左手に何かが侵入し、瞬く間にケイトの全身を駆け巡ったと思えば、それはケイトの全身を犯した。そして言葉にはできないが、麻酔無しでケイトの体を引き裂き体にあるもの、肉も内臓も骨を全て取り出し、強引に中に別の物を推し入ってくるような痛々しい感覚しか感じられない。

機械から左手を抜け出そうともがくが、絶叫が途絶え無いほどの壮絶な痛みが体があることを効かずに、むしろ痛みに苦しみ暴れることしか出来なかった。

そして内心思う。

やっぱりアルコールパッチじゃなかったのかあ――ツ……！！？

今更だが、公共放送FBSでは適性検査の内容がアルコールパツ

チ程度の軽い検査に流れていたもので、てっきりその通りに軽く住むのかと気軽に考えていた。だが、今頃となってはそれが嘘だったと後悔していた。

全身から汗が噴出し、目が血走りながらも涙を流し、タ力が切れた獣のように暴れる。

気づけば左手には太い血管がビクビクと鳴りながら腕から浮き出し、しかも出血している。

窓から眺めたヘルベルトは思わず目を逸らしコートから取り出した袋で嘔吐している。それが吐き止むと、支部長はケイトの様子に危機を感じた。

『まずい、予想外だ。……博士！直ちに適合検査の中止を！』

『心配ないで、支部長。』

『しかし！』

「…あやつなら耐え切る。いや、きつとな。そして手にする……と思うで。」

一方でベラルは一瞬も目を離さずに見続ける。ケイトの苦しみにも関らず余裕の眼差しでその様子を一部始終見下ろしたままみ。

「ぐッ……このお……クソがああああああああッ！！！！！！」

途端、白めに向いたケイトが部屋が揺れだしそんな勢いで咆哮し

た。

その咆哮に執事の男性は足を退き、ヘルベルトは勢いに負け腰を思いつきり抜かしてしまいが、ベラルだけは動じなかった。

痛みを乗り切り、何かを喰らい尽くす獣のように。

まるで、自ら「アラガミ」になったかのように――。

そして、

プシュウウウウツ…とケイトの左手を挟んでいた部分がゆつくりと上へ持ち上がる。

「はあ…ぜえ…ふう…」

ケイトの全身を襲った痛みが消え、その場に思わず膝を着いた。が、少ししてから立てるようになり、ふらつきながらも背を伸ばし、汗でびしょ濡れになった神を払いながら左手を覗き込んだ。

「……!？」

ケイトの左手にナット――さっきまで上下に分かれていた腕輪がはまっていた。紛れも無くゴッドイーターの証、腕輪。

その周囲に黒い霧がわだがまっているが、すぐに消える。

パチパチパチ、と拍手が降ってきた。

『おめでとう。君が世界初の新型神機使い、改め新型ゴッドイ―

ターだ。』

「・・・へ？」

気絶した支部長の変わりに寄り添っていた執事の男性が、記念すべき祝杯をあげた。

その祝杯の言葉に、ケイトは啞然とした。いや、それ以前に、

——何、「新型」って？——

「...ふう。」

運転中のエレベーターの中でケイト一人、思わず疲れた顔で溜め息が吹いた。

だが、ゲートが開くとそれはすぐに顔から消え、代わりに緊張感が走り、つい背筋を上げてしまう。

ケイトが降りたエリア、「エントランス」にたくさんの人が一斉に視線を向けられた。

白いスーツを纏った科学者や、腕輪をはめ込んだ神機使いなど様々だが、全員がケイトに見つめていた。

中には通りすがりながらケイトを見つめて会話をするなど、誰も

がケイトに注目していた。

（な…何なんだよ…？私って、そんなに凄い有名人だったのか？）

今更ながら、自分がやってたことを考えていた。確かに荒くれのゴッドイーターの暴行から

丁度近くのソファアーに向かいギクシャクに歩き、付いた頃には力が抜かれて座り込んだ。

だが、それでも注目の視線はうつとおしいほど見られているが、しばらくして視線は減ってきた気がする。

ふと、自分の左手を目の前にゆっくりと上げ、腕輪を見つめた。

「本当に、なっちまったんだな…。」

ゴッドイーター、いや、神機使い。少し前まで決心した事が、いざ現実になると中々信じられないことだ。

元々死と隣り合わせのゴッドイーターになるのをずっと拒み続けたのに、自分からなつたのだが、何故かスツキリとしない。

むしろ自分の判断に疑惑を覚えだした。

本当になって良かったのだろうか？

死ぬまで戦つかもしれないこの仕事に。

ひょっとすると、思った以上に早く死ぬかもしれない。

しかし、これは全て――

「あのお……」

ふと、隣から声が聞こえ、我に返った。

「あなたも、適合者なんですか？」

ふとその方向に振り向くと、いつの間にか、そこに少年がいた。

白い制服を身にまとい、少年のルビーのように赤い髪が特徴的と言えるだろう。外見だけなら良好な少年なのだが、その少年のオドオドとした仕種からか、人見知りが激しいらしい。

思わずそれには不意をつかれたように驚いた。

「うお！？いつの間にいたんだ！？」

「いえ、ずっと前からいたんですけど……。」

あつ、と思わず気が付いた。疲れのあまりに周りが見えていなかった。

開きなおすと照れたのか、思わず微笑んでしまう。

きつとこの少年は、声を掛けづらかったのだろうか、

「……くく……いや、これは……色々と疲れていたからなあ、全然気づかなかった。」

「いやあ、それは僕も同じで…」

と、少年が赤面しながら同情し照れている。その仕種が何とも愛らしくみえた。

と、少年の腕を見つめると、右手には同じ腕輪がはめられていた。

「…お前も私と同じ審査を受けたばっかか？」

「あ、そうなんです。アレは、凄く痛かったですけど…。あ、そうだ。あなたの神機ってどんなのでした？」

「え、どんなのって…どういうの？」

「…知らないですか…。えーと、大まかに纏めるとしたら…剣と銃のどちらかです。」

あゝ、と呟いて考えてみると、あの神機は外見からして剣しか見えなかった。最も塚に銃が着いているのは気になるが一応置いといた。

「…剣かな？」

「ああ、僕も同じです。僕のは、小回りが効く「ショートブレード」ですが…」

また別の単語が少年の口から浮かんた。剣だけでも種類は多いのか。と、頭の中ではまた神機の興味が沸いてきたが、今はあの激痛が思い出しそうなのであえて会話に出さなかったが。

「…そうだ、お前、何て言う？」

「ああ、すみません…自己紹介がまだでしたね？」

少年が慌てながらケイトに向け崩れていた姿勢を正し、

「アスカ・アーワルツです。貴方と同じ、今日神機使いになったばかりです。」

「私はケイト・ローデンバーグ。よろしく！」

> i 3 2 6 4 8 — 3 0 8 6 <

互いに自己紹介すると、あつと手をポン、と打ち気づく。自分が前よりアスカがここにいたことは…

「ん？てことは…お前が私よりここにいたとすると…一瞬だけ先輩でことになるな！よろしく、アスカ先輩！」

「じよ、冗談はやめてください…、ケイトさん…！」

ケイトが肩を叩き、アスカが痛そうにしながら困る。

いつの間にか二人は、仲の良いじゃれあう兄弟のように仲良くなっていた。

ケイトが豪快に笑いながらも、アスカは困りながらも笑顔になっていた。

といっても、一方的にケイトから攻め、アスカは巻き込まれて困

っているだけだが。

二人は、この死と隣り合わせの過酷な戦場の前に友人が出来たのを、知らずの内に喜んでいた。

だが、そのひと時の空気は一瞬で幕を失せた。

コツ、コツと革靴の音がケイトとアスカに近づいていたのを、じやれあい続ける二人はまだ気づいてない。周囲の神機使いと科学者、技術者がこの世の終わりでもおどずれそうな形相を浮かべながらその音の主に道を譲り開けている。

そして二人の前にそれは止まると、そのままならぬ恐ろしい気配でようやく気づく。

「立て。」

「え？」

「あ……」

「…立てと言っている。とつと立たんかあ！小僧共！！」

怒号にも近い権勢の声がじゃれている二人に怒鳴った。二人は思わずソファアから離れ、背筋をピンと伸ばして正した。

「このひよっこ共が…。まあ良い。」

フン、と鼻を鳴らし、ぶら下げ、手に持っていた指し棒を片方の手の中に収めた。いや、叩いてるのか。その音が鞭打ちに近く、二

人は更に背筋を上げた。

「今日は予定が詰まってるから、完結に済まずぞ。俺の名は「アウグステーン・ヴァハター」。今日からお前達の教育担当だ。」

その睨みだけで周りの神機使いが後を退いた。中には邪眼しながらエントランスを去る人も少なくとも無い。

「特に、ケイト…て言っただな？お前は今すぐにラボラトリにあるベラル博士の研究室まで来い。メディカルチェックを受けてもらうからな。」

「え、なん…」

「俺の命令が、聞けないのか？（ギロ）」

「…イイエ。」

「よろしい。良いか？俺の命令には絶対服従。俺に逆らえば、アラガミの餌になる覚悟があると見なして、即捨てていくからな。」

（残忍だ…この人…！）

心の中でケイトは呟いた。

アウグステーンに一礼を済まし、アイコンタクトでアスカとこの場で分かれた。ささつと指示通りにエントランスの上部にあるエレベーターに駆け足で向かい、振り向く間もなく乗り込んだ。

尚、エレベーターに乗り込んでからアスカは自分の番ではと質問

するが、閃光の睨みで震えながらソファーに待機していたとか。

それからどこまで続いたのか、急速に地下に降りるエレベーターは振動を上げずに停止した。

『B - 45、ラボラトリ』

アナウンスが鳴ると同時にエレベーターの扉が開き、目的のラボラトリに到着した。

十字架の通路になっていて、壁はどこを見つめて純白で、対象に壁は漆黒に染められて黒になっている。

近くの壁に貼られていたマップ表だと、研究室は真直ぐ進んですぐだったので、ケイトは見慣れない通路にそつと足を踏み入れ、そのまま迷うことなく進んだ。

その時、右の医療室からゲートが開き、二人の人物が通路に出てきた。

そして運悪くも丁度ケイトが通り過ぎる直前だったのか、一人の男性がケイトに気づかずドン、と体がぶつかり、男は転んでしまった。

「いたたたた…」

「ああ、すみません！大丈夫でしたか？」

「いや、だいじょうぶ…！？」

謝ろうとした手を差し伸べたケイトに、男性は気づいた。一方のケイトは男性の反応に頭を傾ける。

「エルフ、コイツか…」

「はい、間違いないです。」

ガン

男性が立ち上がったと同時に、女性は近寄った。が、女性は初対面のケイトに突然眼を飛ばしてきた。

予期せぬ展開にケイトは何のことが、立ち往生していた。口だけわずかに笑いのフリを残しながら。

そして話は冒頭に戻る…

D a s n ? c h s t e M a l 「ドイツ支部」

第13章 悲痛なる適合検査（後書き）

「LINK」の豆知識？

何故ケイトの腕輪が左腕だったのか？

ドイツ支部独自方針で、神機使いが腕輪での神機制御を最大限に高める為に「聞き手による腕輪の制御」の提案を実際に行った。結果として高い制御効果を残し、今も続いている。ついでにサムは腕輪も左腕に装着。現時点で左腕に腕輪を付けているのは、ケイトとサムのみ。

この先もボチボチとオリ設定を漏らしてあげます。

第14章 ドイツ支部（前書き）

キラ、クリストファー、そしてベラル。本部からの使者とドイツ支部優秀の技術者の3人で、新型神機使い実戦投与のための計画が行われようとしていた――。

第14章 ドイツ支部

前回と変わらず、ラボラトリの廊下。

研究室、医療室などの各専門の部屋が設けているだけで後はいたって何もない。

だが、今この空間に、とても重たく、不穏な空気が廊下を漂っていた。

研究室に向かう一本通路に、それが起こった。

ケイトの目の前に二人の白衣を着た職員が道を阻んでいるのかと思う。

だが実際は、ケイトが一步も動けないのは、

片方の黒髪の鋭い睨みをつける、東洋人の女性の方である。

もう片方は、この女性のただならぬ殺気に手がだせない若い青年。

とりあえず事の回避を試みようとしたが

「...あのお、一体、どちらさまで？」

「そんな事も知らずにここに来たのか。」

女性の陰気箆った最初の一言が、逆にケイトにグサツと胸が突き刺さった。

唐突すぎるよ…

「キラさん、ケイトはまだここに来たばかりだから、そんなにきつく言わないでもいいじゃないですか。」

「噂ではここのゴッドイーターも足払った礼の子供だろ？仕事とはいえ、世界最強と歌われたここドイツ支部が、一匹の愚弄のガキに遊ばれるとは、本部の連中も呆れるぞ。」

女性の悪口に右手の拳が動くが、何とか怒りを押さえつけて現状を維持している。

このオバさん、ここが何をしたのか知ってるのか…！？

「ちょ…ちょっと待ってください？…確かにここのゴッドイーターには幾度が関わったのは事実ですが、それはここの居住区民達から彼らの暴行を抑える為に…」

「化け物の言い訳に、聞く耳は無い。」

「！？」

あまりにも人道から外した言葉に驚愕した。

「キラさん！」

「どちらにせよ、ただの人間が、自らを化け物に墜ちに来たからな。このまま檻の中で餌をもらいに待ってる家畜で過ごせば、楽に過ごせたものを…いつの時を見ても、哀れだな。」

皮肉めいた事を呟きながらも、怒りを籠ったまま人を見下す目でケイトを睨む。もちろんケイトも、14の少女。この暴言には耐え切れなかった。いや、耐えるつもりはない。ケイトだけでなく、そこに住んでいる居住区民の苦しみを知らずにけなす人間は、ゴッドイーター以上に許せなかった。

拳銃やナイフは検査に引っかかる為持ってきてはいないが、この歪んだ年魔の悪女に制裁してやろうかと、左手の拳が強く握り締め、殴りかかろうとした。

「この…!」

「ハア——ツクシイ!!」

丁度一步踏み込んだ時に、研究室からとても巨音なクシャミが、通路まで響いた。

あまりの騒音に思わずケイトの殴りは未然に締まり、代わりに勢い余って床にずっこけた。二人は何事なのかと音がした研究室に振り向いた。

と、研究室の扉がスー、と開き、鼻にティッシュをあてて汚く鳴らす本人が出てきた。

「ハア~~~~、スッキリしたでえ。…おろ？」

3人がそこにいた事に気づいたか、さっと吹いたティッシュをポケットにしまうがもう遅い。

「…博士、さすがに失礼ではないか？」

「あらら…こりやはしたないところを見せてもうたな。ま、ええわ。」

コホン、と息をあて乱れたマントと帽子を直すと、キラにニヤリと笑い、

「でもな、キラ。ワイの近くで暴言、何より新人いじめは止めてほしいんやがなあ。」

「ちつ。」

何度も聞いたのか、男性の注意に舌打ちを流す女性。

どうやらさっきの話が聞こえていたのか、本当は最悪の展開を防ぐために妨害したのだろう。最もクシャミの方は偶然に手掛かっていたのだが。

「とにかく、博士。ありがとうございます。」

「オミヤーも男ならしつかりせんか。息子と同じで困ったもんやな。…と、それよりお前さんやな？」

「え、はい。」

気楽な男性に指図されるも、咄嗟に姿勢を正して返事をする。

「ここでの立ち話も変やし、とりあえずワイの部屋に来い。オミヤー達もや。」

「分かりました、博士。」

「てか、最初からそうして頂いたほうが早いかな。」

「キラ、オミヤーが悪い。」

「ちつ。」

聞こえない範囲でわずかに舌打ちをした後、ケイトに一睨みをしながら全員研究室に入っていく。

とにかく男性のおかげで、一つの最悪の事態を免れた。それには心の中で感謝していた。だが内心、あの女性だけはさっきの暴言を許した訳ではない。

そしてさっきのイタリア風味の男性と日系人の女性がいがみ合っている中で決心していたことを、もう一度心の中で呟いた。

「いつか見返してやる」

そう心の中で誓い、入室に遅れながらも研究室に堂々と入ってきた。

「うわぁ……」

研究室に入ったケイトは、思わず驚きの声を隠せなかった。

「ちょっと汚いが、まあ準備はいつでもOKや。」

「だが博士、その前に、」

「この部屋、あまりにも…」

エルフが途中で区切ったが、それは誰もが言わなくても分かっていた。

そう、汚すぎる。

20畳の範囲の部屋で、中央にはバンドに使われてるドラムセットのような機械にいくつもの画面とそれらと繋げるコードが設置されており、この科学者の仕事に使っているだろう。

周囲には天井まで届く棚の中に機材や資料が整頓に並べているが、中には抜き出したまま戻っていない空欄のところも少しあった。

それだけならまだ良いが、他はあまりにも見てはいられなかった。

床には研究の資材の資料書や裸の女性が映ってるアダルトブックが所々散乱していて歩ける状況ではない。

壁も失敗の跡か、焦げていたり崩れた跡が残ったままでどこにも直しをかけていない。

一般からすれば、まるで廃墟化した部屋の光景か。

または、ゴミ屋敷。

「いやあ、ワイ普段から頭だけで記憶してるから、資料とかあまり目を通さんのや。実験も…」

「例え忙しくて留守にしても、せめて散らかしてる本ぐらい片付けはしろ。子供がいるんだぞ。」

キラの足元に落ちていたアダルトブックを拾いながらベラルにきつく注意した。

特にキラが持つてるこの本だけはまだ幼い少女であるケイトにとっては色々和不味すぎる。

「とにかく事を終えたら、今日中に片付ける。しばらくは本部や他の支部からの人間がここを滞在するからな。」

「さすがにこれを見られたら、不味いですから。」

「うゝむ、お前ら揃って…。わーたつて。後でちゃんと片付けとくから。」

とつても面倒臭そうに顔を歪めながら、事を承知した。しかし本気でやるのかは怪しいが反応だったが。キラもその態度には頭を抱えた。

「後で旧世代の極東に残ってあった「片付けの魔法」を読ませなければ駄目だな…。さて、」

女性が入り口前に立っているケイトに振り向く。二人の男性も同

時に振り向いた。

と、イタリア風味の男性がケイトの前に出ると、ぱっと両手を広げた。

ようこそ

「改めて、Benvenuto！我がフェンリルドイツ支部へ！」

悪意がどこにも無い満喫な笑みを浮かべこの場を歓迎した。

「ワイの名は「ベラル・ベラマツチャ・カルーゾ」。見ての通りイタリア出身のおじさんやが、ここにドイツ支部アラガミ技術開発の統括責任者でもあり、技術長や。」

「「安堂 キラ」。本部所属の管理長。」

「「クリストファー・E・ティファート」。本部に所属してる、新人の衛生員です。」

一通り自己紹介を終え、ケイトも自己紹介しようかとしたが、

「その必要は無いで。最近フェンリル内で話題になってる、かの「ケイト・ローデンバーグ」やろ？」

読まれて察したのかと思われる笑みをするベラルに、少し照れながらもケイトは内心「目立ちすぎかー？」と呟く。

と、本来この場にいるはずの人物がいないことに気づく。

「あれ、支部長は？」

「ああ、適合検査でオミヤーの凄まじい迫力で今自室のベットで失神中や。代わりにワイが全部説明しとくからあ。」

「思えば相変わらず情け無い支部長だな。」

この時だけ、ベラルとキラの思考が一致したのか、二人共支部長の気弱さに頷いた。

「それは後として、知っての通り、ここはゴッドイーターがアラガミと戦い続ける為の拠点、「フェンリル」や。世界各地で支部を建てているが、ここドイツ支部は他と違って優秀な人材が集うことから最高峰の支部なんやで。」

延々とベラルはフェンリル、ドイツ支部に関しての説明を続けた。

ドイツ支部。

フェンリルがオラクル技術で一氣にアラガミに対抗する戦力を拡大する中、他の支部より独自の技術の発展と優秀な人材が豊富な、最高峰の支部である。

2057年に創設してから今までアラガミから常に生存率を求めた議論が続けてきた結果で、世界最高の技術と人員に優れた支部と知られている。

その成果から、本部とは直接供給の同盟を結び、各国から優秀な技術と人材の提供を条件に、フェンリルにとっては命綱の本部の防衛ラインに任されている。

特に一番に関係していたのはベラルだ。

ベラルは元イタリア支部で技術員をやっていたが、彼のセンスと長年の神機の研究の努力で、予想外にもかの有名なゴッドイーターを作り出した天才「スターゲイザー」や、いくつもの博士号を持つ研究者「北の賢者」と肩を並ぶ程の成果を得た。そこに目をつけた本部は、今後の防衛と本部の技術開発共同の為にドイツ支部の転属を任命し、今やドイツ支部の技術発展の元となった。

特に彼が開発した神機は、ベラル以外修復どころが、直すことは

「そしてここは、ワイ専用の仕事部屋の研究室や。ここでワイは色々…」

「あー、ちょっと待って下さい。」

と、長話に聞き飽きたのか、眼鏡を整い直しながら事を止める。

「ワイに質問するんなら、手をあげてハッキリと言っ！」

「…ハイ、質問!!」

思い切った裏声で手を上げた。クリストファーは「くす」と漏らす、キラの眼光で黙り込んだ。

中でも、ベラルは真正面に向いているにも関わらず、既にお口は爆笑寸前までヒクヒクと堪えていた。

（絶対いじめだろ、これ…?）

キラの眼光で何とか笑い耐え、ケイトに姿勢を向き直した。

「ププ…で、ホイ、何や？」

「さっきの説明から聞いて思ったんですが…そこのお二人は確か「本部」に所属してるんでしょう？何故わざわざここ、ドイツ支部に来てるんですか？」

ああー、言い忘れた！と顔を出しながら手をポン、と叩いた。一方キラは当然だと侮辱した眼差しでケイトに睨みをいれる。

「本当に知らない、それ以前に、気づいてないのか？」

呆れた表情でケイトに睨むキラ。

むっと口をへの字に曲げるか、「まあまあ」とベラルが止めに入った。

「来たばかりで突然そんなこと言われても、何も知りません！」

「キラさん、ここは彼女の言うとおりです。」

「せっかくなし、教えてやれや。今日という日は、コイツがメインの祝祭やからな。」

「メイン…？」

その言葉を聞き取り、少し疑問が晴れた。考えられるのは、自分はその神機使いではないのか、と考えている。

「…いいだろう、質問どおりに答えてやる。」

腕を組み、ケイトに近づく。キラから発する威圧感が、わずかにケイトの体を身震わせるが、恐れを動じない。

「…お前は、世界初の「新型神機使い」だからだ。」

「え？またそれ？」

前にも聞いた言葉に、理解が出来ない。だが、もしかしてと脳裏で思い込む前にベラルが帽子を取り、

「その名の通りやって。おみゃーは、初めて選抜された新世代の神機使い、て訳や。」

「新しい世代？」

その単語に頭を傾けた。新しいってことは、ここの神機使いとはどこか違うところを持っているのか、そう解釈をしていた。

「そう、君は今までの神機使いと違い、本部とベラルさんが共同開発を続け、ようやく完成した新しい要素を取り込んだ神機を使える、実用型の新型なんだ。」

「しかし、完成した直後に本部で適合者を探したがいなかった。そこで世界中に視野を広げて調査を回してみたら、…一人おった。ソイツが、ここドイツ支部出身のおみゃーのことや。」

のんきに愛用のハットをクルクルと回し続け、その指で帽子を飛

ばす。フワフワとゆっくりベラルの頭にすっぽりと嵌っていた頃には両手で「ゲツチュ！」のポーズでケイトを向けていた。

背後のキラに「ふざけるな」と睨まれながらも気にしていない。無駄だと悟ったのか、キラは更に続きを述べた。

「本来なら即本部に連れて幾つかテストをしてみたかったんだが、過去の失敗からドイツ支部に我々の意見を通してくれなかった。だから、臨時で私達が赴いたわけだ。」

「そう、つまり僕達は、君の活躍を記録する、お世話係だね。」

「世話!？」

「そうだ。私達がここに赴いたのも、全ては本部の重要命令で以前の経験を「監視」に来ているに過ぎない。」

「だからここに呼んだのは、その紹介と予定のお知らせ、て訳や。」

いつの間にか、ご自慢のちょび髭を整っているベラルがソファアに座っていた。

しかしこれでハッキリした。

ここに来てからの疑問は、自分が偶然にもフェンリルの新たな戦力、「新型神機使い」に選ばれていたただだった。

しかしフェンリルにとってはビッグニュースで、それを聞き入れた各国の支部の科学者は新型神機使いを見に来たり、研究をする為

にドイツ支部に集まってきたのだ。

つまりあの時の眼差しは、居住区民を傷める神機使いを懲らしめるケイトではなく、世界初の新型神機使いのケイト・ローデンバークを見ていただけのことだった。

それだけの一大事なら、本部どころが世界中の科学者達が黙ってられないはずだ。

「…な、成程。」

「ま、そんな難しいことは考えなくてもええで。今日はただの適合検査と、メディカルチェックを受けるだけやから、安心しとき。」

「詳しくは明日になってからだ。午前6時には起床、スケジュールはその時に話す。以上だ。」

「博士、後は頼みます。」

後の事をベラルに「任しとき！」と親指をグツと立て返す。クリストファーは軽くオジキをした後に、キラと共に研究室から出た。

適合検査は除外に、ケイトはホツと安心の溜め息を漏らす。が、未だに体は緊張してて固まっている

だが、

「この妖怪山姥。べーーーーー！」

大の大人がするとは思えない、子供のようにはしたなく舌を出し

てベロベロと振り回す。

同時にケイトは同感していた。キラにはあの暴言から既に嫌っていたのだが、ベラルの子供みたいな 反応には

「たく、うるさいやつचना…のう？面倒な奴だと思ってるやろ？」

「え？ハハハ…まあ、別に慣れていきますから…。」

これではどちらか年上で子供か、その呆れさを隠すように何とか作り笑いで誤魔化した。

「ま、細けえことは気にすんな。キラは神機使いには厳しい評判だけやからな。」

「…それって警告を示しているのですか？」

それはどう考えても気休めにもならないことを言ってるのかと、突っ込む。

「それより、とつくにチェックの準備できとるからとつとそここのベットに横たわっておけや。」

気にしていないのか、ケイトに指摘しながらも中央の機会の椅子に座り込み機械の休眠状態を解除し、メデイカルチェックの準備を取り掛かった。

しかしどこにもベットがない。それを察したのか、機械のパネルの一つをポチッと押した。

すると、どこからか部屋中を響かせる鈍い音と共に、天井が開きだし、その中からチェーンに吊られたベットがケイトがいるところに降りてきた。

思わぬ仕掛けに驚きながら場所を空け、ズズン…と降りたベットにゆっくりと横にした。だがまだ体の緊張感が走っているせいか、ピンと背筋と腕足を伸ばしたままに固まっている。

「なあゝに、別に解剖とかせえへんで。興味ないし気持ち悪いし。ただ明日までグッスリ眠ってもらっただけや。」

「はあ…」

ベラルの優しい笑みからか、特に何もしなさそうだと判断し、体を楽に仰向けに広げた。

「だいたい…10000秒で済みますから、それまではゆっくりと夢の国に楽しんでえや。明日は厳しいど〜。」

そう言い終わった後に、ベットの枕元からマジックハンドがケイトの顔まで出ると、スプレーを噴出した。

と、たちまち眠気が誘い出し、やがてはケイトをベラルの言うとおりに、夢の世界に招かれた。

（この先、一体どうなるんだろう…。）

そう呟きを残しながら。

第14章 ドイツ支部（後書き）

次回、そろそろ第1部隊のメンツが出ます。出ますよ！

ええ！

序章以外ろくに、いや全然出番をこの5ヶ月間一切出さなくて、
本当御免なさい！押絵まで出してあげたのに！

第15章 実戦訓練（前書き）

いよいよ始まった新型神機使いの訓練。同時期、サム達第1部隊に、教官からある重要な件を告げられた――。

第15章 実戦訓練

ピピピピピピピピピピ！

「…うん…」

ベットの上に赤い毛布をしいて眠っていた少女、ケイトの眠りを呼び覚ます目覚ましの音がセットされた時刻に鳴り出した。

まだ眠り足りないのか、毛布に頭を潜りながら片手だけ出して目覚ましの音源を手探りで探すか、どこにもない。仕方なくしぶしぶと毛布から体をだした。黄褐色の髪は寝癖でボサボサになり、いつの間にか服はピンクの色に白模様のブチがいくつかプリントアウトされているパジャマに着替えされていた。まだ寝ぼけているのか、頭がボーっとして何も考えられない。とりあえずベットに腰を落としながら周りを探るが、視界がぼやけて何も見えない。

これは寝ぼけているのではなく、眼鏡をかけていないだけ。ケイトは極端に視力が低く、眼鏡がなければまともに見ることはほぼ不可能で、何もできない。

しかし、目覚ましの音が近いから、そこに眼をこすりながら振り向くと、ベットの近くに置いてある3cm程の木材の丸いテーブルの上に、眼鏡と目覚まし時計が置かれていた。とりあえず体をベットから起こし、目覚まし時計のアラームを止め、眼鏡をかける。が、視野と眼鏡のピントが合わず、視界がずれている。

「あ、ずれてる…」

ふと気づいてかけ直すと、ぼやけていた視界がようやくハッキリと見えるようになった。

「やっぱこれがないや、何も始まらないよな」

当たり前のように満足し、これがケイトの1日の始まり。そして気づく。

ここはどこなのかと。

眠らされる前はベラルの研究室にいたはずか、気づけば知らない部屋に移されていたらしい。

ベット、ソファア、タンス、キッチン、冷蔵庫、ダイニングテーブル、そして今いるベットの近くに設置している…赤い変な機械。

一見すれば、生活にも活用した部屋だが、ここはどこなのがまるっきり記憶に無い。ハッと気づき目覚まし時計を持ってみると、日にちには「2:16」と示している。既に1日が経っていたことを改めて実感した。あの朝早くからフェンリルに入っただけから、

「…夢、じゃなかったなあ…。」

ふと、そう呟いた。昨日は…初めてゴッドイーターとして生まれ変わったのだと。

たった14の少女が、人類を救う命がけの戦力、「神機使い」になったなど、我ながら未だに信じきれなかった。まるで夢かと思っていたが、違う。現実だ。

そう頭の中で言いつけてるうちに、ベットの下の床に置いてあるスリッパに履きトコトコとキッチンに向かう。

キッチンの蛇口を捻り、新鮮な水が流れるのを確認すると、両手につけ顔を洗う。3回続けてからようやく眠気がとれたのか、意識がハッキリとした。

「ん？」

と、何かとつても重要なことを忘れていた気がした。それも、昨日に。

「え……と、」

ゆっくりと記憶をイメージしながら辿っていく。時刻、テレビ、番組、そして……

「し、しまったあ!!」

気づいた途端、頭を両手で抱えながら世界の終わりを迎えた形相をし、叫んだ。そう……

「昨日のバガラー、観るのを忘れてたああああッ!!くそおおおお! 一生後悔する不覚をしてしまったああああああ——ッ!——!」

『いいからとつと来い、この馬鹿か!!』

天井からキラのアナウンスが流れてるのを気づかずに、ケイトはその場であたふかせながら、魂が抜けた死人のように、立ち往生し

たまま呆然としていた。

「…ゴメンって言うてるじゃないか…。」

『寝坊するお前が悪い。』

あれからキラが作成したスケジュールの予定に遅れそうになりドタバタで急いでここに辿り着いてきた。昨日着ていた上着やジーンズの私服に着替え、目の前にある機械の台の上に置いてあった神機を乱暴に手に持ち、ギリギリ準備は完了。その場にはケイト一人だけで、昨日適合検査を行った、トレーニングルームだ。

あの適合検査の場所だから、どうも良い気分がしない。ここに来ると、左手の感覚がそれを思い出させ、身の肌がよぎる。そのケイトを見守るように天井近くにルームを一環できる視察部屋から、キラ、エルフ、そしてベラルが眺めていた。

『まあまあ、キラ。彼女はまだ新人だし、今日だけは許してやって
も良いんじゃないかな?』

『その甘やかした態度が、我がフェンリルの貴重な神機使いを弱体化させるのを気づかないのか。一切の無駄は許さん。特に新型は。』

不機嫌のキラにクリストファーは何とか宥めるが、むしろキラの眉をしかねるばかり。クリストファーはキラの不機嫌な睨みで後ろにコソコソと退いた。

一方のベラルは二人のやり取りに目をいれずにソファアでご機嫌眺めながら自作のノートパソコンでプログラムのセッティングを完了した。セッティングを終えたベラルを見計らって、キラは問いかけた。

「それより、ベラル。昨日のチェックの結果は？」

「ああ、アレか。ケイトと神機との適合率は、50%。ここの神機使いの適合率の平均より低い方や。いくら最初だからって特別な出来事など、いきなり起こるもんやないで。」

「そうか…。」

わずかな期待がそれたのか腕を組んだが、明らかに失望した顔をしていた。キラ本人はせっかくの新型がこんなに低い適合率だったとは、ショックを受けているらしい。

「だがな、せっかく見つかった貴重な新型や。初めは焦らずに、大事に育ててやれば、きっとええ結果を出してくれるって。」

そんなキラを、ベラルはいつものお調子者な様子でフォローをした。不機嫌な表情をしていたキラの口元が、見えにくかったがフと上に逸らしていた。

が、それはすぐに解消し、近くのマイクホンに手をあてた。

『さて、待たせたな。』

一方のケイトも、どれぐらい待たされたのか少し気を紛らしに神

機を振り回していたが、冷静なキラのアナウンスに背筋をピンと伸ばし、正した。

『これより、プログラムN O . 1、新型神機使いの基礎訓練を始める。準備は整っているな?』

「あゝ、まだ…」

『その前にプログラムのことだが』

「無視か!?」

ケイトは突っ込むが、キラは無視し

『お前は世界に置いてはまだ前例のない「実戦型可変式神機使い」の記念すべき第1号だ。もちろんどの支部でも可変式神機使いのデータや要員などいない。そこで、』

キラは手元を持っていたファイルを取り出し説明をした。

『我々フェンリル本部は後の新型神機使いの為に、お前の行動、戦闘、状態の全てをデータに採取するためにいくつかのプログラムを用意してもらった。お前は、我々のプログラムに沿って行動し、我々は24時間体制でその結果をデータとして保存しておくということだ。』

「つまり、そのプログラム通りにこなせばいいってことなのか?」

『頭の回転は速いものだな、そういうことだ。ただし、状況によっては例外も含まれる。』

『ついでに僕達は、』

キラのアイコンタクトでクリストファーがマイクホンに声をあてる。

『僕、クリストファーは衛生とカウンセラー、ベラルさんは君の神機の整備、教育を。キラさんはその全面管理を担当している。特に僕とキラさんは、万が一の為に常に24時間体制に整っているから心配はしないでね。』

「そうか……て、待て。「24時間体制」って？」

クリストファーやキラが何気に言ってた「24時間体制」の言葉に不安感を感じた。

『そのままだ。我々、特に管理担当の私はお前の行動を全て管理させてもらうだけだ。』

「……うおい！？ちよつと待て！！」

率直に疑問をサラッと答えるキラに、ケイトは焦りを隠せなかった。

「いくらなんでもプライバシー侵害じゃないかよ！」

24時間、つまり仕事だけでなく自分の自由な時間さえもこの女、キラに見られていることになるのだ。一見すればストーカー行為で、誰でも否定されるのは当然だ。

本来なら警察や裁判に訴え罰を与えるに値するのだが、もちろん現代はそんな機関は存在しない。変わりにフェンリルしかないが、

『これは本部の命令だ。疑問があるなら本部に直接言うことだな。最も、私の前似疑問は無いと思えんがな…』

キラ達もまた、フェンリル本部の命で仕事に來ているに過ぎない。それが人害に値する行為としても、全うされなければならなかったのだ。

「全部本部の命令だから許されると思ってるのか…。」

『全ては新型神機使いのデータ摂取の為だ。それより、説明は理解したな？』

「…まあな。」

ムスッとふくらみながら冷たく返事を返した。と、

「！？」

何かの気配を感じた。と同時に突然ケイトの背後に迫ってくるように襲い掛かってきた！間一髪にも体が反射してジャンプでかわす。ただのジャンプではなく、常人なら簡単に達するのは難関の2mを超えていた。神機使いになったことで大幅に身体能力が上昇したからだ。その場で着地した同時に後ろを振り向くと、それは見たことがあった得体だった。

「コイツは……！？」

それは数日前に居住区を、人間を貪りに襲ったアラガミ、「オウガティル」……を模したものだ。

本物と違い、オウガティルの全身が無効拓な輝きを放つ金属に覆われ、まるで鉄の塊が生を宿しているかのように動いてる。今トレーニングルームのライトをほとんど消し暗闇にすれば本物と見間違えるほどだ。

『安心しろ。これはトレーニング用にモジュールした「擬似アラガミ」だ。決してお前を殺しはしない。』

キラの落ち着いた説得により、高まった心拍を何とか一安心して落ち着かせた。

『どうやら反射神経は高いらしいが、仮に実戦ならしたら、とつくに死んでいるはずだ。』

「え、何で？」

『手を見ても。』

キラの言うとおりに自分の手を見ると、さっきまで持っていた神機を無くしていた。それに気づき探すと、オウガティルの後ろにピクピクと痙攣しながら神機が落ちていた。

『神機使いがアラガミに囲まれた戦場で神機を離すとは、自分の命綱を自ら捨てたのと同じだ。これからは、いかなる状況に置いても絶対に離さないことだな。』

単なる嫌がらせなのか、キラは無表情に、眼だけがケイトを化け

物に見下ろしながら忠告した。

近くのクリストファーも「やりすぎ」ではと止めに入ろうとしたが、逆にベラルがクリストファーを止め、首を横に振る。そしてキラの忠告には続きがあった。

『死にたくなかったらとつとと拾え。』

たった一言に、ケイトには重く響いた。とてもじゃないが、重いプレッシャーが押し掛かった感じが、一気に頭の中で繰り返しにしてくく回りこんでいる。

その場で佇むオウガテイルを慎重に見つめながらゆっくりと進んだ。

もちろんそれはアラガミを模したトレーニング用だから襲ってくる訳がないのは分かっている。ただ、キラの忠告がどうしても頭の中に繰り返して響いている。

（死にたくなかったらとつとと拾え。）

それがどうしても重く、身の毛がよだった。果たしてそれが何の意味を表すのかはまだ分からない。そして、わずかに震える手で神機を拾う。

『よし。』

確認をした後、片手に持っているファイルを開き、今時の始まりをキラの口から告げた。

『では改めて、これよりプログラムN o . 1、新型神機使いの基礎訓練を始める。……覚悟はいいな?』

「ふああああ……」

大あくびで腕を伸ばしながら堂々とエントランスに足を踏み入れるサム。その大あくびで周囲の外野は何だと首を振り向くが、サムは一切気にしてない。

まだ寝足りないのか腕を軽く2 3回振り回しながら歩き、そのままソファーに力なくドツと倒れこむ。しかしその先客が既にソファーに座っていたことを、サムは気づいていなかった。

「またサムか……」

「……よお、お前ら。」

丁度サムの顔面の真上に、黒く長い髪をおさげで抑え、緑の軍服を着た鋭い視線を持つ青年「ロン・リー」が呆れたように見下ろす。

「あゝ、サムさん……」

「ん?」

「その……ソファー……」

自身の身長を超えるほどのポリウム感をしている金色が煌めかせている、優雅な衣装を纏った少女「クララ・シュワルツ」がサムの背中に指を指している。

と、サムが倒れこんでいるところの下には、丁度青年が仰向けになっっている腹部が押し倒していた。外から見れば、サムが仰向けになっっていた青年をドロップしてる体制だ。サムの重量な体重で失神しかけているが、手だけサムの背中に苦しみながら叩き続けている。その感触に気づき、サムはめんどくさそうに筋肉の体を動かした。

「……ハア……ヒイ……何すんだよ…ゲホ…。」

「んだよ、いたのか？そんなところであお向けになっただら、見えなくてまどろっこしいってーの。」

「絶対ワザとだろ！？」

灼熱の炎に刻まれた蒼穹のマントを纏い、ワイルドに爆発した銀髪が目立つ、「ロンメル・メテオマン」が生死の境から突然蘇るように突っ込む。

互いに知り合いのように口を交わす彼らだが、彼らは全員、ドイツ支部から離れた外部エリアのアラガミ掃討を担当する主力部隊、「第1部隊」だ。隊長のサム、強襲兵のリー、狙撃兵のロンメル、そして衛生兵のクララなど、役割を分担しているが単身でもその実力は支部内でトップクラスを誇る。と同時に非公開だが、世界の各支部でもベスト3の功績に残されている、強者揃いの部隊でもある。

その功績からか、ほとんどが単身で任務を受中してこなしたり、他の部隊の任務の手伝いをするなど、顔を合わす機会があまり無い

ほど忙しいのが彼らの日常。その毎日を送る中、珍しくも全員がここに顔を合わせるのは果たしていつ以来になるか、隊長のサムは顔こそ出していないが、それを一番に驚いてはいるらしい。

「ふむ…。で、珍しく全員ここに集まってるてことは、何が合ったのか？」

「さあな…。て、お前も上司から呼ばれてここに来てるんだろ？」

「知らん。忙しくて聞きそびれた。」

キツパリと事を言い切ると、リーとロンメルは呆るが、

「何でも…昨日新しく来た新人さんとの顔合わせらしそうです。」

代わりに一番の気前が利きすぎるクララはサムに繰り返しに招集の理由を述べた。と、サムのだらけた表情が変わり、

「新人？ガキ二人か？」

「かもな。……あ、そういえばその内の一人だが……知ってと思うが今注目になってる「新型」だったよな？」

「新型あ？……ああ、例のベラルのおっさんが開発した、変形やらどうかの変な神機のことか？」

わずかだが、新型と単語にサムは眼を細める。しかしロンメルは気づかずに話を続け

「それだけじゃないぜ。新型に適合した奴は、うちの支部だけだぜ。

他の支部がまだ適合者がいないって事は、当分の間ワンサカと集まってくると思うぜ！お偉い学者達がな。」

「それは……うつつしいな。」

ロンメルの情報に、サムはとつてもありがた無くないように繭を曲げていた。

「だがな、新型が来たことぐらい、どうってことはないな。何故なら……」

フフン、と自慢げに鼻を鳴らすと、彼の青いマントをバサッと広げ、

「このいずれは世界に伝説をつくる英雄になる男、「射撃王のロンメル」様がここにいる限りは、まず注目を浴びるのは真っ先にオレで」

「相変わらずだな、貴様ら。」

「お、ヴァハターのドS。」

「黙れ、無駄に美筋肉ダルマー！」

「お久しぶりです、アウグスティーン教官。」

「……フン。」

「ちょ、英雄を無視すんなって何度言えば分かるの！？」

ロンメル以外サム達の前に来たヴァハターに向き、完全に自分の伝説口をほざくロンメルをガン無視。

「バカは放つといて……よく集まったな。」

「んだよ、新人の顔合わせだけで俺らを招集する必要あんのか、ドMS。」

「待ってください、サムさん。今年のドイツ支部は方針の改善をしたことを忘れたのですか？きつと今まで顔さえ合わせることもなかった新人さんとの友好関係な仲を築く処置をすることでしょう……そうですよ、教官！？」

この召集に一番に楽しみにしてるクララ本人が、跳びついた。前に出すぎたのか、丁度アウグステインと眼と鼻の先で、クララの穢れない瞳が目に入り思わずアウグステインは後ろに退きながら顔を赤めた。それに気づいたクララはハツと口に両手をあて、アウグステインと離れた。自分のはしたない行為に辱めを覚えながら後ろに向いてしまう。

その光景に、サムは子供のようにニヤケ、ロンメルは更に敵意の睨みを増し、リーは興味無さそうに髪型を整えなおしているが。

咄嗟にアウグステインはクララに掴まれた後の皺を取り直し、コホンと息を吹き返し、改めて用件を述べた。

「……まあ、そうだな。確かにサムの言うとおりでもあるが、これは支部長から、いや、本部からの命令だ。」

「本部！？」

「こりゃあ何でまた？」

ロンメルとクララは驚き、リーは眉をピクッと揺れ、サムは落着いた態度で訳をといた。まさかフェンリル本部からの命令とは、誰も予想はしなかった事態だ。それならこの召集も意味はありそうなのかと、クララは結論を導いた。しかしアウグスティーンの本部からの命令には続きがあった。

「……いいか、これは本部からの重要な命令だ……。お前達第1部隊に」
サム以外の3人は真剣にアウグスティーンの話を聞き取っている。一瞬アウグスティーンは口を止めたが、僅かの間を空けてから、結論を、静かに出した。

「世界初の新型神機使いの適合者、「ケイト・ローデンバーグ」を所属させる。」

> i 3 4 1 4 7 — 3 0 8 6 <

『準備は良いな？』

「ああ。……何となくだけだな。」

『……まあいい、ではいくぞ。ベラル。』

『ほいな。』

キラの合図と共に、ベラルのノートパソコンにアクセスを完了すると、ケイトの前に立ち往生していた訓練用オウガテイルが唸りをあげて動き出す。生まれたての生き物に魂を与えている瞬間に近い。

『良いか。今回は実戦を想定とした「肩慣らし」だ。死にはしないが実戦に近い体験を、今のうちから骨の髄まで味わってこい。』

『心配せんとも、ワイ特製の神機の装備なら、コイツぐらいは軽く逝てまうで。』

調子の良いベラルがケイトに言うが、本人はとりあえず緊張感解しに体を揺らして聞いていないが。

ケイトの装備は、サバイバルナイフを模した小柄な刀身「サバイバーエッジ」、アーマーを装着しマグナムの容姿をしている大型の銃身「リボルバー」、鏡のような光沢感を持つ盾「シュピーゲル」。類としては「ショートブレード」、「ブラスト」、「シールド」。どれも旧式だが、ベラルがケイトの適合の際に改良したので、若干ながら性能は上がっている。

『じゃ、いつてらっしゃいなあ〜』。

と、オウガテイルの強靱な足が、ズンッと一歩踏み出した。そしてオウガテイルはケイトに向かって咆哮し、牙をむき出しにして走り出す。

ズン、ズンとケイトの距離を縮めていく。一方のケイトは、迫るオウガテイルに眼をすると突然前進に緊張感が走り、動けなくなる。呼吸も荒げに繰り返す。

どうやらオウガテイルを見て数日前の襲撃を思い出してしまった。あの時は自分から引き受けたとはいえ、そのアラガミの恐ろしさを体感した日でもあり、それを乗り切ってはいない。

（落ち着け……。これは……。、）

眼を閉じ、キラが言ってた「訓練」だと聞きなおしを始める。だがオウガテイルはそんなケイトに待つこともせず、気が付けば既に間近に縮まっていた。

『ゴアアアアアアッ！！！』

本物と機械が混じったオウガテイルの咆哮を上げながら、ケイトに牙を向きだしに噛み付こうとした。

が、咆哮と同時にケイトの目はキツと見開いた。

「ハアッ！！！」

オウガテイルの背面を沿うようにジャンプし噛み付きを、避けた。

オウガテイルの背後に着地するがオウガテイルの尾が刀の様にケイトの体に叩きつけようとす。これも紙一重にステップで避け、距離を開けることに成功した。

尾の手応えがないことに気づきオウガテイルは後ろのケイトに振り向く。一方のケイトは呼吸を少し荒れているが、すぐに深呼吸で整え、そして余裕の笑みを口元に浮かべる。

「残念だが、これで見切らせてもらった。」

一般の新人なら口にする訳もないことを、自信があるように発言した。ケイトは数日前の襲撃に囚となって逃げてはいるが、その時に生き延びたのは、アラガミの行動パターンを目視で確認し、把握していたからだ。その中には目の前の擬似とは違うが、本物のオウガティルがいた。

そして今の行動はオウガティルのパターンをチェックし、行動パターンの完全攻略を計っていたのだ。

だが、所詮「回避」してるだけでは、目の前のオウガティルに何の外傷も、効果も得られる訳ではない。

「……やるしか、ないよな……。」

あまり気が乗り気にならないつつも、等身を超える神機を2、3回と連続に手の中で回転させ、止めた時には神機の刀身を下向きに向けた、「逆手」の構えをした。ケイトは普段からナイフは逆手で持つが、まさかこんな巨大「ナイフ」を逆手にするのは常識では考えられないものだろうと思い、苦笑するが。

「ありえない……か。」

そう呟きながらも、これも神機使いの力だと自己解釈し、今目の前にいるオウガティルに視線を向ける。と、オウガティルもケイトに狙いを定め、尾から一つのニードルが放たれた。

「でも、行くしかない!!」

迫るニードルを右に回転して避け、オウガテイルに向かって駆け出す。オウガテイルは足を下げ、バネのように縮小すると、一気に解放しケイトに飛び掛かる！

しかし、オウガテイルの着地よりケイトの走力が一歩手前だった。ケイトを押し倒そうとしたオウガテイルの着地した時には、左に軌道を変えて回避していた。

「行くぜ！」

不意をついたオウガテイルに、ケイトの神機を一太刀、目に見えない速さで切り裂いた。

しかしオウガテイルに傷こそ負わせたが何とも無かった。刺激に気づいたオウガテイルはケイトに振り向くと同時に噛み付いた。これも何とかギリギリの手前で回避。一旦距離をとったケイトは少し焦ったが、落ち着きを取り戻す。偽者とはいえ、やはり人間と違ってアラガミに神機の一太刀を刻んでも倒せるほど甘くはなかったと実感した。

「一太刀が駄目なら……」

再びオウガテイルに接近を試みる。オウガテイルも尾を振り回して反撃するが、今度は右側に滑り込みで避けまた不意をうつことに成功。今度は油断しないと勢いで、オウガテイルに刀身を4発、連続で切り裂く。今度は少し悲痛の叫びを上げだした。

「効いてる……！」

そう確信するが、その油断が自分の心の「隙」を生んでいたこと

を。オウガテイルが身を掲げてタツクルをするのを気づかなかった。腹部に直撃し床に3回ボールの様にケイトの体がりバウンドで転がっていく。腹を押さえて咳き込むが、大したダメージではない。立ち上がるうとするケイトの隙を狙い、オウガテイルは一気に走りだす。だがケイトの目はまだ死んではいない。

「調子に……乗るなあ!!」

ケイとは神機を、オウガテイルの足に向け何と、投げた!

投げた神機は直進にオウガテイルの右太股に串刺しし、先程と比べものにならない程の悲痛の叫びを上げながらその場で横転した。

すぐさまケイトは立ち上がり、オウガテイルの太股に刺さった神機を強引に抜きだす。本物ではなかったのか特に生苦しい音がしなかったが。動けなくなった獲物、オウガテイルを見下ろすようにケイトは眺める。一瞬戸惑いを感じたが、ケイトは神機を両手に持ち突き刺そうとしたが、

『何をしている、神機を変形させて止めを刺せ。』

「変形?」

突然のキラの指示に中断した。

『やり方は簡単や。変形と命じるだけでええ。やってみ。』

うゝむ、と頭をかくがベラルの言うとおりに、神機を逆手状態に持ち素直に命じた。

フェアヴァンドゥルンク
「変形。」

すると、それは起こった。神機の刀身が一気に収納状態になると、装甲、そして柄の近くに設置してあった銃身が一気にはじき出し、神機から生えた触手が目に捉えられない速さで装備を設置し直し、気づいた時には刀身があつた部位が銃身「リボルバー」に入れ変わっていた。

と、逆手で持っていたのか、神機の重さにバランスを崩し両手で塚、銃身の近くのグリップに持ち直す。

「スゲエ……。」

目の前に起こったことが信じきれないほど心が起こった。だが間を許す時間が与えられる猶予は無い。

さっきまで倒れていたオウガテイルが、立ち直してしまっていた。体がフラフラと揺れているが、まだ闘争心に溢れている。

『引き金を引け。』

「ちっ、言われなくてもなあ……。」

立ち上がったオウガテイルに銃身を向け、引き金を引いた。途端、予め収納していたバレットが銃口から赤いエネルギー弾として放たれ、オウガテイルに直撃すると爆発が起こった。

『グアアアアッ！！！』

オウガテイルの弱点でもある赤いエネルギー、火属性の破砕バレ

ツットで堪らず断末魔を上げ、力なく倒れこんだ。

目標の沈黙を確認すると、ケイトは近づき、死骸を右手で触ってみた。——何ともない。ただの無機質な塊だからか、冷たい感触が感じられなかった。しかしこれが本物だったら……、と考えるとケイトは全身に悪寒を感じた。

『ふむ、とりあえず悪くはない。』

『次からビシビシと行くが、その前として感想を聞いてみるで。』

二人のアナウンスに流れ、ケイトは死骸から手を離し立つと、疲れた表情しながらたったの一言を素直に呟いた。

「疲れるわ……。」

D a s n ? c h s t e M a l 「第1部隊配属」

第15章 実戦訓練（後書き）

LINKの豆知識？

どうやって装備は決まってるのか？

ゲームプレイしてる人は何となく疑問に思ったはず。どうやってリンドウやアリサなどの神機の装備パーツは決められていたのか？ パーツの変更をしてるからだろ、と予想すると思いますが、アリスの小説なども参考に使い続けている神機使いもいなくは無いです。どうしても不思議に思ってしまう私。

そこで独自に、論理的に、妄想して考えてみました。適合者に選ばれた民間人は、適合試験の数日前に「適正審査」というのを必ず受ける必要がある。それを受けて、榊やベラルなどの技術者や研究者などが結果とチェックによってその適合者に見合った装備パーツを神機に取り付けていた。つまり一例として、リンドウが「適正検査」を受け、その結果で「ロングブレード」の「ブラットサージ」を取り付けた、と感じ。

第16章 第1部隊配属（前書き）

ケイトが所属する第1部隊との初対面。その刹那、ケイトは自分を助けてくれた最強のゴッドイーター、サムと再開した――

第16章 第1部隊配属

午後12時、昼休み。

この時間は職員、神機使いにとってはつかの間の休息でそれぞれが自分の時間を過ごしている。

ある者は昼食に食べに行くもの、ある者は恋人と一緒に過ごしたり、ある者はベンチとかでゆっくりと睡眠をとる者など。そして、彼女達もまた、その休息には欠かせずとっていた。

食堂の脇にある自販機コーナーのベンチに一人、手に持ってる缶を持ちながら不思議にその缶に興味深々に座り込んでるケイト。缶のプルトップを指でクイツと引き上げると、中身の飲料水がシュワと溢れだす。しばらくして納まったところで、缶の飲み口に口をあてる。ゴクゴクと半分ぐらい飲み干すと一旦口から缶を離し、プルプルと体が震えだし…

「ふう〜、スツキリしたあッ!」

先程のトレーニングルームでの疲れが一気に吹き飛んだように歓声をあげる。ついでに飲んでいる飲料水は150以上前に生産していた極東産の炭酸水「三矢サイダー」。居住区でも飲むことがない高級輸出品だ。ケイトも水しか飲んでない生活を送っていたのか、口にしたことがない未知な味に理解しなかったが、ケイトには充分過ぎる程満足感が溢れた。

「くそお〜、ここの支部はとっても良い物飲んでるじゃねーか! この極東産の…何とかサイダーは何て上手いんだよ、コンチクショ〜!」

その数センチ離れたところに、食堂のテーブルから大人二人がその様子を眺めながら食事をしていた。

「元気だね。」

「せやな。」

ケイトの元気に周囲の人間は一瞬驚くも、すぐに食事、会話を再開する者もいれば、ケイトに視線を向きながらボソボソと話す者もいるが、サイダーに熱中のケイトは全く気がついてない。

そんなケイトにカルポナーラをフォークで巻き取るベラル、手に持っていた「。野家」と書かれている牛丼をテーブルにひとまず置くクリストファー。

「それにしても、あれだけ体を動かしたのに、もう疲れも吹き飛んだのか…。これも新型の回復力のせいかな？」

「それ以前にやっぱ若いからちゃうん？」

呆れるクリストファーと気楽なベラルが見ながら話している。キラはプログラムのチェックに二人とひとまず別れてここにいないが、尚、食事後のケイトに三矢サイダーを奢ったのは、ベラル本人。どうやらベラルも三矢サイダーがケイト程ではないが、気に入ってるらしいので軽気で誘ったらしいが。

「そうかな…。それにしても、あんなにフェンリルと神機使いを嫌ってたと聞いていたけど、案外そうでも無いのかな？」

「どうかの？確かに敵意は今のところ示しとらんが、まだワイらを許してる感じではなさそうやと思うがな。」

「確かにそうだけど…。でも、本当にそうなのでしょうか？」

「ホオ？何故や。」

「だってもし本当に我々を嫌っていたのなら、ある程度の抵抗感は発してるはずです。だけど…。ケイトさんの場合は、適性検査の時点で自らが望んで神機使いになる決意を示してるですよ。」

「ほえ」。てことは、あやつの故郷、居住区民達を守るために自分

から神機使いになると選んだのかえ？」

「ええ、おそらくは。しかしそれがまさか、我々フェンリルが長期間かけて開発した新型の第1号に選ばれるとは、思いもしませんでした。」

「どっちにしても、ケイトはラッキーな奴や。本部に無理やり連れてこられてあんな拷問みたいな地獄よりはマシやと思うし。」

「ベラルさん。」

途端に、クリストファーはベラルに指を立て注意をかける。ベラルも気楽そうにしながらも、自分の口を咄嗟に手を防ぐ。二人は恐る恐るケイトや周りに視線を向けるが、幸い、誰も聞いてなかったらしい。

（それは我々以外の機密事項だと、前注意したはずですよ！）

（おお、スマンスマン。）

危うく機密情報を漏らすところだったベラルは軽気で誤り、残りわずかのカルボナーラをさっとたいらげる。丁度クリストファーも食事を終え、少し休息をとった。

「ふう。しかし、今度はあやつがフェンリル、これからの新しい神機使いの架け橋になるんや。あやつもそれで結構忙しい目に会うと思うが、ワイらもここで頑張らへんと、いつも怯え暮らしとる居住区民達に申し訳がたんしなあ。」

「そうですね。僕も彼女に気に入ってもらえたら、それこそ医師として」

「私は許さんな。」

と、平穏な空気を読むことなく壊す一言が、容赦なく放つ。コツコツとヒールの底をたてながら歩き、丁度二人の前の席に座り込むキラ。途端にその近くの神機使いは、キラを邪見にしながらも席を離れて去っていく。

「奴の行動を知ってるだろ。」

「ああ、外部居住区民をいたぶった神機使いを外傷1つも付けずに懲らしめたというやろ。それがどうしたんや？」

「それが問題だと言ってるんだ。」

キラの表情に陰しが増す。

「確かに神機使い側が原因だと言うのは既に実証済みだ。しかし、だからこそ、神機使いを敵視してる奴がこの支部に疑いもせずに入るとなれば、きつと居住区民のスパイとして何かをやらかすとは思わないのか？」

「それは考えすぎだよ。彼女だって神機使いの自覚はまだ持つてはいなさそうだけど、人類の存続をかける大事なところくらいは分かっているはずだ。」

「だから、神機使い共には注意を抜くなと言ってるんだ。」

ほんの瞬きの間に、クリストファーの顔にすん止めに指揮棒を指す。クリストファーは引きついた表情にたちながら思わず後ろに引く。

「良いか。奴の事は24時間、私が監視する。もし疑惑な行動を起こせば、すぐ支部長に報道し拘束を与える。」

「ちよい待て。貴重な新型や。あまり罰などを与えると、本部が黙っておらへんと思うで。」

「既に許可は得てる。」

今度はベラルに睨みを付ける。本当なら少し文句を言いたいところだが、本部の命なら仕方ないと判断した顔で黙る。

二人を黙らせたキラの目は、とても人として見てる目ではなく、憎悪に包まれた、人を悪魔としか見てない邪険の目つき。明らかにキラは、神機使いを嫌っている仕種に過ぎないと、ベラルは黙りながらも改めて再確認をした。

「時に神機使いは、私達を裏切る。」

テーブルを叩いていた指揮棒をしまいこみ、二人とは逆の方面に姿勢を向きなおすと、ボソリと、静かに悲しそうに呟いた。

「どんなに新しくても、所詮は化け物だ。」

二人は、その文句を言わずむしろ黙って聞いていた。決して侮辱して怒るほど大したことではない。ただ、二人はそれがキラの過去のトラウマに過ぎなかったことを、理解しているからだ。

「それより、15分後に彼らとエントランスに対面させる。準備を済ませる。」

また二人に向きなおしたときは、もう普段の冷静な鬼の形相に戻っていた。

「分かりました。」

「オミヤーはケイトを呼んどけ。ワイは一応念の為にあいつ等呼び集めとく。」

「遅れるなよ。」

キラがベラルに対する注意が合図か、三人はここで解散し、それぞれの仕事に向かった。

フェンリルの昼休みは、あつという間に過ぎて終わった。

たったの1時間だけだったが、常にアラガミとの戦闘やその支持に備えた彼らにとつては、時間が早くも過ぎるように感じていた。その終了に天井のアナウンスが流れると、エントランスに過ごしていた職員や神機使い達は、一斉に人黙散に仕事に戻っていった。

エントランス2階にケイトとクリストファーを残して。

「あつという間に、終わったな。」

「彼らも忙しいってことさ。」

「てか、それ私も含めるんだろ？これからだけど。」

「ハハ、そうだね。」

冗談良いながらまいったなと頭を傾ける。

「ところで先生は、フェンリルのことをどう思ってるんだ？」

「え、先生って……。新人の僕に何で？」

「まあ……。だってあの邪険扱いするストーカーのオバさんや変なチビおじさんより人が良さそうだし、悪気が無さそうだからかな？」

「それは、少し言い過ぎなのかな？特にキラさんは……。」

「とにかく少しは信頼するって訳だ。で、さっきの質問。」

「ああ、フェンリルのことか……。そうだね。」

ふむ、と口に手を当てながら考え込む。

「僕もフェンリルに入る前までは医学専門学生だったんだ。かつて、極東の島国で患者を助ける為に一人、奮闘していた医者に憧れてね……。僕は世界中で少しでも多くの患者を治す医者になろうと、ロシアの後輩と一緒に勉強に励んでいた。おかげで僕は学生の中で成績がトップにたっていたんだ。」

「へえ、凄いな。」

「そこからのかな。フィンランドのフェンリル本部が僕に召集したのは。僕は喜んで医学チームに入隊し、誠意を尽くすつもりで働いてきた。だけど、確かに君の思う通り、上の命令で不条理や非道なことも行われている。でも、それでも僕達衛生員は、傷ついた神機使い、避難民達を看病することが使命だ。どんな最悪な事態に陥っても、僕は全力で受け止めて助ける。」

それが自分の誇りと心から思い、拳を顔の前まで上げ力をグツと込める。普段のまじめな表情から、まるで理性が高い凜々しい男性のように感じたのは、この時だけだった。

クスッ、とケイトが口に手をあて微笑む。クリストファーは恥ずかしげに拳を降ろそうとするが、ケイトの片方の手が掴んで止めさせた。

「何か、私と似てるな。誰かの為に全力で注ぐって。」

その微笑は、顔から予想しれない、お茶目な男の子らしさが漂っていた、そんな感じだった。

「似てるって？」

「それは……ま、とにかく良いじゃん！アンタ、やっぱ嫌いじゃないぜ。見かけの割には志が強い！気に入ったぜ。」

一瞬照れ隠しの後、普段の男勝りな少女の調子でクリストファーにサムズアップを向ける。

「まあ、悪いことはしないから、安心してくれ。」

参ったな、と口にはしなかったが、自分の誇りをこの少女が認めてくれたのは正直嬉しかった。だからケイトの期待を添えない為に、彼なりに心からサポートすると誓った。と、その時だった。

「ほいな、お待たせなあ。」

そんな楽しげな二人の会話の空気を読まずに呼び出しをかける。クリストファーはおじきをするが、ケイトはベラルの登場に不満げに頬を膨らます。

だが、それはすぐに自ら修正された。代わりにただならぬ緊張感と、見覚えのある再会の脅威がケイトの脳裏を占めた。

ベラルの背後に並ぶ第1部隊の4人が水平にエントランスの階段を上がり、ベラルが二人の前で止まる。

「……ベラル、コイツが例の新人か？」

「へえ。まだ若いじゃん。ま、今じゃ当たり前か。」

「あら、美しいお嬢さんですね。」

「……」

初対面のケイトにそれぞれの印象に口を放つ第1部隊。静かにケイトを見つめる弁箴を巻いた東洋人、暢気そうな口調でケイトに軽口を叩く爆発した銀髪の青年、自分と同じ同姓のケイトの容姿に褒める、ロイヤルヘアーをしたお嬢様らしき女性、そしてただ腕を組みながら首を鳴らし、ケイトと視線を交わそうとしない逆三角形の筋肉質な大男。

そんな彼らを見るケイトは、パフォーマンスか？と心の中で疑問を問うが、全員が腕輪をしてる時点で、同じ神機使いなのだと、改

めて認識し直した。

「紹介するで。今日からオミヤーが配属となる、「第1部隊」や。曲者揃いやが、ま、変な奴ちゃうから安心せい。」

「ベラル…一言余計だけどな！」

「どうでも良い。とつとと済ませろ。」

リーの一言でロンメルは軽く返事をしながらも、ケイトの前に並びだした。

初めに紹介を起こしたのは、一番ウキウキしていた、ケイトと同じ同性のクララ。

「始めまして。私はシュワルツ家の由緒正しき後継者、「クララ・シュワルツ」です。よろしくお願いします。」

「あ、ああ…。よろしく、お願いします…。」

クララの豪華なバリエーションにケイトは少し苦笑しながらも握手を交わす。交わした後にクララは優しい笑みで冷静なリーに向け、舌打ちしながらもリーはケイトに視線を向ける。

「……「ロン・リー」だ。」

たったの一言に、敵意が感じられる程の殺風景が漂い一瞬体がピリピリとしたが、何とか堪える。

「たく、あいつかわらずぶつきらばうだな、リー君は。」

先程の二人とは違い、調子の乗りやすいロンメルは、自慢のマントを片手でバサッとケイトの前に羽ばたかせる。それはどこかカッコ付けたものだが、違和感なく決まっていた。

「いいか、よく覚えとけ！俺様はいずれこのアラガミに支配された時代に置いて伝説の英雄と刻まれて残される男、「ロンメル・メテオマン」様だ！今なら新人のお前に、一生の価値をする俺様のサイ

ンをしてやつても良いんだぜ？」

「いや、今は結構で。」

「何で!？」

あっけなくロンメル宣伝アピールを流すケイト。せっかくの英雄アピールが失敗したせいか、調子が狂ってかつこ悪くこける。

「オミヤーもええ加減進歩せえや」。さて、サム。黙っとらんではよせい。」

「へーへー、わーったよ。」

めんどくさそうに腕を上げながら体を伸ばすサム。途端、ケイトの目つきが突然、鋭く変わった。

「…ん？」

それに真っ先に気づいたのはこけから立ち直ったロンメル。ケイトが彼ら以外にサムに見つめていたのが不思議に思ってたまらない。肝心のサムはケイトの視線に気づいてないのか、邸墮落な態度で紹介をした。

「俺は」…「サム・ヒンデンベルグ」だ。一応ここの第1部隊の隊長をやってる。」

呆気なくやる気のない紹介で終わらせたサム。そりゃあないだろう、と周囲は口に出さないが、呆れた視線をサムに集中的に見つめている。当然、こんな反応を取られた他人、特に新人は、普通に何も言わずに呆れるか、怒るかのどちらかを取るはずなのだが…。

ケイトは、どちらでもない。むしろ、その眼は他の3人とは違い、サムに真剣な顔で見つめたままだ。ケイトにとってはここに来る前からサムの名前は知らなかったが、顔が覚えていた。

ああ、間違いない。やはりコイツだ。あの居住区の襲撃に食われそうになった私を、助け出し、求めていたものを導かせたのは。

それ以来頭の中でサムの事が気になって仕方なかった。別れ際に

最後に残っていたあの一言が、どうしても頭から離れなかったからだ。

（お前も、何か探し求めたまま一生過ごすつもりか？）

それが、ケイトをゴッドイーターになるきっかけをつくった、ほんの一言だけ。それだけでも、ケイトが今まで見つけれなかった答えの一步を踏み出し、そして疑問に思う。

一体、コイツは私の何を……

> i 3 6 3 6 2 — 3 0 8 6 <

（ほら、ケイト。）

サムに眼末しているケイトに横からクリストファーが注意をかける。ハッと我に返ると、首を振り背筋を伸ばして敬礼し、紹介を述べる。

「あ……本日持って、貴方方第1部隊に配属となりました、「ケイト……

——ピリリリ、ピリリリリ——

「あ？」

途中、どこからか端末の着信音が周囲に鳴り出す。

ケイトは探ろうとするが、未然に音源の位置はサムのコートの中に着信音を鳴らす端末機を取り出した時から理解した。誰からだと言に眉を細めながら端末を見つめると、その画面に映し出される名前に、しぶしぶと端末機のコールボタンを押し耳にあてる。

「おう、俺だ。」

『サムさん、何とかミッションを受注しておきました。』

「場が悪いっつーの、ティアナ。てか近いんだし直接来いよ。」

『この場から離れないのが受付のお仕事ですから。それより内容

ですが、討伐対称が……」

「……ああ、りょーかい。わーた。とりあえず新人をそこに連れてってやるから、挨拶しとけよ。」

その会話にケイトは隣のクララに通話の相手をボソツと聞き込んだ。

「ティアナ？」

「受付嬢、オペレーターを並行に仕事してる人です。」

「それも、口調があれだが、かなりの美人ちゃんらしいぜ。何でもサムのおっさんに……」

途中、ケイトにひそひそと話していたロンメルは突然口を止めた。既に会話を終えて端末をしまいこんだサムが、鋼鉄の眼帯の中心にあるセンサーが、ロンメルにしかつと捕らえながら、静かに歩いて向かってくる。

蛇に睨まれた蛙、とはこのことか。サムに睨まれたと思っているロンメルは引きつった顔で硬直する。がサムはロンメルをスルー、代わりにケイトと3mぐらい前まで止まる。そのケイトは、サムの威圧なプレッシャーを本人から感じ取り、思わず額に汗を1滴流し、後ろに退こうとした足を一步も動かさないよう耐えてはいる。しかしこのまま浴び続けられ押し潰されそうな程の圧迫感が、全身に迫ってくる。

一体何をされるのかと、心の中で呟きながら警戒を保つ。が

「おい、ボウヤ。」

「女だ！」

いきなりふざけた台詞を告げるかと思っただ、ケイトの突っ込みをスルー。

「突っ込むのは後な。忘れてたってか、頼まれてな。とりあえずこの新人の為に軽いミッションを受注しとけて、アウグスティーンの命令でな。」

「ミッション？」

「ええっと、要するに……アラガミとの実戦です。」

聞きなれない単語にキョトンと頭を傾ける。クララが軽く説明してくれたのか理解した。だがそれが何を意味するのかは聞きそびれたのか、分かっていなかった。

「そしてお前もそれに参加するように、てさ。」

「……参加？」

若干だが、背筋に悪寒を感じ出した。

「たく……奴らと戦うことだ。」

「へえ、そうなんだ。……てやっぱりい！？」

暫くの沈黙の後に、ケイトは驚く。神機使いがアラガミと戦うのが使命とは既に分かってはいたが、まさかたった二日目に早くも任務に出されるとは、予想もしていなかったのだ。同時に、今日は過酷な訓練を何度も行われた後は、実戦に入るなど、拷問だとも思えない訳がない。

「驚く程もないだろ、「新型」君。これでも訓練とかは受けてるはずなんだろ？」

「いや、それはそうだけど……すぐつてのはどうかと思うんだが……。」

「ああ、ついでに言うておくが、お前一人で行く訳じゃねえ。ちゃんとインストラクターのこいつ等付きのサービスは施してある。」

冷静なサムが親指でロンメル達を指す。ロンメルはマントと髪型を整い直し、クララはエントランスの真ん中にある出撃用エレベーターのスイッチを押し、リーはただ精神統一に瞑想している。

「ま、そう言う事。」

「初の実戦になりますけど、大丈夫、私達がカバーします！」

「ま、死なないことを専念するんだな。」

そう言うつと3人は速効に到達したエレベーターに先に乗り込み、そのまま地下に降下していった。

ただ啞然と置いてかれたケイト、そしてクリストファー、サム、

ベラルを残して……。

「実戦つてことは……訓練とは違って、ガチバトル？下手したら……死ぬ？」

「神機使いも恐れぬガキが、アラガミ相手だとびびんのか？」

「んだと！？……て、何でアンタはいかねんだよ？」

何故か、本来新米の訓練ぐらいなら付き合うだろう、隊長であるはずのサムがこの場に残っていることに疑問に思う。先程までのサムの様子からして、ただ面倒でやる気がないだけかと解釈するが、
「それはの。」

説明する気がないサムの代わりに、ベラルが申し出る。

「サムはな、あの時の居住区襲撃を収集した後にな……刀身ぶっ壊れたんや。今修復中で当分実戦に出れへんで。」

「だから俺はタダ休みしてるって訳だ。分かったらとつと行け。」
つまり、今は戦えない状態だった。それでも半分疑惑に感じながらも、渋々と納得する。そうしてるあまり、既に3人を降ろしたエレベーターがゲートを開いて待機していた。

既に3人より遅れていたことに自覚したケイトは、エレベーターに乗り込もうとするが、ハッと何か気づくとベラルに振り向きなます。

「神機は？」

「最後やった訓練の時の武装のままやで。ちゃんと点検はしといたから、安心せい。」

「そうか。それなら……」

「それと！」

「？」

「ワイの武装を使う時点で、一つ重要な事があるで。」

普段のベラルとはかけ離れた急に真剣な表情でケイトに注意をかける。何故かいつの間にかゲジ眉の飾りを付けながらだが。

「ワイ特性神機パーツ、大事に扱えや。」

ああ、とそんなことかと思いながら返事を返して頷き、すぐさまエレベーターに乗り込む。それを遠くで見守るクリストファーとベラル、そして……

「おっしや、新人ボーイ。これから面倒になるが初任務に行くぞ。」
「……だから女だつてのー!!」

明らかに行く訳がない矛盾と性別の間違いの台詞を捨てるサムに突っ込むが、それを終えた時点にはエレベーターの扉が瞬きの間もせずに閉め、そのまま地下に降りていった――。

「大丈夫かな……?」

「心配ないやろ、クララはん達がついてるんならな。それよりつとと済ますで、サム。」

「まあ、そうだな……と。じゃ、細男。後よろしく。」

その場に「いや、名前……」と呟くクリストファーを残し、二人は別のエレベーターに乗り込む。

その間際、サムがケイトが乗り込んだエレベーターに視線を向いていたのは、誰も気づくこともなかった――ッ。

(ま、確かめさせてはもらうがな……。)

D a s n ? c h s t e M a i 「神殺し、そして喰らう者」

第16章 第1部隊配属（後書き）

次回は……そのまま実戦に入ります。そして3人のオリジナル神機も公開しますぞ！！

ただしサムは留守番になりますが。サムファンよ、そこはとりあえず出番まで待つて下さい……。

第17章 神殺し、そして喰らう者？（前書き）

本部の計画とドイツ支部の意向で、初の新型神機使いであるケイト・ローデンバーグが護衛の第1部隊と共にアラガミとの実戦を行うことになる。果たしてケイトが目の前にしたのは――

第17章 神殺し、そして喰らう者？

「純白の城下町」。別名「サンスーシ宮殿」。アラガミ襲撃によって歴史ある文化が崩れ去っていた街の一つでもある。

特にこの場合はドイツ支部に入隊した神機使いに成り立ての若者、新人達が最初に訪れることが多いのが有名だ。ほとんどの者はここから初任務で訪れ、アラガミを殺しゴツドイターとして初デビューを果たすか、または名も知られずにアラガミに喰われて死んでいくかという、どちらに訪れるかの、過酷な選択場だ。それを乗り越えた者だけが、最強と名高いドイツ支部の戦場の一步を踏み出すことになるのだ。そして今日もまた、一人の新人が時の判決を試されるのだ……。

今にも崩れそうに古びかけた門の入り口前に、ロンメル達が乗ってるジープが騒音を鳴らしながら向かってくる。

入り口付近で停車し、4人はジープから一斉に降りだす。踏みこんだ地にわずかな砂煙が足を覆う。

「おっし、着いたぞ。」

「これが……外の世界。」

4人がギターを収納するケースに似た大物を効き手に持ちながら、ロンメルの指示でそれぞれ周囲の確認を念深く確認、終わるとアイコンタクトで一斉に門限に進み始める。

- ようこそ、喰神の世界へ -

通り抜けようとする門から、そう呼びかけているみたいな錯覚がケイトの脳裏に横切る。気のせいかと思うが、門を抜けた先にその答えがすぐに理解した。いや、あまりにも信じきれないほどの光景を、目にしたに過ぎない。

そこは、荒れ果てた城下町だった。それも所々、食い荒らされた後が残ったり、アラガミの強大な力によってへし折られた建物が道路を阻んだり、荒れ果てた、だけでは言い切れないほど凄まじい光景だった。

「おい、置いていくぞ。」

絶景に目を取られてる最中にロンメルの声が聞こえ、我に返る。気がつけば、ロンメルを先頭に全員、城下町直前まで進んでいた。一人置いてかれたケイトは慌ててロンメル達に向かって走って追いつき、揃ったところで再び城下町内を進み始める。

かつて人々が溢れていた跡を無様に食い荒らされた跡しか残っていない城下町内を慎重に進んでいく。

建物の傷跡からアラガミに襲われた人々の叫びが聞こえそうな雰囲気だ、とケイトは進んでいく内に無意識にそう感じるが、深呼吸しながら落ち着きを保らせている。

――無残すぎる――

「これが、神父が言っていた、美しき外の世界の成れの果てなのか――

そのせいか、ケイトは無意識に周りを眺めながら他より徐々に1列遅れ、最後尾だったクララと隣合わせに並びながら歩いていたことを、声がかかるまで気づかなかった。

「大丈夫ですか？」

「え、あ、ああ。何とか。」

ハッと再び我に返る。また油断していたと、緩んでいた警戒の態勢を整い直すケイトにクスツ、とクララは微笑^{ほほえ}む。

「外を見るのは初めてでしたよね、ケイトさん。」

「あ、ああ……。まあそうだな。」

「どうです？初めての外の景色は。」

「まあ、外は広くて様々な文化が繁栄してるって神父から聞いてい

たんだが……話とは全然違いすぎる程、酷い有様だ……」

「当たり前さ。今となってはもう、そんな過去のおとぎ話に過ぎないからな。」

余計な一言にムツと頬を膨らますが反論する言葉が一言も出なかった。現実をあまり知らない神父、子供達とは違い現実を一番に理解しているケイトには、アラガミという存在だけでこうなっていることは分かっている。だが、實際目の当たりにすると神父が懐かしがるのも分からなくはないと内心、静かに悟った。

皮肉そうにロンメルが呟きながら、宮殿に指を刺す。

「見ての通り、外の世界は確かに広いが、あのアラガミどもが文化関心を無関心で喰い尽して、今となってはその「食べ残し」しか残ってない、荒れ果てた様になっちまった。それでもアラガミはまだ捕食本能を赴くままに、喰い続けているけどな……」

ロンメルの実実を突きつける呟きが、ケイトに重く突き刺さった。神父やその世代の人間が住んでいた外の世界も、今となっては過去の幻想ゆめごとに過ぎないことだと。

もう、ドイツの美しい自然や歴史ある建物が二度とここで見れないのだ。アラガミに怯え追われた人々が絶望する理由の1つも、それに当て嵌まっている。

「じゃあ、アンタ達はこの悲惨で過酷な外に出て、毎日アラガミを倒しているのか？」

「アンタ達、て新人にしては言い草が悪いぞ、お嬢ちゃん。ま、もろその通りだな。」

「……あの、お嬢ちゃんてやめてくれない？」

それは悪かったな、とシュートサインでケイトにバン、と撃つ仕種で謝る。もちろんふざけているのかと、不機嫌な顔を膨らまして応えるが。

途中、行き止まりとなる崖に全員が立ち止まる。そこからは、先ほどの城下町内と違って、宮殿を中心に広大な廃墟と化したエリア全体を一望できるほどの絶好の眺め場だ。

「新人。ここがこの「純白の城下町」の「スタート地点」だ。この先にアラガミが潜んでいるから、今のうちに準備はしとけよ？」

「それならとづくに済ましてある。」

「さっすが。」

気安く話しかけるロンメルにウザがれながら、その場でケースをひとまず置きウォーミングアップを始める。

「さて、おっさん（サム）からの任務確認だ。」

端末機を取り出し、改めて画面に映し出されてるサムが受注したミッションの内容の確認をした。

— 鬼魚 —

— 純白の城下街にて多数のアラガミが出現。新型神機使いの為に扱えるミッションはこれで一番簡単なレベルだ。今回初実戦になる貴重な新型の身の安全を優先に、各員は慎重に討伐せよ。下記のアラガミは火と雷属性が有効だ。

討伐対称　オウガティル×4、グボロ・グボロ×4。ただし当エリアから3キロ離れた所にコンゴウの群れが確認されたので、乱入に備えて警戒せよ。—

ほんの2、3秒で端末機の画面を切り。マントの中のポケットにしまいこむ。これで簡単かと、苦笑しながら首を傾ける。

正直、新人にはあまり良いミッション、とは思う訳がない。

「とのことだ。たく、新人には少々厳し過ぎじゃない？」

「そうですね…。」

途中聞き覚えの無いアラガミの名前で汗を流すケイトを見つめながら、心配そうに貝殻をしたネックレスを握り締めるクララ。

「最近、ドイツ周辺のアラガミの数が減ってきたおかげで、あまり良い任務が取れないですよね…。」

「逆に世界中の大半のアラガミが極東に集まってきては、凶暴にな

つてる話だし…。あゝあ、俺も極東に行ってこようかな？そっちの方が稼ぎやすいし、英雄になりやすいと思うし。」

「だったらそこに行け。」

裏切り者を軽蔑するリーを無視するロンメルだが、それが冗談とは言いきれない。

そう、ケイト以外は誰もがその事大には気にしている。

同時にドイツ支部が外部居住区に配給を遅れなかった理由の一つでもある2年前からだ。

2067年から極東支部が人類救済と存続の為に、極東支部から50キロ離れた人工島に「エイジス計画」の実行とその準備を全支部に公表し、建設を開始した。と同時に、突然世界中に生息していたアラガミが極東支部に集まり始めては凶暴化している。何故そのようになったのかは分らないが、アラガミが人類の盾エイジスを破壊しに来たのかもしれないと、誰もがそう思い込み始めた。おかげで極東支部はアラガミとの激戦区に変貌し、瞬く間に世界中で有名な地になった。戦力では最強と謳われたドイツ支部も、アラガミの目撃率が例年より低下しているせいで原料となる「コア」回収率も減少し、支部全体にその影響が出ている。外部居住区に配給が回れなくなったのはこれも範囲内でもあった。

特に彼ら、神機使いは任務を受注し、アラガミを倒してそれで報酬を得て生きている身になると、「楽」はなれるが稼ぎが悪くなる、その傾向になりやすくなるのだ。つまりは、私達の現実でいう「不景気」。

「さて、それは放つといて、と。今回のミッションの最重要目標は、お前だ、新人君。」

「おい、待ってくれ。せめて名前！」

「あ、スミマセン、肝心な時に途切れたままでしたよね…？」

「言い忘れていたが……「ケイト・ローデンバーグ」だ。」

「おう、ケイトちゃんか。」

「後「ちゃん」付けはやめてくれ。」

わがままだな、軽く頷きながら謝るが咄嗟に仕事モードに切り替える。

「とにかく、俺とロンは先攻にグボロを始末。少し時間を置いて後から来るクララちゃんは、まだ慣れない新人を援護。後、肝心の新人は……ただオウガテイルだけに専念してくれ。ついでに念のために全員、コンゴウ乱入には気をつけとけよ。」

それじゃ、とロンメルとリーは先に崖から飛び降りてエリア内に進み、姿が見えなくなるまでクララ達はその場で見送った。

1分もせず、ウォーミングアップをひとまず終えた後、ケースを持ち、張り切りだす。

「……よし。それじゃ、行きますか！」

いざ行かんとするが、咄嗟にクララがケイトの右手を掴み止める。

「あれ？」

「ケイトさん、少し緊張してますよ。」

「え？」

試しに自分の肩を叩いてみると、確かに普段より肩が上がり、硬くなっている。

「体が緊張していると、自分の思うように動けないのですよ。ほら、リラックス、リラックス……」

緊張感を解そうと、ケースを一旦足元に置き、ケイトの肩を優しくマッサージしてリラックス……のはずだが

「うっげえ！イテテテッ……！」

クララのマッサージする手があまりにも強力で訳ではないが、普通に指に力を入れすぎている為、悲痛を出さずには得られなかった。

「きゃあ！スイマセン、大丈夫でしたか！？」

「ああ、肩が、肩が……アンタ、ひょっとして不器用なのか？」

躊躇もなく唐突にその言葉を告げる。見事に予想が的中し、痛める肩を抑えこむケイトを後ろに振り向き、体が小振いだす。

「ええ、そうなんです…。」

今も泣き出しそうに瞳がうるうると涙目を堪えている。悲しい、というよりまだ幼さが残ってる子犬みたいな可愛らしさが目立つが。「私、料理以外はあまり、皆さんほど上手くできなくてつい迷惑を掛けてしまっんです…。」

「ああ…。」

「でも今日、私達の部隊に新人、しかも女の子が入ってくると聞いて私、嬉しくなって張り切っていたんです。」

（だから、あいつ等と違ってあんなに優しくしてくれたのか……。）
「だからせめて、新人のお世話だけは役立ちたいと思って張り切ってたのに……またはしたくないことをやってしまっって……」

結構が弱いお嬢様だな、と啞然するが更にクララを傷つけるかもしれないので、心の中で呟く。同時に、恐らく自分より心優しい女かもしれない、ふとそう実感する。しかし相手は自分より神機使いとしては経歴がある先輩。そんな頼りになる先輩がこんな痛々しい様子をいきなり新人の目の前で晒されると、あまりにも見ても耐えられなくなる。最もケイトが気にしていることを突き刺した原因が自分なので、もう黙って聞いていられなくなり、

「あゝもあゝ、分かった…。ゴメン！……でも、」

泣き出す寸前までのクララに肩を揺すりかけ、謝る。肩の痛みも大したことではなかったのでブンブンと振り回して、回復をアピール。

「おかげで緊張が少し解れたと思うよ。アンタの……おかげで。」
「……本当、ですか？」

ああ、と素直に答える。少しだけか、クララの表情に明るさが取り戻し地に落ちた膝に力をいれ、ゆつくりと立ち上がる。

「……すみません。私、あなたより先輩なのに、こんなお恥ずかしいところを……」

「気にすんなって。無事帰ってきたら…そうだな、どうしよう？」

せっかくクララに謝罪のお詫びを考えようとしたのだが、よく考えればまだフェンリルに入隊したばかりで詳しい訳でもないから、全く思いつかずに空振りに終る。普段なら気軽に教会で食事とか誘うのだが、さすがに神機使いとなるとそうはいかないから必死に他の方法を考えるが

「それは、無事この任務から帰ってきてからにしませんか？」

ニコッ、と先ほどの泣きっぷりが何処に行ったのか、エントランスで最初に自己紹介してもらった時の可愛げなスマイルをケイトに向ける。

「…ああ、そうだな。」

優しい笑みのクララに、思わず頬を紅潮して照れながら苦笑する。いつもみたいに励ますつもりか、逆立場になるとは、思いもしなかった。

ふつと、遂にはおかしくなりしばらく互いに笑い合った。神機使いでも、クララやケイトみたいにこんな優しく、愉快なのがいるとどうしても心がわき踊り、つい共感し、心良く、そして自然に仲良くなった。

ケイトもアスカに続いて、信頼できる友が、クララは同じ女性の友達ができた嬉しさには満足するまではじけなかった。

ようやく納まったところで、二人は笑顔で握手を交わし、

「……何とぞ、よろしく願います。」

「ハイ、よろしいです。」

ここで共に戦う仲間として、友達として誓い合う二人。そして目標が潜んでいるエリアに視線を向け。

「……さあ、行きましよう！」

「おう！私の初任務……張り切って行くぜ！！」

ようやく、ケイトとクララ、二人の少女はエリアに向かって崖から飛び降り、ようやく足を踏み入れた。

「……いたぞ。」

「言われなくてもな。」

二人ぐらいはスッポリと入れる瓦礫の中に、ロンメルはその隙間から視界を見渡し、対象のターゲットを捉えた。

「Hエリア」の近くの水辺に巡回する、2匹の大魚が。

外見としてはピラニアに近いが、額に砲台、陸を這いずり回るために発達した巨大なヒレに腕、何より身の丈より巨大な顎と、喰らった獲物を跡形も無く噛み千切る程の鋭い牙が、そのアラガミの特徴でもあった。

ターゲット
討伐対象である「グボロ・グボロ」だ。

グボロ・グボロは聴覚、視力のどれも低下なので簡単に不意打ちをかけやすいが、二人はその出方を狙って潜んでいる。

「良いか、いつも通りに頼むぜ、リーちゃん。」

「黙ってる。」

「ハイハイ……。」

駄目だこりゃと、グボロに陰悪に睨みながら見つめ続けるリーの態度にロンメルは渋々と黙ってケースの汚れをハンカチで拭き取る。

同時刻

グオオオ……

「……！」

「今のは……」

突入してから数分後、建物に囲まれた「Cエリア」での搜索中に

唸り声が聞こえた。それも、ケイトには聞き覚えのあるものだ。

「います。」

「ああ、分かってる。」

姿がどこにも映らず、二人は背中合わせて周囲を警戒する。

まだ唸り声が続く。それもこの近辺に。じつくりと、唸り声の方向を元にその主を、くまなく目を動かし周囲を探っていく。

しかしどこも変わった様子がない。僅かに影が廃墟の中に飲み込まれていく瞬間までは。

「そこか！」

それに気づき先攻に出たのは、ケイト。ケースがバカツと真つ二つに割れ、その中から収納状態の神機を脳内の指示通りに銃身に変形させ、左方向の廃墟に向かって爆発系のバレットを撃ち出す。

着弾の直前に廃墟から影が飛び出して逃れ、二人の目の前に着地する。

予想通り、討伐対象の「オウガテイル」。

しかもそれに合わせて建物に隠れていたオウガテイルも現れ集まってくる。ターゲット通り4体はいる。

「どうやら、あちらから仕掛けてくるようですね…。」

「ああ、その分手間は省けるが…」

油断はできない。キラ達の訓練から何度もしつこいほど相手にしてきたアラガミだ。オウガテイルは低級レベルのアラガミで慣れているが、今いるオウガテイルは単なるプログラムから作られた擬似ではない。目の前にいるのは紛れも無く外部居住区を襲った時と同じ、本物で、それも複数もいる。

ここで負ければもちろんアラガミの餌となり生涯を終えることになる。だからこそ不安と緊張感がケイトの全身に走るが、

「ケイトさん、ここは貴方に陽動を任せます。」

「陽動？」

「ええ。」

「そろそろだ。」

「OK。じゃ、いつも通りだな。」

「……足を引っ張るな。」

「一人よりはマシだろ？それに俺を何年戦つてると……おい！」

思つてゐるんだ、と言い掛ける前にリーは飛び出し、グボロに駆け付けていた。

「たく、せつかく俺との共同任務だつてのに、相変わらずぶっきらぼうだな。」

独断性のリーに困りつつも、どこか嬉しそうに見送っていた。

「ま、その方がやりやすいしな！」

得意げにそれを言い終えると、ロンメルは反対方向に、ビル4階分はある廃墟に一気に駆け上っていく。

「つまり、私は前衛で陽動、クララが援護射撃か。」

「昔からの神機使いの基本戦闘ですから。ある程度訓練で教わつたと思いますが、行けますか？」

「OK。代々分かつたよ。私は体を動かして覚える派なんでね。」

「それと、」

「？」

今も準備万全のケイトを呼び止め、

「無理は、なさらないで下さい。」

心配してる顔で、注意付けた。それは、絶対生きて帰ろうと、クララの性格上にそう解釈した。

もちろん、ケイトはその倍で返す。こんなところで、死んでたまるか。

「ああ、大丈夫だ。援護を頼むぜ、クララ先輩……！」

張り切つた調子で答えると、一度も視線を逸らさないオウガテイルに目に止まらぬ速さで走り出す。

その場に残つたクララは、一旦深呼吸を2回繰り返して落ち着きを整い直す。戦闘前の癖で、常に自分に落ち着きと冷静な判断を下せ

るための対処法であり、日常の癖にもなっている。と、あの可愛い瞳が、真剣な眼差しと同時に冷静に変わっていたのは、ケイトも気づいてない。

「では……」

「よつし。着いた着いた。」

1分もしないでロンメルは廃墟の屋上に辿り着き、つかさず脆くなった鉄骨柵からリーの様子を見渡す。丁度リーがグボロに不意打ちを仕掛ける寸前に、ロンメルはケースを空に向けてかがける。

「さあつて、今回もロンメル様の、英雄伝説の1ページを……」

「邪神どもか……」

憎しみと怒りを込めた言霊にグボロ・グボロに向けて呟き、徐々に一頭のグボロ・グボロとの距離を縮ませていく。

聴覚の薄いグボロ・グボロはリーの駿足な駆け足の音に全く気づかず目の前のご馳走、壁の捕食中に夢中。

その光景が、気に喰わない、そんな目つきで睨みながら、ケースを左手から右手に荒々しくも持ち帰る。

「アラガミは……全て俺が殺す。それが俺の……」

「参ります……!!」

「刻んでやるぜ……!!」

「使命だ……!!」

同時に戦闘態勢に構えたその時が同時に、3人のケースが一斉に割れると、中から収納していた神機が現れ、今戦いの幕を上げだした――。

D
a
s

n
?
c
h
s
t
e

M
a
l

「神殺し、そして喰らう者?」

第17章 神殺し、そして喰らう者？（後書き）

もうすぐ今年が終ろうとしている……。

長かった……。思えば、5月から始まって今日まで、たくさんの人達が、気に入りに登録してくれた人達が私が始めて公表した作品を見てくれて、本当に嬉しく思います……。これからも、ケイト、第1部隊、その他（後私も）の活躍を、どうか温かい目で見届けてください。

皆様が満足していただけた数だけ、私は立ち上がり続けていき、書き続けていくから。もし不満点、文句があるのでしたら、遠慮なく書いてください！全部受け止めて、肥料にして上達します！！（でも、やりすぎは遠慮してね……）

後、来年には遅れると思いますが、出ますよ、3人の神機が！挿絵つきで！

それでは皆さん、良いお年を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2868t/>

GOD EATER LINK

2011年12月27日06時50分発行